

2026 年度入学生用
(令和 8 年度)

文学部要覧

教育目的・履修要項など



大阪公立大学文学部

この『文学部要覧』は、2026 年度入学生を対象とし、卒業まで適用します。

※在学中に変更することもあります。変更点は、学生ポータル (UNIPA) に掲示するので常に確認してください。

目次

文学部の教育理念・目的・目標	1
学科・コース案内	9
大学院案内	42

履修要項

1. 学科等の名称、卒業時の学位、入学定員	43
2. 学年・学期・授業期間等	43
3. 授業時間	43
4. 授業科目の種類	44
5. 授業科目の単位、単位制	44
6. 文学部概要	45
(1) 文学部を卒業するための単位数	
(2) 学科・コース選択	
(3) 第3年次への進級	
7. 履修課程と履修上の注意	48
(1) 必修、選択および自由科目の区分	
(2) 基幹教育科目	
(3) 専門科目	
(4) 資格科目	
(5) 副専攻科目	
(6) 卒業論文と前期終了時卒業	
(7) 遠隔授業	
(8) 集中講義	
(9) 履修に関する相談	
(10) 他学部・学域履修	
(11) 科目名称	
(12) キャンパスをまたぐ授業の履修	
8. 科目ナンバリング	56
9. 履修登録	56
(1) 履修登録	
(2) シラバス	
10. 成績評価・試験	57
(1) 成績評価方法・単位の修得	
(2) 定期試験	
(3) 追試験・再試験	

11. 成績評語と GPA 制度・CAP 制	58
(1) 成績評語と GPA 制度	
(2) CAP 制	
12. 定期試験受験心得	59
13. 成績評価についての異議申立	60
14. 単位認定	60
(1) 既修得単位の認定	
(2) 外部試験等による外国語の単位認定	
(3) 他大学における授業科目の履修による単位認定	
15. 他大学との単位互換・単位認定制度	61
16. 休講・欠席	61
(1) 気象条件の悪化、交通機関の運休等による授業の休講および定期試験の延期措置	
(2) 授業欠席時の取扱い	
17. 転学部（学域）・転学科（学類）等	62
18. 学籍	62
(1) 修業年限	
(2) 在学年限	
(3) 学年進行	
(4) 休学	
(5) 復学	
(6) 退学	
(7) 除籍	
(8) 再入学	
(9) 留学	
19. 修学上の配慮・支援	64
20. 教育学習支援基盤「ていら・みす」での学修記録の記入	64
21. 生成 AI の利活用に関する学生向けガイドライン	64
22. 基幹教育科目 標準履修課程表	65
23. 文学部専門科目表	66
24. 文学部共通専門教育科目	83
25. 教職課程の履修方法	83
(1) 取得することのできる教育職員免許状	
(2) 教職課程科目の履修	
26. 博物館学芸員課程の履修方法	84

文学部の教育理念・目的・目標

■教育理念（文学研究科・文学部学術憲章より抜粋）

- ・人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、人間、社会、文化、言語の諸事象とそこに内在する普遍性を探究する。
- ・人間、社会、都市、文化をとりまく今日的課題の解決に貢献し得る人文科学・行動科学の構築をめざす。
- ・先端的研究成果をグローバルな視野から情報発信できる国際的競争力を備えた最高水準の教育・研究をめざす。

■教育目的（文学研究科・文学部学術憲章より抜粋）

高度知識基盤社会がグローバルに広がる現代世界において、自身の価値と可能性への認識と、あらゆる他者への尊重を基にした多様な人々との協働によって、一人ひとりの豊かな人生を切り開くとともに、持続可能な社会創造に貢献しうる人づくりをめざす。

[各学科の教育目的]

- ・哲学歴史学科
学部の目的を哲学歴史学の立場から実現すべく、人間の歩みと思索の過程を考究し、人間に対する洞察力と歴史への理解を基に、未来を展望することができる人づくりをめざす。
- ・人間行動学科
学部の目的を人間行動学の立場から実現すべく、人間や社会を理解するための科学的方法を身につけ、人間行動や人間を取りまく事象を様々な視点から考えることができる人づくりをめざす。
- ・言語文化学科
学部の目的を言語文化学の立場から実現すべく、人間が創り上げてきた言語・文学・文化を深く理解し、自文化、異文化の双方を見通しながら、新たな文化の創造に寄与することができる人づくりをめざす。
- ・文化構想学科
学部の目的を文化構想学の立場から実現すべく、文化に対する深い理解をもとに、新たな文化表現の創出や多文化共生的価値の構築を希求しながら、文化を社会的実践へと結びつけることができる人づくりをめざす。

■教育目標（以下、文学部ディプロマポリシーを参照）

■ディプロマ・ポリシー

全ての学生が、[知識・理解] [技能] [態度・志向性] [統合的な学修経験と創造的思考力] の領域で以下のような学修成果を修めることをめざす。

[知識・理解]

- ・人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができる。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、人文科学・行動科学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができる。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、人文科学・行動科学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができる。

[態度・志向性]

- ・人文科学・行動科学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できる。
- ・人文科学・行動科学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

・人文科学・行動科学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができる。

また、文学部では、卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができる。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができる。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができる。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができる。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができる。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができる。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができる。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができる。

【哲学歴史学科】

人間の歩みと思索の過程を考究し、人間にたいする洞察力と歴史への理解を基に、未来を展望することができる人を養成する。

[知識・理解]

- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができる。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、哲学・歴史学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができる。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い哲学・歴史学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、哲学・歴史学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができる。

[態度・志向性]

- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができる。

また、哲学歴史学科では、哲学・歴史学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が哲学・歴史学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができる。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができる。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができる。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができる。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができる。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができる。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができる。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができる。

【人間行動学科】

人間や社会を理解するための科学的方法を身につけ、人間行動や人間を取りまく事象を様々な視点から考えることができる人を養成する。

[知識・理解]

- ・人間行動学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができる。
- ・人間行動学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができる。
- ・人間行動学の方法や考え方を通して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができる。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、人間行動学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができる。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い人間行動学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、人間行動学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができる。
- ・人間行動学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができる。

[態度・志向性]

- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できる。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができる。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できる。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができる。

また、人間行動学科では、人間行動学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が人間行動学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができる。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができる。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができる。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができる。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができる。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができる。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができる。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができる。

【言語文化学科】

人間が創り上げてきた言語・文学・文化を深く理解し、自文化、異文化の双方を見通しながら、新たな文化の創造に寄与することができる人を養成する。

[知識・理解]

- ・言語文化学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができる。
- ・言語文化学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができる。
- ・言語文化学の方法や考え方を通して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができる。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、言語文化学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができる。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い言語文化学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、言語文化学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができる。
- ・言語文化学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができる。

[態度・志向性]

- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できる。
- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができる。

- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できる。
- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できる。

【統合的な学修経験と創造的思考力】

- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができる。
- また、言語文化学科では、言語文化学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が言語文化学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。
- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができる。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができる。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができる。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができる。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができる。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができる。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができる。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができる。

【文化構想学科】

文化にたいする深い理解をもとに、新たな文化表現の創出や多文化共生的価値の構築を希求しながら、文化を社会的実践へと結びつけることができる人を養成する。

【知識・理解】

- ・文化構想学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができる。
- ・文化構想学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができる。
- ・文化構想学の方法や考え方を通して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができる。

【技能】

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、文化構想学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができる。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い文化構想学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、文化構想学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができる。
- ・文化構想学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・読解・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができる。

【態度・志向性】

- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できる。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができる。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できる。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できる。

【統合的な学修経験と創造的思考力】

- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができる。
- また、文化構想学科では、文化構想学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が文化構想学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。
- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができる。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができる。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができる。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができる。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができる。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができる。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができる。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができる。

■カリキュラム・ポリシー

文学部では、人文科学・行動科学の方法や考え方を通して、[知識・理解][技能][態度・志向性][統合的な学修経験と創造的思考力]の領域で学修成果を修めることができる多種多様な授業科目を用意し、人文科学・行動科学の基礎となる原典、史料、文献などを調査・読解する能力を鍛え、批判的、創造的に問題に取り組む能力を培う。その際、少人数教育を通して時間と空間を共有することを活かした学修環境を提供し、とくにきめこまかな卒業論文の指導を通して、学士にふさわしい人を育成するために、哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科、文化構想学科の4つの学科による教育課程を編成する。

なお、文学部で学ぶ学生の学修成果を適切に把握するため、「大阪公立大学における教育の内部質保証に関する方針」に従って、アセスメントポリシーとアセスメントリストを定め、複数の評価指標・方法を用いて、定期的に教育カリキュラムの学修成果の評価を行う。

また各科目の学修成果は、科目の到達目標の達成状況を基準にした成績評価ガイドラインを定め、それに則した成績評価を行うことで評価することとし、科目の到達目標および評価方法・評価基準はシラバスに明記する。

【哲学歴史学科】

人間の歩みと思索の過程を考究し、人間にたいする洞察力と歴史への理解を基に、未来を展望することができる人を養成するために、以下のとおり教育課程を編成する。

[知識・理解]

- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができるようにするために、基礎から応用まで段階を踏んで学んでいく体系的な講義科目を編成する。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・哲学、日本史、世界史の3つのコースモデル群を設定して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができるようにする。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数外国語を用いて、哲学・歴史学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができるようにするために、基幹教育科目の英語科目および初修外国語科目を配置する。専門科目にて中国古典語、ギリシア語、ラテン語の科目を配置する。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い哲学・歴史学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、哲学・歴史学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができるようにするために、哲学、日本史、世界史の3つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができるようにするために、多様な演習科目を配置し、卒業論文研究につなげる。

[態度・志向性]

- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できるようにするために、基礎教育科目や1～2年次に配当する学科必修科目を通して、社会における学問の役割を考えさせる。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができるようにするために、少人数教育の特長を活かして、演習科目を中心とした教育課程や課外の活動を通してきめ細かに指導する。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できるようにするために、哲学、日本史、世界史の3つのコースモデル群を設定して、それぞれの専門分野が対象とする諸問題を通して具体的に指導する。
- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できるようにするために、哲学、日本史、世界史の3つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせて卒業論文研究へとつなげる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

- ・哲学・歴史学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができるようにするために、哲学、日本史、世界史の3つのコースモデル群の学修を基盤とした卒業論文研究をさせる。

このように、哲学歴史学科では、哲学・歴史学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が哲学・歴史学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができるようにする。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができるようにする。

- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができるようにする。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができるようにする。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができるようにする。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができるようにする。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができるようにする。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができるようにする。

【人間行動学科】

人間や社会を理解するための科学的方法を身につけ、人間行動や人間を取りまく事象を様々な視点から考えることができる人を養成するために、以下のとおり教育課程を編成する。

[知識・理解]

- ・人間行動学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができるようにするために、基礎から応用まで段階を踏んで学んでいく体系的な講義科目を編成する。
- ・人間行動学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・社会学、心理学、教育学、地理学の4つのコースモデル群を設定して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができるようにする。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、人間行動学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができるようにするために、基幹教育科目の英語科目および初修外国語科目を配置する。専門科目にて中国古典語、ギリシア語、ラテン語の科目を配置する。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い人間行動学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、人間行動学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができるようにするために、社会学、心理学、教育学、地理学の4つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせる。
- ・人間行動学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができるようにするために、多様な演習科目や実験科目を配置し、卒業論文研究につなげる。

[態度・志向性]

- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できるようにするために、基礎教育科目や1～2年次に配当する学科必修科目を通して、社会における学問の役割を考えさせる。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができるようにするために、少人数教育の特長を活かして、演習科目を中心とした教育課程や課外の活動を通してきめ細かに指導する。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できるようにするために、社会学、心理学、教育学、地理学の4つのコースモデル群を設定して、それぞれの専門分野が対象とする諸問題を通して具体的に指導する。
- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できるようにするために、社会学、心理学、教育学、地理学の4つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせて卒業論文研究へとつなげる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

- ・人間行動学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができるようにするために、社会学、心理学、教育学、地理学の4つのコースモデル群の学修を基盤とした卒業論文研究をさせる。

このように、人間行動学科では、人間行動学の分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が人間行動学の分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができるようにする。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができるようにする。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができるようにする。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができるようにする。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができるようにする。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができるようにする。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができるようにする。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができるようにする。

【言語文化学科】

人間が創り上げてきた言語・文学・文化を深く理解し、自文化、異文化の双方を見通しながら、新たな文化の創造に寄与することができる人を養成するために、以下のとおり教育課程を編成する。

〔知識・理解〕

- ・言語文化学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができるようにするために、基礎から応用まで段階を踏んで学んでいく体系的な講義科目を編成する。
- ・言語文化学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・国語国文学、中国語中国文学、英米言語文化、ドイツ語圏言語文化、フランス語圏言語文化の5つのコースモデル群を設定して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができるようにする。

〔技能〕

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、言語文化学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができるようにするために、基幹教育科目の英語科目および初修外国語科目を配置する。専門科目にて、中国語・ドイツ語・フランス語などのコミュニケーション科目、中国古典語、ギリシア語、ラテン語の科目を配置する。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い言語文化学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、言語文化学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができるようにするために、国語国文学、中国語中国文学、英米言語文化、ドイツ語圏言語文化、フランス語圏言語文化の5つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせる。
- ・言語文化学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができるようにするため、多様な演習科目を配置し、卒業論文研究につなげる。

〔態度・志向性〕

- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できるようにするために、基礎教育科目や1～2年次に配当する学科必修科目を通して、社会における学問の役割を考えさせる。
- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができるようにするために、少人数教育の特長を活かして、演習科目を中心とした教育課程や課外の活動を通してきめ細かに指導する。
- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できるようにするために、国語国文学、中国語中国文学、英米言語文化、ドイツ語圏言語文化、フランス語圏言語文化の5つのコースモデル群を設定して、それぞれの専門分野が対象とする諸問題を通して具体的に指導する。
- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できるようにするために、国語国文学、中国語中国文学、英米言語文化、ドイツ語圏言語文化、フランス語圏言語文化の5つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせて卒業論文研究へとつなげる。

〔統合的な学修経験と創造的思考力〕

- ・言語文化学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができるようにするために、国語国文学、中国語中国文学、英米言語文化、ドイツ語圏言語文化、フランス語圏言語文化の5つのコースモデル群の学修を基盤とした卒業論文研究をさせる。

このように、言語文化学科では、言語文化学分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が言語文化学分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができるようにする。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができるようにする。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができるようにする。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができるようにする。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができるようにする。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができるようにする。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができるようにする。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができるようにする。

【文化構想学科】

文化にたいする深い理解をもとに、新たな文化表現の創出や多文化共生的価値の構築を希求しながら、文化を社会的実践へと結びつけることができる人を養成するために、以下のとおり教育課程を編成する。

[知識・理解]

- ・文化構想学の方法や考え方を通して、多文化・異文化を尊重し、理解を深めることができるようにするために、基礎から応用まで段階を踏んで学んでいく体系的な講義科目を編成する。
- ・文化構想学の方法や考え方を通して、人間と文化、科学と技術、社会と歴史、環境と健康に関する知識を尊重し、理解を深めることができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・表現文化、アジア文化、文化資源の3つのコースモデル群を設定して、高度な専門知識を体系的に学び、それに基づき柔軟な思考ができるようにする。

[技能]

- ・日本語とひとつまたは複数の外国語を用いて、文化構想学の研究に求められる水準で読み、書き、聞き、話し、他者とコミュニケーションをすることができるようにするために、基幹教育科目の英語科目および初修外国語科目を配置する。専門科目にて中国古典語、ギリシア語、ラテン語の科目を配置する。
- ・情報通信技術（ICT）などを用い文化構想学の方法や考え方を通して、多様な情報を収集・読解・分析して適切に判断し、モラルに則って効果的に活用することができるようにするために、1～2年次に学科必修科目を配置する。
- ・情報や知識の複眼的、論理的分析に基づき、文化構想学の方法や考え方を通して批判的思考（クリティカル・シンキング）を行い、その結果を言語や記号で表現することができるようにするために、表現文化、アジア文化、文化資源の3つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせる。
- ・文化構想学の方法や考え方を通して、問題を発見するスキルや、解決に必要な情報を収集・分析・整理するスキルを修得し、その問題の解決に立ち向かう実践力を身につけることができるようにするため、多様な演習科目や実験科目を配置し、卒業論文研究につなげる。

[態度・志向性]

- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、自分で考え、良心に従い、社会のルールを尊重して自分の責任で判断し行動できるようにするために、基礎教育科目や1～2年次に配当する学科必修科目を通して、社会における学問の役割を考えさせる。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、他者と協調して行動でき、また、必要に応じて他者に方向性を示し、リーダーシップをとることができるようにするために、少人数教育の特長を活かして、演習科目を中心とした教育課程や課外の活動を通してきめ細かに指導する。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、地域をはじめとする社会の一員としての意識を持ち、持続可能な社会の創り手として積極的に関与できるようにするために、表現文化、アジア文化、文化資源の3つのコースモデル群を設定して、それぞれの専門分野が対象とする諸問題を通して具体的に指導する。
- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学習できるようにするために、表現文化、アジア文化、文化資源の3つのコースモデル群を設定して、体系的に学ばせて卒業論文研究へとつなげる。

[統合的な学修経験と創造的思考力]

- ・文化構想学の方法や考え方に基づいて、獲得した知識・技能・実践力等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決することができるようにするために、表現文化、アジア文化、文化資源の3つのコースモデル群の学修を基盤とした卒業論文研究をさせる。

このように、文化構想学科では、文化構想学分野における卒業論文を通しての学修を重視しており、全ての学生が文化構想学分野における次の学修成果を修めることをめざす。

- ・明確に課題を設定し、しっかりとした研究方法をもちいて論証することができるようにする。
- ・図書館の機能を十分に使いこなすことができるようにする。
- ・多様な他者と関わりながら論文を作成することができるようにする。
- ・先行研究や参考文献をよく読みこなし批判的に吟味することができるようにする。
- ・一次資料・データを広く収集・読解し、独自の観点から分析することができるようにする。
- ・適切に典拠を示しながら論述することができるようにする。
- ・具体例の吟味と抽象的な考察の往還ができるようにする。
- ・論理展開を明確にし、説得力ある文章で論証することができるようにする。

学科・コース案内

大阪公立大学文学部には、哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科、文化構想学科の4つの学科があり、15の履修コースを設けています。文学部の学生は、2年次からこのいずれかのコースに所属して、学修を進めていくことになります。

「学科・コース希望届」を提出する12月までに、この要覧のコース案内をよく読んで、慎重にコースを選択してください。1回生が学科・コースの内容をよく理解し、希望コースを決めていくために、文学部では下記のような日程でガイダンスを行い、情報を提供しています。

この要覧のほか、「大阪公立大学文学部ホームページ」等も参考にしてください。

コース選択のために知りたいことがあれば、ガイダンスに限らず随時、各コースのガイダンス担当教員あるいは1回生担当の教員に遠慮なく相談してください。

特定の学科・コースに第1希望が集中した場合、やむを得ない措置として、第1年次前期の成績に基づき選抜を行います。

4月初め	新入生カリキュラムオリエンテーション 学科・コース希望アンケート予備調査
6月上旬	第1回学科・コース決定ガイダンス 第1回学科・コース希望アンケート調査 (出席：教務委員、ガイダンス担当委員) アンケート調査集計結果の掲示
9月中旬～10月上旬頃	第2回学科・コース決定ガイダンス 第2回学科・コース希望アンケート調査 (出席：教務委員、ガイダンス担当委員) アンケート調査集計結果の掲示
10月中旬	コース別相談 (指定の日時・場所) (担当：各コースのガイダンス担当委員)
12月1日～12月10日 (曜日の関係で変更することがある)	「学科・コース希望届」提出 注：第1希望が各学科・コースの受入れ限度数より多い場合は選抜
1月下旬	学科・コースの決定通知 (掲示)

※別途、文学部・文学研究科教育促進支援機構主催の「学生によるコースガイダンス」を実施予定です。

哲学歴史学科

われわれは何者なのか？ どこから来て、どこへ向かって進んでいくのか？ 従来の文化的・社会的伝統の克服がときにさげられることもあります。しかし、わたくしたち人間が歩んできた道のりがどのようなものであったのか、人間とは何者であるのか、を理解することなしには、わたくしたち自身の未来の明確なイメージを描くことは、決してできないでしょう。

哲学歴史学科は、このような、いわば人間のアイデンティティーにかかわる根本的な問題について、ともに考えてゆくことをめざしています。

哲学コース / 日本史コース / 世界史コース

人間行動学科

情報化や国際化の波を受けて大きく変化していく今日、心の世界、人と人とのつながり、人と自然との共生といったことへの関心が高まっています。このような時代にあって、人間行動学科では、観察・調査・実験・フィールドワークといった科学的方法に基づいて、人間の行動、われわれをとりまく社会・環境、そして両者のかかわりについて、さまざまな角度から明らかにしています。

人間行動学科では、各コースそれぞれの学問分野を中核としながらも、それらを有機的に結びつけた独自のカリキュラムを提供することによって、「人」とその「環境」の複雑さを、さまざまな視点から理解していくことのできる人の育成をめざしています。

社会学コース / 心理学コース / 教育学コース / 地理学コース

言語文化学科

言語文化学科は、言語を通して人間にアプローチし、人間が作り上げた文化を探求します。日本、アジア地域、欧米諸地域等の文学や思想などの文献を読み、言語の姿や仕組みを考察します。

また言語と関係する文化、たとえば演劇・音楽・映画などや、その背景にある社会・歴史も分析の対象とします。こうした作業を通じて、人々がこれまで何を考えてきたのか、現在何を考えているのか、そして今後どのような新しい考えを打ち出すのかを探ります。

国語国文学コース / 中国語中国文学コース / 英米言語文化コース /
ドイツ語圏言語文化コース / フランス語圏言語文化コース

文化構想学科

文化構想学科は、文化を積極的に活用することで文化のもつ力をさらに高め、文化をもって21世紀型成熟社会における諸課題の解決をはかることができるような人の育成を目指しています。

本学科では、さまざまな場で活用される文化や文化的コンテンツに関する研究、日本を含めたアジア地域における文化活用の実際についての比較研究、実践的・課題解決的な文化活用の方策についての研究等の観点から、文化そのものから文化の地域的、社会的活用に至るまでの一連の過程について学びます。

表現文化コース / アジア文化コース / 文化資源コース

哲学コース

1 本コースの研究内容、特色

遠く古代ギリシアに起源を有する哲学は、人間の英知の集約として、西欧文化の根底を培ってきました。哲学は広く世界と人間に関わる一切の問題について、自由な理性的探究を行う学問です。知識や存在についての根本的探究、倫理、宗教、芸術についての原理的考察などがその営みを構成します。このような西洋哲学の達成を広く深く学びつつ、同時に現在の状況が生みだしている重要な哲学的諸問題にどのように応答すべきかを考えていくことが哲学に課せられた使命です。

「哲学コース」では、古代ギリシアより現代に至る西洋哲学の歴史についての理解を基礎としつつ、まず哲学部門の基本的分野を学びます。それは、学問的な思考にとって不可欠な推論の原理について論じる論理学や、世界とそこで人間存在が占める位置について論じる存在論、さらには世界についてのわれわれの知識の成り立ちと根拠について論じる認識論などです。そのうえで、科学哲学・心の哲学・言語哲学など、哲学のなかの新しい分野についても学びます。

以上のような理論哲学的分野と並んで、「哲学コース」では、倫理学、宗教学、および美学という規範や価値に関わる実践哲学的分野についても学びます。倫理学は、正しい生き方とはどのようなものかという問題を中心に倫理（道徳）の本質や原理について考える理論的倫理学と、生命の技術的操作の是非など今日の具体的な倫理的問題について研究する応用倫理学から成ります。宗教学は、生と死の意味、神の存在といった宗教の根底を成すテーマについての哲学的研究とともに、世界の主要宗教の宗教思想などについても研究します。美学は、美的体験などの分析を通じて、芸術とは何か、美とは何かについて考える分野です。これら多様な分野の総合的学習を通して、今日の思想的状況に批判的に対応する基礎力が身につくことでしょう。

本コースは、西洋哲学の主要な領域をカバーできるスタッフがそろっています。西洋哲学の基本的なテーマについては、どの時代、どの地域であれ、指導を行うことができますので、詳細はスタッフに相談してください。その他、現有スタッフでカバーできない領域、テーマについては、毎年非常勤の先生を招いて補っています。

本コースでの履修方法ですが、コース所属希望の人であれば、1回生から履修可能な「人間文化概論」、「哲学概論」、「哲学史通論」をまず履修してください。

「人間文化概論」では歴史を含む思想・文化について広く学びます。「哲学概論」では、哲学の基本的な概念や基本的な問題について、知識、世界、心という三つの主題を通して学びます。「哲学史通論」では、西洋哲学思想の流れを概観します。

2回生では文献の読み方やレポートの書き方などの基本的なことを学ぶ「人間文化基礎論」をはじめとして「倫理学概論」、「宗教学概論」などの概論的科目を中心に履修するのがよいでしょう。3回生ではさらに哲学の原典の読解能力を身につけることができるように、できるだけ複数の「演習・講読」科目を履修するのが望ましいことです。用いられる言語は主として英語ですが、受講生の能力に応じて、ドイツ語、フランス語も用いられます。また、各教員の専門分野にかかわる特殊なテーマを扱う「哲学特講」も提供されます。

こうして、4回生の初めまでには、自分自身の問題意識を身につけておくことが大切です。4回生では、自分の関心領域に近い「演習・講読」や「特講」などの自由選択科目を選び、「哲学歴史学研究演習」を受けながら、「卒業論文」の作成に集中できるようにしたいものです。

「卒業論文」は四年間の学習の総決算ですから、4回生の夏休みにはだいたいの構成ができあがっていなければなりません。夏休み明けにはそれぞれのテーマを専門とする教員の指導を受けて、細かな点を仕上げていくように心がけましょう。「卒業論文」のテーマとして標準的なものは、特定の哲学者について特定のテーマ（例えばカントの認識論やデカルトの心身問題など）を取り上げた研究です。

「哲学コース」では、学生相互や学生と教員との間の交流のための行事（学年はじめの新入生歓迎会や学年末の卒業生・修了生の予餞会など）を適宜行っています。また、大阪公立大学（大阪市立大学）哲学研究会を組織し、例会を定期的に開催して、他大学とも研究交流を活発に行っています。

2 スタッフ

スタッフは以下の4名です。

(西洋哲学史・美学)

たかなし ともひろ
高梨 友宏 教授

カントを中心とするドイツ近現代美学、フッサール現象学の研究。「哲学史通論」「美学概論」などを担当。

(倫理学)

つちや たかし
土屋 貴志 准教授

倫理学、医療倫理学(現代医療に関する倫理的諸問題の研究)、人権問題研究、道徳教育論。「倫理学概論」「倫理学演習・講読」などを担当。

(宗教学)

ふるそう ただよし
古庄 匡義 准教授

ミシェル・アンリの”キリスト教の哲学”、宗教多元主義、近代日本の宗教思想などの研究。「宗教学概論」「宗教学演習・講読」などを担当。

(哲学・論理学)

きこん たけし
佐金 武 教授

現代英米哲学、とくに時間の哲学、心の哲学を中心に研究している。「哲学概論」「哲学演習・講読」などを担当。

3 コース決定にあたっての心構え

他の学問でもそうでしょうが、哲学を学ぶに際しても重要なことは、まず、哲学とはどのような問題をどのような仕方で行う学問であるのかをできるだけ早く知ることです。そうして初めて、自分自身の問題関心が自分の選んだ(選ぼうとしている)学問領域の中でどのような位置を占めるのかが分かり、その結果、問題に正しくアプローチし、さらに自分の将来の課題を見極めることも可能になってくるものです。したがって、「哲学コース」を選ぶかどうかをこれから決めようとしている場合にも、またコース決定した後も、できるだけ幅広く本コースの提供科目を受講し、自分の知識と思考の裾野を広げる努力をすることが肝要です。自発

的な読書によって視野を広げることも重要です。

哲学の専門的研究のためには、先人の業績を原典で読むことが不可欠です。ですから、英・独・仏のうち2か国語を予め学習しておくことが望まれます。また、より深い研究のためにはギリシア語・ラテン語の学習が有益です。

4 大学院

哲学歴史学専攻に哲学専門分野(専修)として、博士前期課程、博士後期課程が置かれています。博士前期課程では二年間の間に多くの科目をとり、修士論文を書かねばならないので、たいへん忙しいのですが、明確な問題意識さえあれば、充実した研究生生活を送ることができるでしょう。博士後期課程では、修士論文の成果をふまえながら、さらに研究を積み重ねたあとで博士論文を書くことが求められます。また、欧米の大学院に留学することも選択肢の一つです。

5 卒業後の進出分野

先輩の多くは、教員、公務員に進出していますが、一般企業へ就職する人も少なくありません。哲学を一生の仕事とすることは決して容易ではありませんが、本人の努力次第では大学院へと進学し、研究者として自立する道も開かれています。さまざまな大学で活躍している先輩もいます。

6 メッセージ

「なぜ」という疑問を持つことが学問の、とりわけ哲学の第一歩です。疑問を直接ぶつける積極的な姿勢で授業に臨んでほしいと思います。哲学は幅も広く奥も深い学問ですから、万卷の書を読み、千里の道を行く気概がなくてはなりません。読書が好きで、ものを考えるのが好きな人、世界と自分について多くの疑問を持っている人、こういう人々を「哲学コース」は歓迎します。

日本史コース

1 本コースの研究内容、特色

あるできごとが起きた年代を暗記するのが歴史学ではありません。事件や現象、政治・経済・社会・文化の仕組みは、前段階のどのような状況の中から生まれ、そのためにどのような本質をもち、次の段階にどのように影響するのか。歴史学はこれらを、史資料によって明らかにする学問です。人間の文化や社会の本質を、《時間》軸における変化のなかで把握する学問だと言い換えることができます。

「日本史コース」の教員は5人で、古代・中世・近世・近現代と考古学の分野をすべてカバーしています。したがって、みなさんが日本の歴史のどの時代の何を学ぶにも対応できます。古代～近現代のスタッフは社会史を得意にしており、さらに政治史・都市史に関する教育実績をもつ特色あるコースとなっています。また、考古学の教員は古墳時代を専門としますが、幅広く日本考古学全般に対応できます。民衆の歴史や文化についても詳しく学ぶことができます。

つぎに「日本史コース」に進んだ場合の、専門の学習について説明しましょう。過去のことを史料(考古学の資料を含む)にもとづいて考えるには、史料の読み方・扱い方を身につけ、これまでの研究の蓄積をふまえる必要があります。そのため、卒業論文の作成にむけて、次第にレベルを高めながら学んでいけるよう、授業科目を用意しカリキュラムを組んでいます。

日本史コースを考えているみなさんは、①1回生のうちに「人間文化概論」で広く人間や文化に関する捉え方を学んでおいてください。また1・2回生の間に「人間文化基礎論」「日本史基礎講読1・2」を履修してください。②日本史コースへの分属が決まった2回生になると、「日本史通論A・B」「考古学通論」でやや高度な講義を聞き、「日本史講読A～D」「考古学実習」で史料の読み方・扱い方・調べ方を学びます。③3回生では、「日本史演習A～D」「考古学演習」でテーマの立て方、論文の読み方を身につけます。また、高度な研究内容にふれる「日本史特講A～D」を受講してください。④以上の学びの上にとあって、4回生では、「卒業論文」の作成が中心となります。

「日本史コース」のカリキュラムについていくつか注

意点を述べておきます。一つは、歴史学は総合的な学問ですから、歴史や人間・文化について幅広く学ぶとともに、自分で興味をもったテーマについて自ら積極的に学習を進めてほしいという点です。総合的な思索と個別の学びはどちらも大切であることを忘れないでください。

二つめは、科目選択の仕方です。「日本史コース」の学生は、選択必修科目である「日本史基礎講読1・2」「日本史通論A・B」「考古学通論」「日本史講読A～D」「日本史演習A～D」「考古学演習」は原則としてすべて履修するようにしてください。その上で、世界史コースの科目についても積極的に学んでください。また、「日本史特講A～D」についても、自由選択科目ですが、日本史コースの学生はできる限りすべて履修するように心がけてください。

大学での学習は、授業の場だけで行うものではありません。「日本史コース」では様々な場を用意しています。毎年、夏休みに、「日本史コース」全体で特定地域の歴史的総合調査を行っています。現地で近世・近現代の古文書にふれ、その扱い方、整理法を身につけることができます。お年寄りから昔のことを聞き取り調査したり、フィールドワークによって集落の歴史を探ったりもします。また、「世界史コース」といっしょに、近畿地方の史跡見学会(日帰り)を春に開催し、秋には各地の遺跡・博物館を訪れ、歴史や文化財にふれる実習旅行を行っています。これらは授業に準ずるものですから、できるだけ参加するようにしてください。

また、「日本史コース」と不可分の学会として「大阪公立大学日本史学会」(「大阪市立大学日本史学会」として1998年設立)があります。本学会は、毎年5月に研究大会を開催し、学術雑誌『大阪公大日本史』を刊行しています。日本史コースの学生は、全員、この学会の学生会員となります。このほか、教員・院生も加わる時代ごとの勉強会(読書会)や研究会、古文書を読む会などが数多く開催されています。これらに積極的に参加して自主的に学んでください。

2 スタッフ

仁木 宏 教授

中世の近畿地方を中心として、都市や村落の歴史を研究している。全国の戦国大名や織田信長・豊臣秀吉らの権力論もあつまっている。

岸本 直文 教授

古墳や古墳群を通して古墳時代の政治・社会を研究している。発掘調査や測量調査を継続的に実施中で、学生も参加できる。

佐賀 朝 教授

近現代大阪の都市社会史、また戦時下（「十五年戦争」期）の地域社会史を研究している。近年は、遊廓の社会史的研究も進めている。

磐下 徹 教授

古代史の研究を行っている。主に郡司制度を通して、地方支配や地域社会の在り方を考えている。その他、古記録（日記）の註釈にも取り組んでいる。

齊藤 紘子 准教授

近世（江戸時代）の大坂や和泉の地域社会について研究している。また、地域史の視点から畿内領主支配の特質を検討している。

3 コース決定にあたっての心構え

歴史学は総合的な学問です。そこで、日本史に限らない、いろいろな地域、さまざまな時代・分野の歴史や文化に興味と関心をもってほしいと思います。そのなかから徐々に自分のテーマを探っていきましょう。また、すでに興味をもつテーマがある人は、それに関係する図書などを積極的に読んでみましょう。

1回生のうちに履修しておいてほしい科目。基幹教育科目では、「日本史の見方」「日本社会の歴史」「考古学入門」はもちろんですが、「歴史のなかの大阪」「戦争と人間」も履修することが望ましいでしょう。東洋史・西洋史などの歴史関係の科目も積極的に履修してください。

専門教育科目のうち、哲学歴史学科の必修科目は必ず1回生のうちに履修しておいてください。「日本史コース」の選択必修科目のうち、1回生が履修できる「日本史基礎講読1」も履修してください。

4 大学院

日本史学専修の博士前期課程、博士後期課程があります。日本の考古・古代から近現代までの様々なテーマで、多くの院生が研究しています。近年、日本史学専修では課程博士の学位を取得するための指導を強めており、博士（文学）の学位を取得する人が増えてきました。また、日本学術振興会の特別研究員に採用される人もいます。

大学院で専門的な研究を重ねた諸先輩は、大学の教員、博物館・資料館の学芸員、あるいは自治体史の編纂担当者など、その能力を活かす様々な領域で活躍しています。最近の例を挙げると、大学では、神戸大学、大阪公立大学、岡山大学、関西学院大学、近畿大学、京都精華大学などに就職しています。博物館・資料館としては、国立歴史民俗博物館、大阪歴史博物館、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館、高槻市立しろあと歴史館、彦根城博物館などがあります。また大阪府や京都府、各地の自治体などで発掘調査をする技師として働いている人もいます。専修免許を取得して教育現場で活躍している人も少なくありません。

5 卒業後の進出分野

大学で学んだ歴史学の知見を活かし、学校の先生になる人もいますが、近年は、一般企業、官公庁や大学法人に就職する人が多くなっています。自らの創造性を要求される職場では、総合的な学問である歴史学を学んだことは大きな力となるでしょう。また先述のように、大学院に進んだ上で、博士前期課程修了後に、博物館・資料館の学芸員、発掘担当技師などの専門職に就く人が増えています。

6 メッセージ

質問や迷いのある1回生の皆さんは、是非、私たち日本史の教員に相談してください。日本史教員の研究室を訪ねたり、メールで質問したりしてください。

はじめに、歴史学とは、「人間の文化や社会の本質を、《時間》軸における変化のなかで把握する学問だ」と述べました。それは、今を生きる自己の探求でもありません。さあ、いっしょに、日本史という自己探求の旅に出発しましょう。

世界史コース

1 本コースの研究内容、特色

ほんのちょっと意識すれば、私たちの日常を取り囲む問題が、過去の歴史の積み重ねの上に成り立っていることがすぐわかります。隣りあう国々との思想や領土上の対立、世界規模で発生している経済危機、中東地域の政治変動のみならず、日本人のファッションや食生活の変化、エイズやインフルエンザ、新型コロナウイルスに対し世界が協調して行動してきた背景にも、歴史が大きく横たわっています。歴史を充分理解せずに、これら日常の問題を考えようとすると、浅はかな結論に行きつき、ときに大きな政治・経済・社会問題を引き起こすこと、そして生じた問題をどう受け止めてよいのかわからず右往左往する人々を多く生み出すことは、皆さんも報道その他でよくご存じのことと思います。歴史と、歴史に根ざした文化の相違を充分理解することは、問題が山積するこれからの世界を生き抜く私たちに、ぜひとも必要な能力のひとつだと言えます。

歴史を充分理解するには、世界で共通に認められている作法をふたつ習得する必要があります。「通説」を理解することと、「史料」を読み込むことです。過去の歴史叙述の束からなる「通説」を理解せず、かつ過去を生きた人々がのこした文字・遺跡・絵画・ファッションなど何らかの「史料」を利用せずに書かれた歴史は、不作法な歴史として、世界では取りあってもられません。不十分な歴史理解に基づいて私たちの日常的な問題を解決しようとしても、世界の人々はなかなか納得してくれないのです。世界史コースは、皆さんがこの作法を身につけ、世界で通用する歴史とは何かを理解して卒業する手助けをします。

世界で通用する歴史理解を習得する効果的な方法として、「通説」と「史料」に基づいて自分で歴史を書いてみる、ということがあります。世界史コースに所属するすべての学生は、卒業論文として自ら歴史を書き、歴史理解を深める格好の機会を得ます。卒業論文のテーマは、学生各人がそれぞれの関心に基づいて選択します。世界史コースの教員は、社会史、文化史、生活史を得意とし、都市史、美術史、建築史、家族史、思想史、宗教史、環境史など、広範なテーマを研究しています。教員や、ときには学生同士で議論しながら、3年生終了

時までには卒業論文のテーマを各自で見つけてください。

つぎに、学年ごとにどのような専門科目を履修したらよいのかを説明します。まず、「人間文化概論A・B」を履修してください。学問の基礎である哲学と歴史学の基本を学ぶことによって、広く人間や文化に関する捉え方を学びます。ついで、「世界史基礎講読」で、世界の諸地域の生活文化について広範な知識を獲得し、高校までの世界史ではあまり扱われない社会史についての理解を深めることができます。これらの科目は、1回生または2回生で履修してください。

2回生になると、「人間文化基礎論1・2」で、歴史学の特質、読み書き調べる基本的技法、将来の目標（「卒業論文」作成）など、卒業までに必要な基礎知識が身につけられます。また、東洋史および西洋史の「基礎講読」および東洋史・西洋史・世界史の「講読」で研究論文や史料のより深い読解力を養い、「通論」でやや高度な講義を聴きます。1・2回生のあいだは本格的に専門教育科目を履修するための準備期間と位置づけてください。3回生になって2回生までに履修しておいた方がいい基幹教育科目や専門必修科目を残していると、3回生以降の専門教育科目の履修に支障が出ることもあります。

3回生では、いっそう専門的に「講読」の訓練を受けるとともに、「演習」によって歴史学の基礎的方法やテーマの立て方、調べ方などについて会得します。「特講」は、高度で独自の研究内容の講義です。自由選択科目ですが、必ず履修してください。また、この時期に少し専門と離れた分野の「通論」を履修すると、視野を広げるのに役立ちます。

4回生は、「卒業論文」の作成が中心で、専門分野と関連する教員から「哲学歴史学研究演習」を受け、「卒業論文」に取り組みます。「通論」や「特講」を聴講すると、論文作成のためのヒントが得られるかもしれません。

以上のほかに、実習旅行・史跡見学会などで、現地や実物を見て歴史学の方法を考えます。また、東洋史・西洋史それぞれに卒業論文などの中間発表を行います。これらの行事終了後に懇親会があるほか、卒業パーテ

ィーなど教員と学生が触れあう機会がありますので、積極的に利用してください。

2 スタッフ

わたなべ けんや
渡辺 健哉 教授

近世・近代中国の都市社会史、学術史。

はまもと まみ
濱本 真実 教授

近世・近代の中央ユーラシア史、ロシア史。

うえの まさゆき
上野 雅由樹 教授

近世・近代のオスマン帝国を中心とする西アジア・中東・バルカン半島地域の歴史。

みうら ゆうき
三浦 雄城 准教授

中国中古の政治文化史。具体的には漢魏から唐宋までの政治と儒教の関係に関心をもつ。

きたむら まさふみ
北村 昌史 教授

近現代ヨーロッパ、とくにドイツの社会史。

くさぶ ひさつぐ
草生 久嗣 教授

ビザンツ帝国(東ローマ帝国)及び東地中海の宗教史、社会史。

むかい しんや
向井 伸哉 准教授

中世フランス史、国制史・農村史。

3 コース決定にあたっての心構え

いろいろな地域、さまざまな時代・分野の歴史に興味をもってください。どの地域・時代・分野を中心に学ぶにしろ、歴史学を基本としていることを忘れないで、歴史学の方法論・基本的な知識、多様性をしっかり理解してください。そのために、是非とも1・2回生のあいだに読書する習慣を身につけてください。この読書量が、卒業時に大きな差となってあらわれます。

目的意識・問題意識がなければ、歴史学を学ぶことはできません。高校まで歴史を暗記科目として得意とし、大学で勉強する歴史学も同じようなものだと思っている人は、大きな勘違いをしています。高校までに身につけた基本的歴史知識は、大学でも充分いかされますが、自分で問題(テーマ)を設定し、解決するだけの考察・分析力を身につけなければ、「卒業論文」のテーマを決めることはできませんし、テーマに沿って考察・分析し

ていくこともできません。コース決定までに、大学で勉強する歴史学の意味を十分に理解してください。そのために、歴史学の提供している専門科目の「人間文化概論」「世界史基礎講読」をしっかりと履修してください。

4 大学院

東洋史学専門分野(専修)では、中国史を専門とする教員を中核として、4名のアジア史を専門とする教員がいます。西洋史学専門分野(専修)では、ビザンツ史、フランス中世史、ドイツ近現代史を専門とする教員がいます。大学院生は、学内の授業科目で養った研究能力を基盤に、学外の学会・研究会でも活動しています。「世界史コース」の教員が関係している研究会に、宋代史研究会、遼金西夏史研究会、元朝史研究会、関西ビザンツ史研究会、ドイツ現代史研究会などがあります。

博士前期課程修了者は、博士後期課程に進学する者のほか、教育関係、官公庁、一般企業に就職しています。博士後期課程修了者は、研究・教育関係の職に就く傾向があります。

5 卒業後の進出分野

一般企業、官公庁に就職する場合がありますが、教員や大学院に進学して研究者になる人もいます。それぞれ「世界史コース」で身につけた読解力、文章力、考察力、目的意識・問題意識を活用した企画力などをいかして活躍していますが、このような基本的能力・知識とともに、実用技術を身につけて、コンピュータ関連の仕事やベンチャー企業で活躍する人もいます。

6 メッセージ

「講読」「演習」「卒業論文演習」では、教員から直接指導を受ける機会が増えます。そのような少人数教育の利点をいかせるように、教員との関係を密にもってください。そのために、「世界史コース」の行事に積極的に参加してください。まずは、例年5～6月に行われる「新歓ハイキング」(日帰り)に、参加してみてください。日本史・世界史学部指導室(1164)や西洋史大学院指導室(1165)、東洋史大学院指導室(1167)に気軽に入って、学部学生・大学院生から「生の情報」を得てください。コース決定にあたって、きっと役立つことでしょう。

社会学コース

1 本コースの研究内容、特色

【社会学とは何か】

学問は、すべて対象と方法によって特徴づけられます。

これを社会学について述べますと、社会学の研究対象はあらゆる社会現象にわたり、文字どおり古今東西におよびます。アト・ランダムに例示すれば、①アフリカ難民の集団形成、②ナチズムの統治機構、③公害都市から環境都市へ、④核家族と産業、⑤天皇制とメディア文化、⑥選挙制度の国際比較、⑦階層の史的分析、⑧カルト宗教の社会的背景、⑨近代化と共同体……一見したところ無原則・雑多と思われるような集積ができます。このように、対象選択に関するかぎり、社会学ほど自由な学問は、まずないでしょう。この「自由さ」に惹かれて、昔も今も、多くの学生が社会学を志望して来ます。

たとえば政治学なら、上の③⑥くらいしか対象にならないでしょう。自由度がより小さい。これはもちろん価値判断ではありません。政治学は社会学とちがって、はじめから対象がよりはっきりしており、きびしく限定されているのです。その点、社会学はゆるやかであり、だらしないともいえる。学問には、主に固有の対象によって定義される「対象学」と、その点であいまいなものがあるわけです。

社会学はあいまいなほうに属するのですが、それでは学問としての固有性・独自性はいったいどこにあるのかといえば、社会学では、あらゆる社会現象を選択の対象とすることができるかわりに、選択の仕方そのものに一定の原則・約束・方法があり、それにもとづいて選択・抽出がなされます。対象と方法との関連がより密接不可分で、視点や方法によって対象性が規定されてくる。その意味で社会学は、対象学というよりは「方法学」としての性格が強いといえます。

では、社会学の固有の視点とは何か。それは、社会現象をつねに人間・社会関係・集団のあり方や行為として解釈していくところにあります。あらゆる社会現象は、共通に「人と人」、「我と汝」、「個人と社会」の相互関係＝集団の現象にほかならない。この側面に焦点をおいてあらゆる社会現象にアプローチするのが、社会学の固有性です。

【教育方針とカリキュラム】

「社会学コース」の教育方針とは、人間と社会を分析する社会学的認識方法の実践を通して社会に貢献できる有用な人材を育成し、世に送り出すことです。

この目的を達成するために、カリキュラムを理論系と調査系の2本柱で総合的に構成しています。「理論なき調査は盲目であり、調査なき理論は死んでいる」という有名な言葉がありますが、理論と調査は互いに他を前提としあう車の両輪のような関係にあり、どちらも大切なことはいまでもありません。

理論系には、「人間行動学概論」（1年一配当年次）、「社会学概論」「社会学史」（2年）、「社会学演習」（2～4年）などがあります。聴講と読書と討論によって知識を増やし、問題意識を高めることができます。一方の調査系には「人間行動学データ解析法」「社会学研究法」「社会調査法」（2年）、「社会学質的研究法」「社会学データ解析法」「社会学実習」（3年）などがあります。社会調査の方法を学び、街に出て実際にフィールドワークや意識調査を行います。また、調査系の科目を履修することによって「社会調査士」の資格を取得することが可能です。

以上は主として学科必修科目またはコース選択必修科目ですが、ほかに自由選択科目として、専任スタッフと非常勤講師によるさまざまな特論・特講などがあります（多くは2～4年の間に随時選択履修）。次項で紹介するように専任スタッフの研究領域はかなり多彩といえますが、それでも多様に専門分化している現代社会学の全領域をカバーすることは到底不可能です。そこで皆さんに社会学の豊饒な世界を少しでも多く知ってもらうために、他大学からも非常勤講師を招き、専門の講義をしていただきます。

以上のコースを経て社会学的方法を身につける一方、自らの研究対象を選択・決定した上で、最終学年で「卒業論文」を作成します。

2 スタッフ

石田 佐恵子 教授

映像社会学・知識社会学・メディア文化論を専攻。現在の主な研究テーマは、映像と社会の関係、文化のグローバル化、アーカイブズの公共性について。

伊地知 紀子 教授

生活世界の社会学。地域社会学・朝鮮地域研究を専攻。現在の主な研究テーマは、東アジアにおける国際移動とローカリティについて。

川野 英二 教授

都市社会政策の社会学・比較社会学を専攻。現在の主な研究テーマは、大都市の貧困と社会的排除に関する国際比較研究。

金 希相 准教授

都市社会学、国際社会学（移民研究）、住宅研究を専攻。現在の主な研究テーマは、移民の住宅経歴と社会統合の関連、居住格差、住宅差別問題。

3 コース決定にあたっての心構え

1年次に受講できる社会学関連の科目は、基幹教育・専門教育あわせてかなりの数があります。基幹教育では、「現代文化の社会学」「都市的世界の社会学」「現代社会学入門」「家族と社会」「メディアの社会学」「現代の社会問題」（ただし、実際の開講科目は毎年異なるので要注意）。これらを可能な限り履修しておくことが望ましい。また、心理学・教育学・地理学、アジア文化学・表現文化学、政治学・経済学など、隣接科学からの提供科目も、幅広く学んでおいてください。

一方、専門教育では、先述の「人間行動学概論」「人間行動学データ解析法」などの学科必修科目があります。外国語については、英語はもちろん、初修外国語をしっかり履修しておくこと。大学院進学希望者はもちろん、卒業後にどの分野に進むにせよ、ヨーロッパ・アジア諸国の言語やロシア語は、将来きっと役に立つはずです。

つぎに日頃の心構えとして、こんなことを試してみてもいいでしょうか。

現代社会を解説するキーワードとして、「少子高齢化」「情報社会・監視社会化」「リスク社会」「グローバル化」などがあります。これらは、われわれの生活を根本から規定している不可抗・不可避の社会変動といえ

ます。だから、社会学コースを志望する人は、これらのキーワードをいつも頭から離さないでおいってください。新聞やテレビで報道される日々の出来事はどれも、これらのキーワードと直接・間接にどこかで関連しているにちがいない。その関連づけを考えながらニュースを読む、いわば思考の自主トレが、いざ社会学を本格的に勉強する段になって必ず役立ちます。社会学の「分析方法」は専門科目で学びますが、その対象である「社会現象」への関心を十分に高め準備をしておいてください。

4 大学院

卒業後も続けて社会学を研究したい人のために、大学院博士前期課程と博士後期課程に進む道が開かれています。現在の院生は、家族社会学、福祉社会学、メディア論、都市問題、エスニシティ研究など、それぞれ自由にテーマを選んで研鑽に励んでいます。また就職先としては、大学・研究機関の教育・研究職のほか、近年では公務員、教諭、NPO 団体、民間調査機関などに就職する人も増えています。

5 卒業後の進出分野

製造業、サービス業、公務員、教員、マスコミ関係、進学など、多種多様ですが、人事・市場調査・広報公聴・企画開発といった部門が考えられます。これには社会学の方法、具体的には社会調査の知識と技術が関連しています。最近の卒業生の進路は、大学院進学、公務員、新聞社、テレビ局、オムロン、積水ハウス、京阪百貨店などでした。

6 メッセージ

自分が社会学向きかどうかを知りたい人のために、ひとこと添えておきましょう。読書が好きな人、または好きになろうと努力している人、人間に対する興味・関心が旺盛な人、市民運動・ボランティア活動などに参加している人、または参加してみたいと思っている人——このうちどれか1つでもあてはまれば、あなたは社会学に向いています。

心理学コース

1 本コースの研究内容、特色

心理学は、多様で複雑な人間の営みを、心のはたらきという視点から解明することを目指す学問です。心のはたらきという目に見えない現象を、行動という客観的な指標を通して、科学的に明らかにしていくことを目的としています。

わたしたちの行動にかかわる心のはたらきは、多岐にわたっています。「心理学コース」では、生理、学習、認知、発達、社会、性格といった、心のはたらきのさまざまな側面について学びます。ただし、本コースでは、臨床心理学の分野で扱う問題（心の問題を抱えた人々に対する診断・治療など）については、研究・指導を行っていません（臨床心理学についての教育・研究は、生活科学部や現代システム科学域で行われます）が、将来、大学院あるいは社会において臨床心理にたずさわることを目指す人にとっても、本コースで心理学の基礎的な知識・方法を学ぶことは、とても有益であるといえましょう。

「心理学コース」の最も大きな特徴は、実験・調査・観察といった実証科学的な方法論に基づいて、心の法則を明らかにしていこうとする点にあります。そのため、研究方法に重点を置いたカリキュラムが組まれています。

「心理学コース」のカリキュラムの中心は実験演習です。本コースに進まれた皆さんは、まず2年生で、心理学の各分野の基本的課題について実験・調査を行う「心理学実験演習1・2」を履修します。引き続き3年生では、「心理学研究演習1・2」を履修し、皆さん自身の関心に基づいて研究テーマを選び、実験・調査を行ってレポートをまとめます。これらの集大成として、4年生で「卒業論文」を作成します。「卒業論文」の作成にあたって、指導教員によるきめこまかな指導に加えて、年3回の卒業論文指導会があり、教員や大学院生ならびに仲間たちからのアドバイスを受ける機会が設けられています。

実験演習・研究演習と並行して、必修科目として「人間行動学データ解析法1・2」、選択必修科目として「人間行動学データ解析法3・4」や「心理学統計法」が開講されています。コンピュータを使った演習を通して、統計の初歩からより高度な技法にわたって教授し、種々のデータ解析手法への理解と習熟を図ります。

講義科目としては、「心理学概論1・2」「心理学研究法1・2」を中心として、各種の「特論」「特講」が提供されています。「心理学概論1・2」は、心理学史および心理学の諸分野の概説を通して、心理学の全体像を理解してもらうための科目です。「心理学研究法1・2」では、心理事象の実証的研究に不可欠な方法論が解説されます。「特論」「特講」では、心理学の諸分野における特定の話題に焦点を当て、より深く掘り下げた内容の講義がなされます。

なお、通常のカリキュラムに加えて、それぞれの領域ごとに大学院生を交えた勉強会・研究会が随時開催されており、活発な議論が展開されています。

2 スタッフ

次の4名の教員が、「心理学コース」の授業を担当しています。（神経・生理）

かわべ こういち
川邊 光一 教授

生理心理学：心と身体（脳）、精神・行動と薬物、学習・記憶を中心とした高次認知機能・精神疾患の脳内機構。

（学習・行動）

さえき だいすけ
佐伯 大輔 教授

学習心理学：行動分析学、判断、意思決定、選択行動。

（社会・文化）

はしもと ひろみ
橋本 博文 准教授

社会心理学：集団力学、集団内利他行動、心の文化差。

（認知・発達）

やまもと ひさこ
山本 寿子 准教授

認知心理学・発達心理学：視聴覚感情認知、言語獲得、音声知覚。

3 コース決定にあたっての心構え

「心理学コース」を専攻しようとする皆さんには、何よりもまず、心理現象に対する強い興味と関心が求められます。同時に、確実で客観的な知識を求めようとする

る熱意と、複雑な現象を実験・調査・観察に基づいて一歩一歩解明していくという地道な努力が求められます。また、心のはたらきは、人間のあらゆる営みと密接にかかわりあっています。その意味でも、心理学以外の分野にも関心・興味を広げ、広い視野をもつことは、心理学を学ぶ上でもおおいに役立ってくれることでしょう。

「心理学コース」では、前述したように、実験心理学を中心にカリキュラムが組まれていて、実証科学的な色彩が強い点に特色があります。本コースのカリキュラムをこなすことによって、科学的思考を養い、実験・調査・観察を行うための技能（コンピュータの操作を含む）を体得し、統計処理や数値計算に習熟することが期待できます。さらに、外国語（主として英語）の文献を短時間に読みこなすだけの語学力も身につきます。

本学では基幹教育科目として、「心理学入門」をはじめ、5科目の心理学関係の科目が提供されています。

「心理学入門」では、心理学全般についての初学者向けの解説を行い、他の科目では心理学の各分野についての少し詳しい紹介を行っています。「心理学コース」を希望される皆さんは、ぜひこれらの授業を受講して、心理学とはいかなる学問かを理解してください。

これらの授業では、随時、質問紙調査や心理テストを行ったり、実験の参加者を募集したりします。積極的に参加されれば、心理学についての理解を深めるのに役立つと思います。また、人間行動学科共通の必修科目として、「人間行動学概論A・B」も開講されていますので、これらの科目も忘れずに受講してください。

4 大学院

博士前期課程、博士後期課程に、心理学専門分野（専修）が開設されています。心理学専門分野（専修）では、実験心理学を基本として、科学的方法論を重視した教育・研究体制が組まれています。臨床分野を除くあらゆる心理学諸分野の基礎から応用にわたる幅広いテーマについて、学び、研究することができます。また、生理実験室、行動実験室、空間実験室、認知実験室、感覚実験室、ネットワーク実験室、集団実験室、心理検査室を有し、実験設備も充実しています。

5 卒業後の進出分野

卒業生の進路は、一般企業、教員、公務員など、多岐にわたっています。心理学に直接関係する職種として、国家公務員総合職には、技術系行政官として、試験区分

人間科学（心理学）があります。法務省や厚生労働省に勤めることが多いようです。地方公務員（大学卒業程度）にも心理職があり、児童相談所・婦人相談所の判定員やケースワーカー、養護施設の指導員といった職種につきます。その他、家庭裁判所調査官補、法務教官などがあります。また、大学院に進む人も少なくありません。

なお、所定の単位を取得することによって、日本心理学会認定心理士の資格をとることができます。

6 メッセージ

「心理学」という言葉やトピックスの面白さだけから本コースを希望してくる人の中には、授業内容が予想と違うとして他コースへ転じるケースも出ています。

世間ではいまだに、心理学を学べば（研究すれば）たちどころに人の心がわかるようになる、という類の誤解が強いようです。心のはたらきという複雑な現象は、一朝一夕で解明されるというものではありません。心のはたらきについての確実で客観的な知識体系を作りあげるために、実験・調査・観察を地道に積み重ねていくこと、それがわたしたちが行っている心理学研究にほかなりません。心理学という学問について正しく理解した上で、コースを決定されるよう希望します。質問・相談があれば、本コースの教員・大学院生・学部生のだれにでも、遠慮なく声をかけてください。

教育学コース

1 本コースの研究内容、特色

人は生まれてから死ぬまでの間、いろいろな活動しますが、それらのうち、教育に関係のないものはほとんどありません。人は、よりよく生きようとするとき、多くを学びます。学校以外でも学びます。「教師」が存在しないところでも学びます。職場にも、地域にも、ボランティア活動にも、家庭での子育てにも、教育の営みがあります。そういった、様々な場面において、「教育」という切り口で社会に貢献できるような人材形成を教育学コースでは目指しています。単に学校教師になるためだけのコースではありません。

教育学コースでは、人のライフサイクル（人生周期）全体を視野に入れて、学校教育と学校外教育の両面にわたる思想・制度および実践について、実証的に研究することを大事にします。具体的には、教えることと学ぶことの関係、カリキュラムの編成、授業論や特別活動論、教育制度・教育行政や教育改革、教育の歴史、国際比較、教職および教師の教育、教育の情報化、異文化理解の教育などの諸研究です。

必修科目の「人間行動学概論A・B」は1回生で履修してください。2回生向けの必修科目は「人間行動学データ解析法1・2」です。2回生では、「教育学研究法1」「教育学実習」「教育学演習A」「教育学演習C」を履修してください。これらの必修・選択必修科目では、人間行動学とは何かについて考え、その基礎となる方法論や人間という対象へのアプローチの仕方を学びます。2～3回生向けの選択必修科目は、「教育学概論A・B」「教育方法学A」で、3回生向けの選択必修科目は「教育方法学B」「比較・国際教育学」「教育学研究法2」「教育学演習B」「教育学演習D」です。また、教育学関係の自由選択科目は、「教育行政学」「教育史」「教育メディア論」「教育学特講A・B」及び「教育学演習E」です。

これらの選択必修科目や教育学関連の自由選択科目の特長は、学生自身の問題意識をもとに学問的な涵養を行い、討論や発表等を通して、多様なものの見方、批判的な思考、自分なりの価値や思想や知識を自分で構築できる力の育成を目指していることです。学生自身

がいかに深く探究するかに力点が置かれます。教員は、学生の探究を支えるための有効な働きかけと環境の整備を心がけます。学生生活における探究の集大成である卒業論文も重視しています。「人間行動学研究演習」は4回生で履修しますが、それにつながる科目として、とくに「教育学研究法1・2」と「教育学実習」があります。「教育学研究法1」では、研究のテーマやトピックの設定、教育・教育学の概念、論文の読み方と書き方、文献・資料の検索に関わる基本的な事柄を学びます。「教育学研究法2」では、学校現場に実際に出かけ、授業の設計・実施・評価やカリキュラムの開発等に関わる実証的データの収集・分析方法を学びます。

「教育学実習」では、大阪市学校支援学生ボランティア制度等を利用して、学校教育の実地体験を通して知見を広げます。4回生では、卒業論文の作成が中心となり、「人間行動学研究演習」が行われます。一人ひとりに担当となる窓口教員がついて、丁寧な指導をします。その際、卒論題目（テーマ）に応じて、窓口教員以外の教員と相談することも奨励しています。卒論題目には、例えば、「中学校外国語科（英語）のスピーキング活動における情動的足場かけに関する考察—Y 市立 X 中学校の分野別授業の事例をもとに—」「不登校の子どもたちの居場所支援に関する一考察—他者とのつながりを目的としては「社会的居場所」に着目して—」「自律性・協働性を育てる特別活動—シェアド・リーダーシップ発生要因の観点から—」などがあります。なお、各科目の詳細や卒論題目一覧は、教育学教室サイトからでも閲覧できます。

教室行事として、教室旅行を毎年1度行っています。原則として教育学教室のメンバー（教育学コース生〔学部生〕、文学研究科人間行動学科教育学専修の大学院生および教員）が参加します。例年、10月に1泊2日の日程で実施しています。企画・運営は学生が中心になって行われています。昼は博物館、資料館、文化史跡等を訪れてたり、夜は懇談を深めたりして楽しみながら学んでいます。教育学教室のメンバーが一堂に会し、親睦を深める絶好の機会です。

2 スタッフ

い い よしひと
伊井 義人 教授

教師教育学、教員と地域社会との連携に関する研究、教員のキャリア成長に関する研究。

ひろた ようすけ
弘田 陽介 教授

教育哲学、身体技法・文化の思想史、子どもの遊び文化の研究。

しまだ のぞみ
島田 希 准教授

教育方法学、カリキュラム研究、授業研究の方法論に関する研究。

せきぐち ようへい
関口 洋平 准教授

比較教育学、近代化と教育変容に関する研究、後発国をめぐる国際教育関係に関する研究。

つじの
辻野 けんま 准教授

教育経営学、公教育の射程の研究、教育上の自由に関する研究。

3 コース決定にあたっての心構え

専門を深めるために論文などを読解する力が必要になります。また、複数の外国語を身につけるよう努力しておいてください。教育の営みはいろいろな人間の活動（生産、経済、政治、遊び、幸福追求…）と関係があります。それゆえ、教育学と関係のない学問領域はないと言っても言い過ぎではありません。いろいろなことに興味をもち、活動し、分野にとらわれずに読書をしてください。教育学の対象となるのは「人間」です。人間の行っているさまざまな活動を何でも見てみよう、経験してみよう、といった好奇心を大切にしてほしいと願っています。

4 大学院

大学院文学研究科人間行動学専攻教育学専門分野（専修）では、教育の基礎理論および広義の教育方法に関する研究を行います。大学院修了者は、大学教員、小・中・高等学校教員、教育研究所等の研究員や国家公務員

（法務教官等）、地方公務員（社会教育主事補等）として活躍しています。

5 卒業後の進出分野

教育学コース生の進路は、「教職」「公務員」「大学院進学」「一般就職」と多種多様です。まず、教職については、教科の免許状（国語、社会、地理・歴史、公民、英語）をとって、中等教育（中学校・高等学校）の分野に就職しています。また、小学校の教師になるために資格試験を受けたり卒業後に通信教育などで単位を補ったりする人もいます。本学の大学院（教育学専修）に進学してから教員になる人も少なくありません。公務員を選ぶ人は、国家公務員（中央省庁勤務や法務教官、家庭裁判所等）および、地方公務員（府県庁職員、市役所職員、社会教育主事等）となっています。教育学の試験が免除されたり、試験対策が教員採用試験と共通するところが多かったりするので、教育学コース生は公務員試験を多く受験しています。大学院進学希望者も毎年います。研究水準が高く、研究者になる人も少なくありません。他の進路については前項を参照してください。「一般就職」は教育学コース生の大半が選択しています。新聞社、放送局、出版社、書店、コンピュータ関連会社、保険会社、銀行、デパート、食品メーカー、文具メーカー、JA、商工会議所、医療福祉関連など、実にバラエティーに富んでいます。

6 メッセージ

教育学コースには、学生専用のコンピュータが設置してある部屋や、教員・院生・学部生が談話できる部屋、自習するスペースが設けられている部屋、教育学の授業や自主的な研究会に使える部屋があります。教育学コースの各部屋には、教育学および隣接領域の辞・事典、統計書、白書、全国の都道府県教育史をはじめとした教育史関係の文献等、教育学関係の資料が豊富に揃っています。実際の学生生活を含めて教育学教室のサイトには多くの情報が掲載されていますので、あわせてご参照ください。

地理学コース

1 本コースの研究内容、特色

哲学者カントは事物の存在を規定する根本的な契機として時間（いつ）と空間（どこ）があるとしました。歴史学が時間を扱うのに対して、地理学は人間の生活する地球表面の「空間」や「景観」の形態、構造、過程を研究する学問です。家屋、道路、耕地、工場、商業・娯楽施設、その他の人間活動のための諸物からなる「空間」や「景観」は人間が歴史の流れの中で作り上げてきた組織、構築物、そして意味体系です。これらは経済・社会・文化・政治・環境などの事象との関連で形成され、意味をなし、またその様態は常に変化しています。

こうして世界はさまざまに分化した「空間」や「景観」から成り立っています。したがって地理学は、東洋史学・西洋史学・文化人類学同様に世界を研究対象にします。分化した「空間」や「景観」は人間のすみかを作り、人間生活を条件づけています。また地理学は、社会学が人間の組織や相互関係を扱うのに対して、人間とそれを取り巻く「空間」や「景観」（広義の環境）について考えます。

本コースの伝統は、大阪およびその周辺における自然・人文各分野にわたるさまざまな事象に関する研究の蓄積です。『アジアと大阪』（古今書院刊）の出版をはじめ、雑誌『空間・社会・地理思想』の定期刊行など、これまで数々の成果をあげています。また、国内に限らず、海外各地で現地調査に携わった経験を持つ専任スタッフを擁し、国際的な広がりを持った授業が展開されています。

しかしながら、地理学は非常に広範にわたる事象を研究対象としていますので、専任スタッフのみですべての分野をカバーすることは困難です。それゆえ毎年数人の非常勤の先生方に出講をお願いし、専任スタッフの専門分野以外の諸分野をカバーし、在学中に地理学研究の懐の深さを理解できるようにつとめています。さらに、卒業論文などで必要な場合には、国内・海外の研究者を適宜紹介しています。

広範な地理学の諸分野を見通すために、「経済・都市」「景観・文化」「社会・政治」「地理情報システム」の4つの専門領域を学習の基本軸として設定し、さらに経済・社会・文化・政治・環境など、人間の生活と行動に

関わるさまざまな要素を幅広く知るためのカリキュラムが用意されています。

1回生の「人間行動学概論」は、人間行動学科の学問に対する基本的な考え方と各コースの学問の基礎的手法を身につけることを目的としています。

2回生では、「地理学概論」「地誌学」で地理学・地域研究の特質を学ぶとともに、「地理学実験実習」「地理学野外調査実習」を通じてインドア・ワーク（室内での地形図・空中写真などの読図と計測、コンピュータを用いた情報処理技術）とフィールドワーク（数日間にわたる野外での計測・資料収集・インタビューなど）の訓練を受けます。また、「地図学」では地図の発達史や測量技術の基礎を、「地理情報学」では近年注目されている地理情報システム(GIS)などに関する最先端の研究課題と方法を学びます。

3回生では、「地理学講読演習」で外国語論文の読み方と専門用語についての知見を深め、「地理学野外調査実習」でさらにフィールドワークの技量を磨きます。

「地理学演習」では、地理学界の最先端の研究動向と研究方法を国内・海外の文献を通じて習得するとともに、各自が関心を持っている研究テーマに即して報告・議論を行い、卒論執筆に備えます。また、「地理学特講」については、非常勤の先生による講義も少なくないので、2回生以上は学年を問わず積極的に受講してください。

4回生は「卒業論文」の作成が中心となります。本コースでは専門領域別に継続的かつきめ細かな研究指導を実施しています。

さらに、授業以外でも適宜「エクスカージョン」を実施しています。「エクスカージョン」は、コースに所属する教員・大学院生・学部学生がキャンパスを離れて実際に「地域」や「景観」を観察し、現地でディスカッションを行うもので、地形図の読図力や野外観察の眼を養うことを目的としています。なお、エクスカージョンの準備は、3回生向け「野外調査実習」の課題となります。

とくに野外調査による観察とデータ収集の重視は、本学「地理学コース」の創設期以来の伝統的特色といえます。近年発達のめざましい情報処理技術についても、

最新のデジタル・マッピング、地理情報システム(GIS)設備、地図室などを擁しています。あわせて地理学コースには、情報処理室、製図室、情報資料室など、教材・測定設備・コンピュータを備えた実習室と大学院・学部学生の指導室(各1室)があります。

また、常に学界の最新の研究動向・技術を教育の中にとり入れるよう心がけ、少人数クラスによる演習、実習で集中的に実力を養うことを目指しています。

2 スタッフ

やまざき たかし
山崎 孝史 教授

グローバルな政治経済の変動とローカルな社会運動に関する政治地理学的研究、戦後沖縄研究。

そだ りょうじ
祖田 亮次 教授

東南アジアにおける人口移動、都市-農村関係、環境問題に関する研究、国内外の災害文化研究。

きむら よしなり
木村 義成 教授

地理情報システム論、保健医療分野におけるGISの応用研究、公共施設の最適立地論。

すがの たく
菅野 拓 准教授

都市地理学、災害マネジメント、サードセクター(NPO/NGO/非営利民間組織)論。

3 コース決定にあたっての心構え

野外観察の技量やデータの計量処理・地図化の技術をはじめ、実践的な外国語能力、総合的な思考力など、地理学的研究を行うために必要とされる能力は多岐にわたっています。それゆえ外部の世界に目を開いて、物事を具体的に考え、新しい課題に意欲的に取り組み、好奇心を持った人に向いているといえましょう。コースでの学習を積み重ねれば、卒業時には国際化・情報化時代にふさわしい能力を獲得することが期待できます。

1 回生では学科共通科目を受講して人間行動学の基礎を学ぶとともに、なるべく幅広く基幹教育科目を受講するように心がけてください。そうした授業を通じて身につけた知識は、多様なテーマを対象にする地理学を学ぶ際に必ず役に立ちます。

また、外国語は少なくとも英語の能力を磨くことが

求められます。学界の最新の研究動向を知るには英語文献の読解力が前提となり、将来自らの仕事や研究の成果を国際的に発信していく上で英語が鍵を握っています。この他、特定の地域や文化を研究したいと考えている人は、その地域の言語になるべく早く親しむことが望まれます。具体的な調査・研究の中で実践的な語学能力が身につくのが地理学の特徴であり、本コースの卒業生の中には、自ら海外調査に実施したり、留学の機会に現地でのフィールドワークを行ったりして、卒業論文を作成した人もいます。

4 大学院

ある程度具体的な研究目標をもち、意欲的な人の進学を期待しています。地理学専門分野(専修)では、博士前期課程については、年2回、入学試験を実施しています。博士前期課程修了後は、行政機関、中学・高等学校や地域計画コンサルタント等のほか、多様な職種に就職しています。一方、引き続き博士後期課程に進学し、研究を継続する人も数多くいます。博士後期課程の修了者のうち、すでに30名以上が大学等の研究職につき、学界で広く活躍して実績をあげています。

5 卒業後の進出分野

近年は学校教員のほか、官庁や企業の実務の分野などに進出し活躍する者が多くなっています。なかには、地理学の専門知識や地図作成技術、あるいはコンピュータ処理能力や現地調査能力などを評価されて、旅行業、地図・写真測量会社、都市計画・地域計画コンサルタント、マスコミ関係、交通関係、海外企業などに就職する人もいます。

6 メッセージ

本コース専攻を希望している人、考慮している人は、学部学生・大学院生・教員が頻繁に利用する地理学情報処理室に気軽に来室・見学して、いろいろな相談をもちかけてください。詳細は、地理学教室のホームページをご参照ください。

国語国文学コース

1 本コースの研究内容、特色

長い歴史を有する日本語と、その言葉によって織りなされる古代以来の文学作品——前者を直接の研究対象とするのが国語学、後者とその周辺を扱うのが国文学、この双方を合わせて本コースは構成されています。

本コースの特色は、古典を重視するという点です。この古典というのは、近代の文学も含まれます。古典作品を深く読み、そこに現代と通底するものを見出す、あるいは、現代とは異質で容易には理解しがたい考え方と対峙する、そういう中から、現代を生きる基盤というものを汲み取ることが重要だと考えています。また、現代の日本語も、歴史的な変遷を経ながらも、根幹部分を古典語と共有するところが多く、ふだん何気なく使っている言葉の奥行きに目を向けることが必要です。

本コースのもう一つの特色は、具体的な根拠に基づきつつ着実に考察を展開させていく、実証的な研究姿勢の修得を目指しているということです。そのため、授業カリキュラムは、文献や資料の扱い、またその解釈など、基本的な学習に比重を置いたものになっています。古典を現在の常識から早呑み込みするのではなく、その時代の考え方や背景に即して理解するためには、このような基礎的な過程が是非とも必要になるのです。

では、具体的にどのような学習の進め方をするのかということですが、2・3回生の間は、国語学国文学担当の全教員の授業を満遍なく受講することになります。国語学だけ、国文学だけ、あるいは特定の時代の授業だけ、といった受講の仕方をすることはできません。国語国文学の幅広い領域について、まず基本的な素養をしっかりと身につけることが重要です。ある偏った分野だけを学んでいては、卒業論文で個別のテーマに取り組み時にも、研究が深まっていきません。

本コースの授業形態は、演習形式の授業の比率が高くなっています。「国文学史A～D」「国語学基礎論」という概説的な科目は講義科目ですが、「国語国文学講読A1・A2、B1・B2」、「国語国文学演習A1・A2、B1・B2、C1・C2、D1・D2」は演習科目です。また、「国語国文学特講A・B・C・D」においても演習形式を組み込んで行われることが少なくありません。演習の授業においては、たとえばある作品を講読するような場合、受講生の間

で分担を決め、それぞれの担当箇所について各人が調べ、考えてきたことを発表し、さらに、それについて質疑を交わしながら問題点を深めていく、といった形式で授業が行われます。担当者には、多くの文献を読み、さまざまな資料を調べるという、地味で根気のいる作業が要求されますが、こうした実地の作業を通じて、文献処理の方法や、緻密な読解のための基本姿勢が初めて身につくのです。と同時に、それらは決して単に退屈で苦しいだけの作業ではなく、経験を重ねるうちに、そうした作業の合間合間に、この学問特有の面白さを感じ取れる瞬間が訪れるようになることでしょう。

このようにして、2・3回生の二年間、本コースの授業を一通り受講する過程で、おのずと自分の好みの分野、関心のある作品がしぼられてくるはずですが、4回生の卒業論文では、自分自身で具体的なテーマを模索し、資料・データを集め、考えを深め、結論を導いていきます。この1年は、学習時間のほとんどを卒業論文の制作にあてなくてはなりません。もちろん専任教員が指導・助言をしますが、あくまで研究主体は自分自身であり、最終学年としての自覚が問われます。

2 スタッフ

(国語学)

おおしま ひでゆき
大島 英之 講師

日本語の語彙・音韻史、特に漢語・漢字音の歴史。中国から伝わった漢字とその読み方が、日本語のなかでどう変化していったのかを研究する。

(国文学)

まへだ りょうたろう
間枝 遼太郎 講師

中世文学、特に寺社縁起・伝承文学の研究。伝承・神話の生成の様相やその歴史的展開について研究する。

くぼり ひろあき
久堀 裕朗 教授

近世文学、主に人形浄瑠璃史の研究。作品がどのような時代背景のもとに生まれ、どのように享受されていたのかを考察する。

おくの くみこ
奥野 久美子 教授

近代文学、特に芥川龍之介など大正期の作品研究、および講談本研究。草稿や典拠、文化的背景の考察により、作品の成り立ちを研究する。

やまもと まゆこ
山本 真由子 准教授

平安時代の文学、主に漢文学・和歌の研究。漢語表現と和語表現との関わりを考察し、作品の表現の成り立ち・特質を研究する。

3 コース決定にあたっての心構え

一般に言語や文学の研究には、人間についての広く深い教養と、やわらかな知的的好奇心が必要とされますが、国語国文学もその例外ではなく、日頃からあらゆる機会を捉えて、この方面の涵養につとめてほしいと思います。

また、大学での勉強では、学生一人ひとりに、主体的に問題意識を持って考え、持続的にそれを深めていくような姿勢が要求されます。授業を通して興味を喚起された事柄については、積極的にその方面の書物について、自ら考察を重ね、深めていくような学習態度を身につけていってほしいと思います。何よりもまず本を読むことが重要ですが、具体的にどのような本を読めばよいか、どのような問題意識をもって学んでいけばよいかを知るためには、上記の教員が担当する基幹教育科目の授業を受講することも有益です。

中学校や高等学校の国語教員を志望する人は、本コースに進むことをお勧めします。どのコースに所属しても、国語教員になるための単位を揃えることはできますが、教員としてふさわしい十分な国語力を養うためには、卒業論文まで含めて、日本語や日本文学にじっくり取り組むことが必要だと考えるからです。

4 卒業後の進出分野

本コース卒業生には高等学校や中学校の国語教員が多数いるとともに、一般企業や公務員などさまざまな方面に就職しています。丹念に調査し、資料を深く読み、それを誰もが納得するような形で報告するという本コースのトレーニングは、あらゆる実務の基本であるともいえ、どのような職種に就いても生きることでしょう。

授業を通して、あるいは、卒業論文に取り組む過程で、学問の面白さに目覚め、さらに奥深くまで攻めたいという意欲をもった人のためには、大学院「国語国文学専修」に進学する道も開けています。伝統ある本専修は、これまで多くの優秀な人材を学界に輩出して来ています。

また、中学・高校の教員志望の人は、博士前期課程を修了し専修免許状を取得してから教職に就くということも、現在のごく普通になっています。

5 メッセージ

本コースに関心のある人、もっと詳しい情報を得たい人は、上記の教員のところに、気軽に相談に来てください。また、国語国文学院生・学部指導室を覗いてみてください。ここは普段、学部生や大学院生が授業の準備や研究を行っている部屋です。学年の上から下までが日常的に親しく接する中で、下級生は勉強法などを教えてもらっています。

6 その他

研究室では雑誌『文学史研究』を発行して研究成果を公表しています。

本コースの在学生・卒業生・教員から成る同窓会組織「大阪公立大学国語国文学会」において、年一回の総会（大学院生の研究発表会や講演会・懇親会）が開催され、また、春の新生歓迎茶話会、秋の研修旅行、それに卒業生を送り出す予餞会など、各種の教室行事を行って、構成員間の親睦をはかっています。

中国語中国文学コース

1 本コースの研究内容、特色

中国は古くから日本にとって重要な隣国であり、様々な交流がありました。前世紀に不幸な歴史がありましたが、近年は政治・経済・文化・科学技術の各分野で、再び重要なパートナーとなっています。今後も相互交流はますます活発となり、重要度は増してゆくことでしょう。

しかし、相互理解のためには、歴史や文化的な伝統を十分に理解することが肝要です。その国の言葉を学び、人々の考え方を知り、文学、演劇、映画などに親しむことによって、初めて深い相互理解に到達するのです。

また、中国は単に歴史が長いだけでなく、国土が広く地域性に富み、多くの民族が暮らしています。19世紀の半ば以降には、西洋文化の流入などによる著しい社会変化も生じています。こうした多様な文化が混じり合うつぼのような状態は、今もお継続しており、新たな中国の文化的伝統を産み出しつつあると言えます。こうしたことから、私たちのコースでは、変容をとげゆく中国文化の本質を多角的にとらえるため、中国の文化全般にわたる幅広い分野を教育・研究の対象としています。

現有スタッフは、語学1名、文学1名、文化論1名の3名です。

語学の分野では、古代漢語から現代漢語に至る中国語の歴史的な展開に即して研究をしています。音韻学や辞書の研究など、新しい角度からの研究にも意欲的に取り組んでいます。

文学の分野では、古典文学の基本に立ち返って、原典資料を精密に読み解きます。当時の社会的・文化的背景にも目配りしていきます。

文化論の分野では、現代中国（中国・台湾・香港）に重点を置き、映画、演劇などの表象芸術を中心とした研究を行っています。

中国に関心を持つきっかけは、中国語でも、中国の文学、映画でも、また中国の自然でも構いません。どんな入り口から入っても、中国の世界は広い奥行きと刺激的な魅力を持って、みなさんを迎えてくれるはずです。そして本コースのスタッフは、みなさんの中国世界の

探求の道案内をつとめることをお約束します。

次にカリキュラムについて申しますと、まず「中国語中国文学概論A～D」で全体的な知識を身につけ、2～3回生向けの「基礎演習」、「中国語コミュニケーション1～4」と3～4回生向けの「演習」で、現代中国語の基礎力、古典文学の読解力を身に付け、辞書などの工具書の使い方、および研究方法を学びます。また3～4回生向けの「特講」で、やや専門的な知識や新しい研究分野についての知識も得られます。そうした基礎の上に、4回生で卒業論文指導を受けつつ、大学での勉強の総決算として、卒業論文の執筆に当たることになります。講義科目でも参考文献などを読んで積極的に知識を身につけることが必要ですが、演習科目ではよりしっかりとした予習が必要です。そうして自分から積極的に学ぶ姿勢が、みなさんの大学生活を有意義にすることは言をまたないでしょう。

なお、日頃出入りすることになる共同研究室の雰囲気ですが、和気藹々としており、決して堅苦しさを感じることはありません。先輩達はみな親切で、いろいろと教えてくれます。

また学生、院生、卒業生、教員を中心に中国学会という学会が組織されており、年2回研究発表会が行われています。この学会では『中国学志』という研究誌を発行していますが、そのレベルは高く、2002年には「蘆北賞」を受賞しています。

2 スタッフ

先述したように、3人の専任教員から構成されています。その専門は各々次の通りです。

(語学)

おおいわもと こうじ
大岩本 幸次 教授

中国字書編纂史および字音史の観点から、金代(1115-1234)の資料が字書史上に果たした役割や意義、また金・南宋・元の時代の言語音体系といったテーマで研究を行ってきました。近年は本邦や欧州の字書・漢語文法書を対象として中国理解の諸相に関する研究を進めています。

(文学)

たかはし みき
高橋 未来 教授

唐代文学、特に晩唐に活躍した詩人杜牧について、杜牧が著した『孫子』注釈書に見られる思想と文学作品との関連や、政変に対する彼の处世態度など研究しています。また、唐・宋時代の詩詞に使用される俗語に着目し、それぞれの用法や変遷についても研究を進めています。

(文化論)

ちょう しんみん
張 新民 教授

中国語圏の映画の歴史を研究しています。これまで、1930年代における映画政策、「軟性映画」理論、第五世代監督作品などについて研究を進めてきました。最近では、日中戦争期における上海、東北、台湾といった地域での映画制作や上映状況また映画政策についても研究しています。

3 コース決定にあたっての心構え

本コースを志望する人は、まず中国語をしっかり学んでおいてください。2回生以降は、特修中国語なども活用してほしいものです。このようにして、読むだけでなく、聴き、話す能力もマスターできるよう心掛けていれば、4年間で中国語がかなり身につきます。

それから、先述したように本コースでは、文献の読解を基礎にして研究を進めてゆきますから、2回生に上ってきたら、伝統文化を理解するために古典語(いわゆる漢文)の力も必要となります。その意味で共通専門科目である「中国古典語1・2」の履修を勧めます。

4 大学院

卒業論文のテーマをもっと深く掘り下げたいと希望する人には、大学院に進む道が開かれています。博士前期課程(2年間)と博士後期課程(3年間)の二段階制になっていますが、特別な人だけが進学する敷居の高い世界だと思わないで、どしどし積極的に挑戦してほしいと思います。自分の研究テーマをもち、基礎学力を備え、勉強に対する意欲のある人なら誰にでも門は開かれています。

博士前期課程の段階では、中国というフィールドの奥深さと、多様性にまず触れたうえで、研究の土台を築くことが求められます。博士後期課程では、更に一步進んで自分自身の問題意識をより鮮明にして、本格的な研究活動をスタートさせます。指導する教員スタッフは、これまで蓄積された先行研究を咀嚼したうえで、新たな研究成果を紡ぎだし、次世代の研究者へと伝えることを自らに課しており、新たな視点からの絶えざる探究を使命としています。また、課外には教員や院生のみならず、OB・OGや他大学研究者を交えた研究会、勉強会が多く開かれ、活発な研究活動を展開しています。

5 卒業後の進出分野

かつては高等学校の国語教員となり、漢文や日本古典を担当する人が多かったのですが、近年はその割合が減り、企業や官公庁に就職する人が増えてきました。新聞社や旅行社や商社などに就職して語学力と専門的知識を活用している卒業生がいる反面、百貨店やスポーツメーカー勤務、消防士や製薬会社、彫刻家など、それとはほとんど関係のない仕事を選ぶ人もいてさまざまです。

また、大学教員については先述しましたが、ほかにも外国語科教育法(中国語)などを修めることで、学部卒業生にも高等学校で中国語を教える道が開かれています。

6 メッセージ

以上、限られた字数で私達のコースの紹介を試みましたが、もっと情報を得たい人は、中国語の時間などに専任教員をつかまえて遠慮なく尋ねてください。また、いつでも共同研究室を覗いてみてください。学生、院生でとても賑やかで、皆さんを「熱烈歓迎」してくれるはずです。

英米言語文化コース

1 本コースの研究内容、特色

英米文化、イギリス文学、アメリカ文学、および英語学を研究対象としています。

本コースでは、学生が、これら4つの分野を対象とする学問的研究に必須な基本的知識を修得するとともに、実質的に「世界共通語」として機能している英語そのものの高度な運用能力を身につけることも目的とした教育・指導を行っています。

英米文化 — イギリスおよびアメリカおよびその他の英語圏にかかわる、さまざまな文化現象や、英語文化の特色を探ることをめざします。英語を母語とする教員が担当し、言語・文化の諸問題を広い文化的コンテキストにおいて考察を加えます。

イギリス文学 — ヨーロッパ文学の一環をなしていますが、大陸からの異民族の侵略を経験しながらもその地勢が四方を海に囲まれていること、そして秩序と均衡を重んずる国民性によって、独特の複雑な性格もっています。古来大陸との文化交流を常に行ってきたイギリスは、文学と思想の両面において優れ、特に近世以降は、世界の文学に大きな影響を与えてきました。詩・演劇・小説いづれのジャンルも、他者との対話を重視する伝統に支えられ、異文化理解の能力の養成をめざす皆さんの知的好奇心を十二分に満足させてくれるでしょう。

アメリカ文学 — アメリカ文学の特色は、さまざまな意味での若さです。初期植民以来わずか400余年の歴史しかもたないのに、アメリカの建国理念、ピューリタンの理想をその出発点として実に多様で豊かな文学世界が拓かれてきました。作品においては、「宇宙とオリジナルな関係」（エマソン）をもとうとする「アメリカの夢」が繰り返し描かれています。観念が現実の前に挫折するという過程も、新世界では、深い共感をもって語られています。そして皆さんは、現代最先端の文学作品にいたるまで、あらゆるジャンル・時代のアメリカ文学について学ぶことができます。

英語学 — 近年の認知科学への関心の高まりとともに、言語学も学際的要素が強くなってきていて、英語学もその影響を受けていると言えます。これにより、より実際に使われている生きた英語を考察しやすくなったと言えます。英語学の教員の研究領域は、英語の類型論

的考察を通時的、共時的に行っており、特に学生は英語の意味、機能、構造の多様性、またその歴史的編成過程について認知言語学、文化人類学などを踏まえた学際的アプローチで学ぶことができます。

つぎに、履修モデルを示しておきましょう。

本コースを選んだ学生は、1年次で必修科目の学科共通科目、2・3年次で選択必修科目、4年次で「言語文化研究演習1、2」および「卒業論文」を履修することになります。自由選択科目も2・3年次に履修できます。本コースでは、3回生の初めから希望する「卒業論文ゼミ」に所属し、2年間教員から直接卒業論文について指導を受ける体制を取っています。3回生の初めにゼミに関するガイダンスを開きます。

ここでは、イギリス演劇に興味を持っているが同時に他の国々の文化にも興味を持ち、卒業後はマスコミ、ファッション関係に就職したいと思っているシオリさんという架空の学生を想定して、履修の一例を紹介してみます。

1回生の前期、後期は基幹教育科目もあるので、履修するのは必修の学科共通である「言語文化概論A、B」になります。これらの科目では言語文化学科の学問が紹介されますから、ここで自分の志望するコースを決めることができます。コースの選択は1回生の後期に行われます。

2回生でも基幹教育の履修がありますから、開講状況、配分などを考えて、本コースの概論的な科目である「英米文化概論」「英米文学史A、B、C」「英語学概論A、B」、またシオリさんの興味のある演劇、文学、映画などに接することのできる文学・文化「演習」、「特講」のなかから履修する科目を選び、さらに英作文や英会話の能力を養成する「英語コミュニケーションA、B」を履修します。3回生になると、ゼミに所属して専門的な勉強が本格化します。

「卒業論文」で扱いたいと思っている分野（シオリさんならイギリス文学）に関連した概論（シオリさんの場合、「英米文学史A、B」）や演習（「英米文学演習A、B」）をできるだけ多く履修し、テーマを絞るようにしてください。遅くとも3回生の前期までに関連分野の科目は受講しておきましょう。教職の単位が必要な場

合は、シオリさんよりももう少し、本コースに重点をおいた履修が必要になります。

4回生では、「卒業論文」と授業に加えて就職活動という多忙な日々が続くので、あまり多くの授業を取ると論文に集中できません。論文は、3回生の時点でテーマを決めて、早めに指導教員に相談し、準備を進めておくようにしてください。

2 スタッフ

専任教員の専門分野は、次のとおりです。

(イギリス文学)

きよかわ さちえ
清川 祥恵 准教授

中世を理想として夢みていた19世紀英国の詩人、ウィリアム・モリスの作品を中心に、現実とは異なる世界を呈示する文学である神話、ファンタジー、ユートピア、SF等の思想的意義を研究しています。

(英米文化)

ジーン リン
Jean LIN 准教授

My field of research is aesthetics. I am interested in the cultural, social, political, and philosophical aspects of artistic practices today, including cultural appropriation in art and transcultural aesthetics.

(アメリカ文学)

たかはし あい
高橋 愛 教授

ハーマン・メルヴィルの小説を中心に19世紀のアメリカ文学を研究しています。文学作品におけるジェンダーの表象、特に「男らしさ」の表象に関心があります。

(英語学)

とよた じゅんいち
豊田 純一 教授

英語やインド・ヨーロッパ語の構造や変化を学際的な視点から研究しています。近年では、英文法の特異性、英語史に於ける方言間の接触、ニュージーランド英語、死に関する言語人類学などを研究対象にしています。

3 コース決定にあたっての心構え

学生には、英語そのものへの興味と、それをマスターしようとする意欲と根気が要求されます。各分野を勉強する際の留意事項としては、イギリス文化・文学では、1・2回生でヨーロッパの文化や文学を視野に入れながら、イギリス文学あるいは文化全般への飽くことのない探究心を持ち続けること、アメリカ文化・文学では、幅広く今日の世界情勢や学問・芸術・文化の動向に関心を寄せること、英語学では、多様な英語の言語形態に接することにより、日常使われる口語表現、文学作品に代表される文章表現などに興味深いトピックを見出そうとする意欲が求められます。

4 大学院

本コースの大学院は、新制の大学院としては、最も先行する大学院として、昭和28年に修士課程、それから2年後の昭和30年に博士課程が設置され、多くの研究者を送り出し、学界に少なからぬ貢献をしてきました。大学院における名称は、言語文化学専攻英語英米文学専修です。イギリス文学、アメリカ文学、英語学、英米文化学の研究および演習科目が提供されています。専修生はこれら4分野のなかからテーマを選んで研究を進めることができます。

博士後期課程修了者の多くは、大学の教員として教育と研究に従事しています。また、博士前期課程を修了して高等学校の英語教員として活躍している人もたくさんいます。近年、高校教員の採用に際しては、博士前期課程修了者で専修免許取得者が歓迎される傾向が強まっています。

5 卒業後の進出分野

卒業生はほとんどすべての分野に進出しているので、目標をもった勉強によって自分の希望する分野に進出することが可能です。

6 メッセージ

自分にあった分野の選択や、卒業論文のテーマについては、教員が個々に相談と指導に当たります。

各教員がオフィス・アワーを設けていますので、いつでも相談に来てください。

ドイツ語圏言語文化コース

1 本コースの研究内容、特色

ドイツはEU（欧州連合）の一員として、しばしば国際的な政治経済のニュースにその名が登場しますが、決して遠い国ではありません。関西空港から直行便に乗れば12時間程度でミュンヘンに着きます。長期あるいは短期の留学をしてドイツでの語学講習に参加することは決して難しいことではないのです。また、インターネットを使えば、ドイツ語放送を通じてリアルタイムの情報を手に入れることができますし、ドイツ語圏の大学との交流授業に参加することも可能です。

ドイツ語は英語と同様、西ゲルマン語に属す言語です。同族の言葉でありながら、英語では失われた興味深い言語学的特徴を保持しているのがドイツ語です。英語に加えてドイツ語をマスターすることは、将来どんな分野で活動するにしても、大きな実践的能力として高く評価されるだけでなく、視野を広く世界に向けて拡大してくれるというすばらしい効果を持っています。文学部でしっかり外国語を学び、ヨーロッパに関する知識を身につけることにより、社会人になる人も研究者を目指す人も、世界に羽ばたくために必要な基盤を手に入れることができるでしょう。

本コースは、冒頭紹介したドイツ以外に、広くドイツ語を公用語とするオーストリア、スイスといった、いずれも美しい自然と豊かな文化を持つ国々を研究対象にし、これらドイツ語圏の国々の伝統的文化や芸術を学ぶ人にも、この地域の現代的な文化的事象に関心を持つ人にも、その関心領域に応じた柔軟な指導を行う体制を整えています。

ドイツ語圏言語文化コースでは、未知の世界への探求心を持った人を歓迎します。

授業科目は、大きく分けて次の3分野に設定されています。

1) 「ドイツ語圏文学」はドイツ語圏の文学作品の研究を行います。たとえば、18世紀では、ゲーテの戯曲『ファウスト』や、シラーの『ヴィルヘルム・テル』、19世紀では、クライストの喜劇『壊れがめ』やホフマンの怪奇幻想小説『砂男』、20世紀に入ると、カフカの『変身』や、マンの長編小説『魔の山』、ヘッセの『車輪の下』、あるいは現代では、エンデの『モモ』やプロイスラーの『クラバート』などを例としてあげることができます。

作品を読み解くためには、作品成立の背景にある社会的歴史的状況への目配りは欠かせません。

2) 「ドイツ語圏文化」の領域では、ドイツ語圏の演劇、音楽、芸術、民話（たとえばグリム童話集）、あるいは自然、社会、歴史、風俗・風習、社会制度、さらにはスポーツなどを扱います。また、ドイツ文化の根底にある思想（人間観や文化観）も扱います。

3) 「ドイツ語学」の領域では、ドイツ語の言語構造について純粋に記述言語学として取り扱うだけでなく、ドイツ語の歴史や言語と社会とのかかわりについても研究します。またこのコースでは、実践的なドイツ語の習得にも力を入れており、読む・書く・聞く・話す力をバランスよく身につけることを目指しています。特に、母語話者の教員によるコミュニケーション能力の開発には力を入れています。

専門科目は、文学・文化・語学の3領域のそれぞれに、概論的科目、演習科目、特講科目の3タイプの授業が開講されます。まず、本コースに専攻を決めたみなさんは、専門的な学習に向けた基礎力をつけるために「ドイツ語圏言語文化基礎演習」「ドイツ語圏言語文化演習」を受講してください。また、概論的科目は、各領域の基礎的な知識を提供する内容となっていますので、なるべく早い年次に履修することが望まれます。特講科目は各分野の専門知識をさらに深めるために開講されています。専攻生のみなさんは、これら3分野3タイプの科目を、バランスよく受講することが重要です。

並行して、「ドイツ語コミュニケーション1・2」「ドイツ語圏ランデスクンデ」が開講され、ドイツ語の実践的な能力を高めてゆくための演習が行われます。これらは母語話者による授業です。この貴重な時間は、留学希望者のみならず、専攻生のみなさんに大いに活用してほしいと思います。

授業とは別に、卒業論文を執筆するための準備として、学年ごとに関心のあるテーマについて自由に調べ報告する機会が設けられています。最終年次にはこれらの研究発表をもとにテーマを絞り込み、担当教員の指導を受けながら、卒業論文を完成させることとなります。

2 スタッフ

(ドイツ語圏文学・文化)

たかい きぬこ
高井 絹子 教授

20世紀ドイツ語圏文学、とくに戦後文学および女性文学について、社会状況と文学テキストの関係性の観点から研究している。また、世紀転換期ウィーンの文化的事象にも関心を持っている。

はせがわ けんいち
長谷川 健一 准教授

18・19世紀の文化と文学について、その歴史的・宗教的・社会的背景も含めて総合的に研究している(敬虔主義、啓蒙主義、自伝文学など)。

(ドイツ語学・ドイツ語圏文化)

のぶくに もえ
信國 萌 准教授

ドイツ語学が専門分野で、特に現代ドイツ語の形容詞と構文の統語論的・意味論的關係を、事象の捉え方という視点から研究している。また、コーパスを用いたドイツ語の使用実態の調査と分析も行っている。

ジモン エルトレ
Simon OERTLE 特任准教授

言語学(特に比較言語学)を主たる研究領域としている。また、ドイツ語教育の研究ならびにドイツ語圏(特にスイス)と日本の比較文化研究を行っている。

3 コース決定にあたっての心構え

ドイツ語圏言語文化コースは、ヨーロッパに関心がある人やドイツ語に興味を持つ人を歓迎します。大学入学後から、ヨーロッパ、とりわけドイツ・オーストリア・スイスの文学、芸術、文化に親しむように心がけてください。また1回生の時から「ドイツ語」を受講しておいてください。本コースの教員と直接知り合うことができます。

4 大学院

ドイツ語圏言語文化コースで学んだ後、引き続き大学院で研究を続けることができます。大学院の正式名称は「文学研究科・言語文化学専攻・ドイツ語圏言語文

化学専修」となります。本専修では、ドイツ語圏の文学、言語、文化、思想を研究することができます。現在の担当教員の専門領域は、「現代文学」「近代文学」「ドイツ語学」「ドイツ文化学」「ドイツ語教育学」ですが、それ以外の領域を対象として研究を行うことも可能です。

「博士前期課程」修了後、さらに3年間の「博士後期課程」を修了し、「博士論文」の審査に通れば「博士(文学)」の学位が得られます。現在、本専修に在籍する大学院生はそれぞれ関心を抱く研究テーマを選び、研究者をめざし研鑽を積んでいます。

5 卒業後の進出分野

専門としてドイツ語を学んだことを直接生かせる分野として、研究者を目指す大学院進学と外国語を使う文化的機関への就職が挙げられます。ドイツ語とは直接結びつかない一般企業へ就職する人も多いですが、大学で複数外国語を学んだ努力は一定の評価を得られることでしょう。卒業生の最近の就職先には、商社、銀行、メーカー、放送局、旅行会社などの一般企業の他に、美術館、教員、司書、外国語学校、官公庁などがあります。

6 メッセージ

ドイツ語圏の国々は、同じドイツ語を母語としながら、地域性を大事にしています。言語的には方言を根強く残し、文化的にも独自性を保ちつつ、相互に刺激し合っており、独特の精神文化を形成してきました。私たちの研究対象は、私たちの文化とは似ているようで似ていない異文化です。この手強い相手に果敢に挑んだ人には、21世紀の矛盾に満ちた社会の中でどのように生きるべきかという重要な問いに対し、貴重な示唆が与えられることでしょう。

フランス語圏言語文化コース

1 本コースの研究内容、特色

古代ローマのラテン語に由来し、世界史に深く刻まれた歴史と伝統をもつフランス語は、現在も世界各地で用いられている言語の一つです。フランス語圏言語文化コースでは、フランス語の運用能力を基盤としつつ、言語、文学、文化、歴史、社会といった分野を横断的に学ぶことを目的としています。

本コースの学びは、フランス語という「ことば」を幹とし、そこから言語学習や文学研究、文化研究へと関心を広げていく構成になっています。さらに、アート、歴史、社会、思想など、さまざまな領域へと枝分かれしながら、フランス語圏世界の多様な姿について考察することができます。

たとえば、皆さんがイメージする「フランス」には、ヴェルサイユ宮殿やエッフェル塔、ジャンヌ・ダルク、ルーヴル美術館や印象派、シャネルやヴィトンといったファッション・ブランド、美食文化、映画、文学、サッカーなどがあるかもしれません。しかし、それらはなぜ「フランスらしさ」として世界に定着したのでしょうか？ 本コースでは、こうした既成のイメージを鵜呑みにするのではなく、その背後にある歴史的経緯や政治的意図、社会構造を、フランス語の一次資料を通して批判的に読み解きます。「憧れの対象」を「分析の対象」へと変えることで、世界を測る自分なりの物差しを手に入れることが、本コースの学びの醍醐味です。

フランス語は、フランス国内だけでなく、ヨーロッパ（ベルギーやスイス）、北米（カナダ等）、カリブ海地域、アフリカ、オセアニアなど、世界のさまざまな地域で使用されています。歴史的には、18世紀以降、国際的な外交や知的交流の場で重要な役割を果たしてきました。現在においても、フランス語は国連や国際オリンピック委員会をはじめとする国際機関で用いられる言語の一つであり、フランス語を公用語・準公用語とする国や地域が参加する国際的な協力枠組みも存在します。

こうしたフランス語圏の広がりには、単一の文化や価値観によって説明できるものではありません。植民地支配の歴史、移民の経験、多言語・多文化社会の形成など、地域ごとに異なる歴史的条件のもとで、フランス語はさまざまな役割を担ってきました。本コースでは、こうした多様性に目を向け、フランス語圏世界を一枚岩として捉えるのではなく、複数の視点から理解する姿勢を重視しています。

語学力の向上は本コースの重要な柱の一つです。海

外語学研修や提携大学（リヨン第三大学、トゥール大学、CYセルジー・ポントワーズ大学など）への長期の留学制度を活用することで、実際にフランス語が用いられる環境に身を置き、言語運用能力を高めることも可能です。ただし、ことばを学ぶことは、単に流暢に話せるようになることだけを意味するものではありません。その言語が用いられてきた歴史や社会、文化的背景を理解することもまた、重要な学びの一部です。また、本学の交換留学制度や国際交流プログラムを通じて、留学先の人々や、本学に来る留学生・ゲストと交流する機会も得られます。異文化について学ぶと同時に、自身が属する国や地域の文化についても新しい観点と広い視野を得られるはずです。

本コースの卒業論文では、文学や言語学に加え、歴史、美術、音楽、ファッション、食文化、建築、社会現象など、幅広いテーマが扱われています。フランス語を通して得た知識や視点を生かしながら、自らの関心に基づいて研究テーマを設定できる点が特徴です。

フランス語圏言語文化コースで学ぶことは、特定の国や文化を絶対視することではありません。むしろ、複数の言語や文化が交差する世界を、比較的・相対的に捉えるための視点を身につけることにつながります。フランス語圏という、多様性と幅広さをもつ豊かなフィールドを通じて、現代世界を多角的に理解する力を養うことが、本コースの目指す教育の一つです。

2 スタッフ

ふくしま よしゆき
福島 祥行 教授

言語学・相互行為分析（コミュニケーションや会話分析や文法の研究）、言語学習（協働学習、ポートフォリオ、CALLなど）、コミュニティ・社会的レジリエンス創発（協働する現場の研究）が専門ですが、現代フランス語圏にまつわる社会や文化についても指導をおこなっています。

しらた ゆき
白田 由樹 教授

19世紀末のフランス語圏文化、とくにジェンダーやエスニシティの表象、メディアとの関係といった観点からフランスの女優サラ・ベルナルを研究し、最近ではベルギーのアール・ヌーヴォー運動史にも着目しています。

はらの ようこ

原野 葉子 准教授

専門は20世紀仏文学。ボリス・ヴィアンを中心に、レーモン・クノーや潜在文学工房、超前衛的研究集団コレージュ・ド・パタフィジック等を研究しています。もっぱら（空想）科学と文学の関係について思考中。

おおやま まよ

大山 万容 准教授

専門は21世紀外国語教育。子どもから大人までを対象にした複言語教育について研究しています。「言語への目覚め活動」や「統合的教授法」、視覚的言語自伝や言語景観などの研究をすすめています。

ジュリアン ム ナン

Julien MENANT 特任講師

フランス語の第一言語話者としてフランス会話、フランス語圏文化などを教えますが、フランス語教育の専門家でもあり、とくにゲームを用いたフランス語教育法の研究などをおこなっています。

3 コース決定にあたっての心構え

以下は、よく寄せられる質問とそれへの回答です。

Q1. フランス語の成績にあまり自信がありません。コースについていけますか。

A. はい、大丈夫です。本コースでは、語学力の習得と同時に、フランス語が使われてきた社会や文化を理解することを大切にしています。そのため、成績や資格の有無だけで学修の可否が決まるわけではありません。授業に継続して参加し、資料を読み、考える姿勢があれば、学びを進めていくことができます。

Q2. 1回生の時点でフランス語があまり得意でなくても問題ありませんか。

A. 問題ありません。2回生以降はフランス語に触れる機会が増え、授業や演習を通して段階的に力を伸ばしていけます。語学力は短期間で完成するものではなく、専門科目の学修と結びつきながら、時間をかけて身につけていくものです。

Q3. 途中でフランス語が難しく感じたらどうすればよいですか。

A. 専門演習やコミュニケーション科目をしっかりと活用してください。フランス語力を鍛えるための専門演習科目や、コミュニケーションの授業、基幹教育科目のフランス語特修などが用意されています。それぞれの授業で出される課題に着実に取り組んでいけば、少しずつ力を伸ばしていくことができます。

Q4. 語学検定や資格は取ったほうがいいですか。

A. 必須ではありませんが、目安として活用できます。実用フランス語技能検定試験（仏検）や、DELTA・DALF・TCFなどの語学試験に挑戦する学生もいます。これらの資格は必須ではありませんが、自分の学修の到達度を確認する一つの目安として役立ちます。

Q5. 留学を考えています。どのくらいのフランス語力が

必要ですか。

A. 行き先によって異なりますが、一定の語学力が求められる場合があります。長期留学の場合、受入大学によっては語学力の証明が必要になることもあります。また、資格が求められない場合でも、日常生活で意思疎通ができ、現地の授業についていける語学力を目標に勉強することは大切です。そうした準備は、現地での生活や人との交流、そして自信にもつながります。

Q6. 中学校・高等学校のフランス語教員を目指しています。このコースは向いていますか。

A. はい、教員志望の学生にとっても有意義なコースです。教職課程に必要な単位は他のコースに所属していても履修できますが、本コースでは、フランス語の運用能力と、フランス語圏の社会・文化に関する理解を体系的に学ぶことができます。

Q7. このコースで学ぶことは、教員としてどのように役立ちますか。

A. 言語観や文化理解を深めることができます。このコースでは、フランス語を「使えるようになる」だけでなく、その言語がどのような社会的・文化的背景のもとで用いられてきたのかも学びます。こうした学びは、将来教育の現場に立つ際に求められる、言語観や文化理解の基盤となります。卒業論文までを含めた一貫した学修は、教員としての大きな土台になるでしょう。

4 大学院

本コースでの学修を通して、さらに専門的に研究を深めたいと考える学生には、大学院への進学という選択肢があります。大学院には博士前期課程（2年）および博士後期課程（3年）が設けられており、フランス語学、フランス語教育、文学、文化研究などの分野で、より高度な研究に取り組むことが可能です。

修了者の進路は教育・研究職に限られるものではなく、近年では民間企業など多様な分野に進む例も見られます。学部段階で培った語学力や文献研究の基礎は、大学院での研究活動の重要な土台となります。

5 卒業後の進出分野

本コースの卒業生は、教職（英語、国語）をはじめ、マスコミ、商社、金融、メーカー、アパレル、IT関連、CA、官公庁など、さまざまな分野で活躍しています。卒業後、必ずしもフランス語を直接使用する職種に就くわけではありませんが、フランス語による情報収集力や、異なる文化的背景を踏まえて物事を考察する力は、多くの職場で評価されています。また、就職後にフランス語やフランス語圏に関わる業務を担当する例もあり、フランス系企業や関連グループ、あるいは製品や原材料を通じてフランスと関わる企業などで、その知識や経験が活かされる場合もあります。本コースで身につけた調査力・分析力・表現力は、職種を問わず応用可能な基礎的能力として位置づけることができます。

表現文化コース

1 本コースの研究内容、特色

表現文化コースは、現代社会の文化現象を「表現」という切り口から考察・研究するコースです。表現文化コースが提供するプログラムの特色は、現代社会の多様な文化現象における「表現」あるいは「表現する行為」に注目し、それを「表現の歴史」、「表現が生み出される場としての社会」、そして「表現に形を与えるメディア」の三つの観点から多面的に考察する点にあります。

「表現」に関わる文化現象は多様です。人間のものの見方や感じ方の「表現」の代表例は、文学、美術、演劇、写真、映画などの芸術でしょう。しかし、「表現」に含まれるのはそれだけではありません。個人や社会の感性や価値観を表現するファッションや化粧、ポピュラー音楽やマンガ、広告やメディアイベント、さらには、現在多くの人々によって楽しまれている多彩な創作活動（二次創作や同人活動）もまた、そこには含まれます。表現文化コースが対象とする「表現文化」とは、こうした多様な現象を指しています。

表現文化コースでは、そうした「表現文化」を、「歴史」、「社会」、「メディア」という三つの観点から多面的に考察します。

まず「歴史」ですが、あらゆる表現は、突然、無から生まれるわけではありません。すべての表現には、その形式やジャンルの歴史があります。たとえば、あらゆる物語には祖型があり、最新の小説やマンガの物語もまた、しばしば長い歴史的伝統からその力を得ているのです。そして、現代の演劇作品もまた、日本・西洋の長い伝統と無関係ではありません。したがって、表現文化コースでは、同時代の表現だけでなく、その歴史にも注意を払います。

つぎに「社会」ですが、あらゆる表現は、純粋に個人的なものではありません。それはその表現が生み出され受容される社会の構造と関係しています。ある映画が大ヒットするとき、それは個人的な好みの集積ではなく、ある特定の社会状況のもとで人々の好みが多様化されていることを意味します。表現文化コースではしたがって、表現を、それを生み出し、それが受容される社会と関係づけて考察します。

最後に「メディア」ですが、私たちが会おう表現はすべてある特定のメディアによって形を与えられていま

す。そのさい、メディアは無色透明な容れ物ではなく、それ自体の可能性と限界を持っています。たとえば、動く映像を映画館で見るのか、居間のテレビで見るのか、インターネット上のコメント機能付き動画共有サイトで見るのかによって、私たちと映像との関係は大きく異なったものになるのです。表現文化コースは、こうした表現とメディアの関係にも注目します。

最後にもう一つコースの特色を付け加えるとすれば、上記のような考察・研究を行っていくうえで、コンピュータを始めとする情報・メディア機器を積極的に活用していくことが挙げられます。視聴覚メディアやソフトウェアを用いたプレゼンテーションは、表現文化コースで習得できる基本的スキルのひとつです。

このように、表現文化コースではきわめて多様な対象・テーマが授業で扱われます。したがって、本コースを志望する学生には、次の二つの事柄がとりわけ要求されます。ひとつは、未知の文化現象への幅広い旺盛な好奇心であり、もうひとつは、多様な文化現象の中から自分が取り組みたい対象とテーマを主体的に探り当てていく積極性と自主性です。

本コースでは、教員スタッフがカバーしていない対象領域については、非常勤の先生を招くことで多彩なテーマに取り組めるよう配慮していますが、文化圏やテーマに関して本コースで研究が続けられるかどうか不安な人は、遠慮なくスタッフに相談してください。

〔授業〕 本コース独自の授業は、選択必修科目とされている科目群で提供され、2回生から4回生のあいだに履修します。その中で「表現文化論基礎演習」は、表現文化コースに進学した2回生のための少人数のゼミ形式の授業です。この科目では映画、マンガ、写真、小説といった様々なジャンルの作品について、共同で作品を分析し、自らの考察を文章にまとめます。文献の読み方や資料の扱い方、ディスカッションの仕方など、学問的なコミュニケーション・スキルの習得もこの科目の目的のひとつです。

本コースの五本の柱となっているのが、「文化理論」「表象文化論」「ポピュラー文化論」「比較表現論」「テクスト文化論」で、それぞれ講義科目として提供されています。

さらにこれら講義科目に対応する演習の授業として、「表象文化論演習」（隔年で「購読」）「ポピュラー文

化論演習」(同前)「比較表現論演習」「テキスト文化論演習」「文化理論演習」が用意されています。3、4回生に提供される「表現文化論特殊演習1」では、特定のテーマについて発表とディスカッションを行います。専門の異なる教員が共同で授業を行うコーティンングの方法を導入することにより、多様な視点から問題を把握、議論することを通して新たな答えを導き出す能力を養います。また、自由選択科目の「表現文化特論」「表象文化特論」では、演劇やアニメーションなど特定のテーマに関する講義を行います。

4回生では、各自の関心に基づいて「卒業論文」を書くことに集中することになります。

2 スタッフ

ますだ さとし
増田 聡 教授

音楽学、メディア論、大衆文化論。ポピュラー音楽を中心に、視聴覚メディアの発展と身近な音楽文化との関わりについて研究しています。学部の授業では音楽をはじめ大衆文化と社会の関連の具体相について多面から考えます。

えびね たけし
海老根 剛 教授

映画を中心とする表象文化論、ドイツ文化研究、人形浄瑠璃の観客史的研究。学部の授業では、主に映画やアニメーションなどの映像文化を主題として扱います。

えむら きみ
江村 公 教授

近・現代芸術論、ロシア文化研究。芸術作品とそれを取り巻く制度を歴史的・文化的背景を踏まえて研究しています。学部の授業では、主に造形芸術や写真を考察の対象としています。

エスカンド ジェシ
Escande Jessy 准教授

日本のファンタジー作品を主な対象に、小説・漫画・ゲーム・アニメといった多様なメディアを横断し、他文化起源のモチーフの受容と再創造を分析しています。学部の授業では、ゲームなどの表現メディアに現れるファンタジーについて扱います。

3 コース決定にあたっての心構え

芸術・文化現象に対して強い関心を持つとともに、理論的な問題意識が要求されます。つまり、さまざまな作品(文学・音楽・美術・映画…)やサブカルチャー的な現象にたくさんふれ、関心を持つことはもちろん必要ですが、単にそれを「おもしろい」と享受している段階にとどまっているのでは研究になりません。そのためには、理論的視点から対象に問いかける訓練が必要になります。

外国語の能力もきわめて重要です。英語はもちろんのこと、少なくとももう一つの言語に習熟することを念頭におき、1回生のうちに初修外国語の基礎を十分に習得してください。海外語学研修や留学生との交流も、視野を広げるチャンスです。

4 大学院

現代社会の幅広い文化現象を多面的な視点から対象化し分析することのできる、柔軟な思考力を持った意欲的な研究者の育成を目指しています。

5 卒業後の進出分野

さまざまな芸術分野・文化現象の考察・研究に取り組んだことを評価され、多種多様な分野へ進出しています。就職先は一般企業が多いですが、業種は、美術館、広告、映像制作、映画プロダクション、商社、金融、保険、製造、百貨店、旅行業、印刷、IT関連など幅広い分野に及んでいます。公務員になる人も毎年数名います。またさらに研究を深めるため、大学院に進学する人も少なくありません。

6 メッセージ

表現文化コースでは自分の「好きなこと」を研究できるように思えるかもしれません。確かに研究することはできませんが、「好きなこと」を研究することほど難しいことはありません。そのためには、自分を厳しく相対化する視点の獲得が不可欠だからです。表現文化コースでは、「文化」とその「表現」に関わる問題に、旺盛な好奇心と主体性をもって取り組む意欲のある学生を歓迎します。そのような人にとって、表現文化コースは、知的刺激に満ちた3年間を過ごせる場所となることでしょう。1回生の間に何度かガイダンスがありますが、コース選択に関して個別に相談したい場合には、いつでも教員にメールで連絡してください。

ウェブサイト:

<https://www.omu.ac.jp/lit/repre/>

アジア文化コース

1 本コースの研究内容、特色

アジア文化コースは、〈アジア〉の様々な文化現象や文化の歴史を比較文化研究や地域文化研究の立場から探求する総合的なコースです。アジアに対する深い共感と専門的な知識をはぐくみ、地域の特性に応じた文化の活用を考えます。

心豊かなくらしのために、アジアの多彩な文化を生活に取り入れる…、アジアの経験をもとに、人々の共生に資するような文化を構築する…など、コースの守備範囲は無限に広がっています。文化の身近な利用から経済的な活用まで、あるいは文化についての哲学的な思索から実践的な応用まで、〈アジア文化〉のさまざまな〈活用〉を考えてみましょう。

アジアは、伝統的に文化、言語、宗教などにおいて多様性に富んだ地域です。近年のグローバルな文化交流や人口移動によって、その生活様式も大きな変容を遂げつつあります。このような文化状況のなかで、日本を含めたアジア諸社会では、文化の対立を克服し、多様性を尊重して人々の共生を実現することが求められています。そのためには、アジアの現状を深く知り、課題と方策を考える必要があります。

アジアを考えると、日本とのかかわりも見逃すことはできません。古代から近現代に至るまで、日本はアジア諸国との文化的関係や交渉が密接でした。国家レベル、あるいは民間レベルで交流やまなざしはどのような変化があったのでしょうか。日本のアジア学はそれをどのようにとらえてきたのでしょうか。そのような変遷を探ってみることは現代日本社会を捉えることと表裏一体なのです。

アジア研究に対するアプローチは、近年多様化の一途を辿っています。問題意識にそって、どのような探究方法があるのか、長年の研究の蓄積と周辺領域の研究の基本的知識をみまわしながら、研究をすすめる必要があります。本コースでは、「地域」「共生」「比較」をキーワードとしながら、既存の枠にとらわれることなく、独創的な研究を目指します。

文学、思想史、歴史学等、主として文献資料や文学作品をもとに研究を進める専門領域の立場から、そして、文化人類学、社会学、民俗学等の、主としてフィールド調査をもとに研究を進める専門領域の立場から、アジア

文化の歴史と現状、構造と機能、アジア地域における文化の実践的活用例などについて検討していきます。歴史ある本学の学術情報総合センターには多くのアジア関係の歴史文献や文化情報、経済・法の資料が集積しています。皆さんの革新的な視点と既存の枠組みを超えた研究方法で活用し再構築されるのを待っています。

カリキュラム登録に際しては、いくつかの注意点があります。必修科目はすべて履修しなければなりません。選択必修科目は、アジア文化コースの科目を中心に、文化構想学科の他コース提供の選択必修科目を含めて、必要単位数をそろえてください。1回生の「文化構想学概論A・B」は文化構想学科の学問に対する基本的な考え方や各コースの学問の基本的な手法を学ぶことを目的としています。2回生では「文化構想学基礎演習A・B」に加えてアジア文化コースの選択必修科目を履修してください。アジアの文化や歴史についての学問的課題について考え、その基礎となる方法を学びます。3回生では専門知識を高め、演習授業で自らの関心と課題を明確にします。4回生では大学生活の集大成としての卒業論文の作成に向けて取り組みます。必修単位を履修することが第一ですが、その他のコースの授業も自分の興味や関心に応じて幅広く受講し、自分の専門性・学際性を高めて欲しいと思います。

大学での学習とは、講義や授業の場で教えられるものだけではありません。さまざまな経験と体験を積み、比較分析の視点を意識して友人と語り合い、感受性豊かに街を歩き、自主的に学ぼうとする心構えをもってください。世界のニュースや雑誌記事を幅広く入手し、現代文化の把握などにも積極的に取り組んで、皆さん独自のアジア認識を構築できるよう、つとめてみましょう。

2 スタッフ

多和田 裕司 教授

文化人類学を専門にしています。東南アジア、とくにマレーシアをフィールドとして、現代社会における文化や宗教のありかた、多文化共生社会の課題など、文化を応用的観点からとらえたいと思っています。

堀 まどか 教授

日本文化研究や日本語文学研究を国際的な観点からおこなう研究をしています。比較の視点をもって、日本をアジアのなかの地方として把握し、文芸文化の交渉の歴史や実態について研究したいと思っています。

宋 恵媛 教授

朝鮮半島に住む人々、そして日本を含む世界各地に散らばるコリアンディアスポラたちの文化を研究しています。声を奪われてきた周縁の人々の言葉、文学、歴史を新たに掘り起こすことを目指しています。

王 静 准教授

現代の中国茶、台湾茶を研究対象にしています。国家の政策や企業の経済活動、社会の観光化、愛好者らの実践などが「茶文化」にもたらす変容と創造の過程を、フィールドワークをもとに明らかにしようとしています。

3 コース決定にあたっての心構え

日本、中国、香港、台湾、朝鮮半島などを指す「東アジア」を中心に、「東南アジア」、「南アジア」「西アジア」も含めて、広い範囲のアジアを対象にできます。また、アジア地域は、英、仏、蘭、露、米などの大国や大言語とのあいだで、多彩な文化と歴史をつくりあげてきました。アジアをテーマに、一つの地域や国家、言語や階層にとらわれることなく、従来のジャンルを超越するような独創的な研究を切り拓くことが期待されています。

文化の多様性と共通性を考えることは、じつは容易なことではありません。文化が、各民族・各国民の思考様

式や生活様式から創出されるところの有形無形の産物、組織、機構、伝統の一切を包括する多様な概念だからです。それぞれの文化事象には、伝承、伝播、創造があり、その歴史をたどる必要があります。そして、その歴史が今の皆さんの立ち位置となり、未来につながっているのです。

4 大学院

2020年度から、アジア文化学専修として博士前期課程、博士後期課程が開設されました。本コースの大学院開設の前には「アジア都市文化学」の大学院がありました。諸先輩方は、大学の教員、博物館学芸員など、その能力と専門を活かして活躍しています。

5 卒業後の進出分野

「アジア文化コース」で身につけた、目的意識、問題意識を実社会に活かして、また読解力や文章力、考察力を発揮して幅広い分野で活躍することが期待されています。

6 メッセージ

アジアに関心がある皆さんを歓迎します。アジアの料理が好き、アジア映画をよく見る、アジアに旅行に行ったことがある・・・等々、アジアへの関心はどのようなものでも構いません。アジア文化コースの教員が、皆さんが抱いている個人的な思いを、アカデミズムの枠組みのなかであらためてとらえ直すことができるように支援します。

文化の活用といっても難しく考える必要はありません。私たちの身の回りを見渡しても、抹茶がアイスクリームやケーキに取り入れられたり、アジアの伝統工芸が素敵なインテリアとして活用されたり、あるいは、イスラームの「ハラール・フード」が新しいビジネス分野として注目されたりなど、文化活用の事例は数限りなく見ることができます。

日々「旅」をするような気持ちで、新しくなにかを発見する気持ちで、アジア文化コースで学ぶ時間を一緒に楽しみましょう。

文化資源コース

1 本コースの研究内容、特色

文化資源コースは、2019年度から始まった新しいコースです。本コースが設立された背景には、芸術や文化を産業構造の中に組み込んでいく必要が生じた、21世紀の日本を含めた世界の状況があります。

したがって本コースでは、書物や文献を用いた従来の文学部の学びから脱却し、実習を中心として、社会における文化の活用方法について学びます。ここで言う文化「資源」とは、単に過去の文化遺産を指すのではなく、美術、音楽、演劇、映画、ゲーム、そして観光と、人間の社会的な活動の中で「文化」として活用できるすべてのものを含みます。本コースでは、あらゆる文化的な所産を「文化資源」としてその「価値」を見出し、文化を社会の中で積極的に活用するための理論や実践について研究します。

このように、文化資源コースでは、歴史的な文化はもちろんで、現在進行形で生み出されていく最新の文化に至るまで、さらに絵画や建物・街並みといった「モノ」としての文化のみならず、演劇の上演や、イベント、観光ツアー、アートワークショップなどの「コト」としての文化にも着目します。

一般に、文化の活用というと、国宝や重要文化財、文化遺産の保存や継承といったイメージが先行しがちで、実際に他大学の類似の名称の学科やコースでは、そうした分野について学ぶところが多いですが、上に述べたように、本コースを支えているのは、より幅広い文化への関心です。

主要な専門科目においては、主にアート（芸術、特に美術・音楽など）に関連する文化資源のあり方をとらえること、そして、それらを利活用する手段としてのツーリズム（観光）について扱います。アートといっても、いわゆるファインアート（著名な芸術家の創作した絵画や彫刻、音楽）だけではなく、ガムの包み紙から、即興的にその場で紡ぎ出される音楽に至るまで、その活用の可能性を追求します。

2～3年次に入ると、講義科目と演習・実習科目が開講します。「文化資源基礎論」では、文化資源とは何か、その歴史的な展開と現在について、関連分野である美術史や歴史学、文化財科学等の知見を踏まえながら学びます。「観光文化論」では、具体的に文化資源が活用される現場としての観光のあり方について、食文化探求の旅やエコ

ツアー、アニメ聖地巡礼など、新たな文化体験のあり方を中心に学びます。「文化デザイン論」では、文化を生み出す場と文化を用いて個人や社会に影響を与える場をいかに創り出すことができるのかについて、音楽ワークショップの実践を中心に学びます。「視覚芸術文化論」では視覚芸術（美術）を様々なキーワード（産業や報道、政治、概念）から読み解き、「国際文化論」では、世界の芸術の歴史と特色について学びます。「文化資源特論A」では、隔年で開講される観光メディアと国際観光に関する事象をそれぞれ学びます。「文化資源特論B」では、映画プロデューサー、映画監督としての顔を持つ講師をお招きし、自ら立ち上げた映画祭や国際観光映像祭などのイベント実務の観点から、文化資源としての映像コンテンツについて学びます。「文化資源特論C」では、デジタルゲームを中心とするポピュラー文化産業を研究対象とする講師をお招きし、時代の最先端に位置する文化資源（マンガ、アニメ、デジタルゲーム）の社会的運用のあり方を学びます。「文化資源論特別演習」では、発表と討論を通じて、学問的に文化資源を捉えるためのトレーニングを行いません。

さらに文化資源コースの大きな特徴は、文化資源の力＝文化力を引き出すためのセンス（感性）とメチエ（技術）を体験的に養うことにあります。より具体的には、アートイベントの企画や観光メディアの制作、まちづくりや地域再生に関する現地フィールドワーク、音楽ワークショップの企画・参画、美術館などへのインターンシップ的な視察などの実践的な取り組みを行います。これらは前期に演習科目として、後期に実習科目として開講されますが、文化資源コースの皆さんは、前後期を通して履修することを基本としています。

「視覚文化資源論演習・実習」では、文化資源研究の視点と方法に関するトレーニングの後、それらを社会で活用するためのプロジェクトを実施します。「地域文化資源論演習・実習」では、観光学やまちづくりに関する文献の購読を行なった上で、ツアーや観光まちづくりのプランを企画し、学生コンクールに出展したり、地域づくりの現場に赴き、現地調査を行なった上で、地域への提言を行ったりします。「音楽文化資源論演習・実習」では、コミュニティアートの形態や手法を実践的に学んだ上で、アートプロジェクトを企画・実施したり、障がいのある人を

含む多様な人々との交流のなかで音楽を生み出すことを体験したりします。「国際文化資源論演習・実習」では、世界の芸術を対象とした研究手法を学んだのち、それらを社会で活用するためのプロジェクトを実施します。これらの科目は、参加学生のイニシアティブに基づいて行なわれるものがほとんどです。そのため、主体的に社会と関わり、その成果を得ようとする意欲を有することが前提となります。

4年次には、これまでの学びの集大成として、自らテーマを選定した上で、卒業論文の執筆を行ないます。

2 スタッフ

すがわら まゆみ 菅原 真弓 教授

日本美術史、特に近世・近代の美術史、文化資源学、博物館学を中心に研究を行なっています。大学の教員になる前は、学芸員として美術館に勤めていました。「視覚芸術文化論」「視覚文化資源論演習」などの科目を担当します。

あまの けいた 天野 景太 准教授

観光学、特に都市における観光、現代観光の様態、メディアと観光行動の関係などを、社会学・文化論的な視点から解読する研究を中心に行なっています。「観光文化論」「地域文化資源論演習」などの科目を担当します。

ぬまた りい 沼田 里衣 准教授

臨床音楽学、特に音楽療法や即興音楽の可能性について研究を行なっています。神戸を中心に「おとあそび工房」など、音楽を題材としたワークショップを企画・実践中です。「文化デザイン論」「音楽文化資源論演習」などの科目を担当します。

さかもと あつし 坂本 篤史 准教授

西洋美術史。また、併せて日本美術に与えた西洋美術の影響についても研究を進めています。大学の教員になる前は、学芸員として美術館に勤めていました。「文化資源基礎論」「国際文化論」などの科目を担当します。

3 コース決定にあたっての心構え

第一に、さまざまな文化・社会現象に対する好奇心を持って欲しいということです。文化資源を研究するためには、その対象である文化が創出されるプロセスについて深く関心を抱いてください。そのため、文学・歴史学・地理学・社会学・表現文化・アジア文化など文学部の他のコースの科目や、他学部の関連科目も積極的に履修するこ

とが望まれます。

第二に、受け身の姿勢ではなく、積極的にプロジェクト等に参画し、実社会において何かを成し遂げ、そして自らも成長を果たそうとすることへの意欲と行動力が求められます。

4 大学院

文化資源に関連する理論と実践について、さらに深く研究しようという人は、大学院への進学をおすすめします。修士論文・さらには博士論文の執筆を通じて、より理論的・体系的に文化資源学（あるいは関連する美術史学、観光学など）を追求できます。また、専修分野の性格上、留学生や実務経験の豊富な社会人の大学院生も多く在学しています。こうした文化資源に関する実務家を含む多様な人々との交流のなかでの鍛錬を、是非経験してください。

5 卒業後の進出分野

本コースの学びに直接的に関連する職種は、博物館・美術館の学芸員、イベンター・メディアプロデューサー・出版社や放送局といったメディア業界、旅行会社や鉄道・航空会社・通訳ガイドといった旅行業界などです。本コースは設立されてまだ日が浅いですが、こうした分野に進む卒業生が着実に現れています。

ただし、文化資源コースでの学びを通じて得られる力は、より幅広い分野で社会における実践力として活用することができます。文化に価値を見出す想像力、プロジェクトの企画や実施を通じて鍛えられるチームワーク力やプロデュース力は、どんな職種でも求められる力です。そのため、商社や金融、製造などの一般企業、国家・地方公務員から、教員、大学院進学に至るまで、幅広い進路への夢をサポートします。

6 メッセージ

第一に、文化資源コースが対象とする「文化」の幅は、非常に広いです。スタッフが過去に指導した卒業論文のテーマも、演劇や美術、音楽、観光に関連するテーマのみならず、お笑い文化、eスポーツ、プリキユア、環境教育、パッケージデザインに至るまで、多種多様です。自らが打ち込むと決めたテーマについて、真剣に「ガクモン」することへの意欲を持った皆さんを歓迎しています。

第二に、文化資源学という領域、および文化資源コースは、まだまだ未開拓のフロンティアです。そこに降り立ち、教員とともに切磋琢磨しながらパイオニアたろうとするチャレンジングな精神をもった皆さんが、本コースを選択されることを期待しています。

人文学学際研究センター

(Humanities-based Interdisciplinary Research Center: HIRC)

1 人文学学際研究センターの理念

大阪公立大学大学院文学研究科は、2025年4月1日、人文学学際研究センター（以下、HIRC）を開設しました。HIRCは、大阪公立大学森之宮キャンパスを拠点とし、人文学を主軸とした文理にわたる多彩な学問分野の融合を目指した学際的な研究を積極的に進めていきます。

HIRCは2003年に設立された文学研究科都市文化研究センター（以下、UCRC）を発展的に改組する形で開設するものです。HIRCは、これまでの人文学のディシプリンに立脚しながら、他の学問分野と積極的に交流することで、本来の意味での「学際的研究」を目指していきたくと考えています。そのためには、UCRCで培われた財産を継承し、学内における多彩な研究科や、国内外の諸研究機関との協働関係を積極的に築きつつ、人間とその社会、歴史、心理、教育、思想や文化、多様な言語や文学、コミュニケーション等に関して、学際性・国際性を意識しつつ、様々な切り口と方法でアプローチ学術研究を追求していきます。

HIRCは文学研究科内における研究・教育の支援や、関連する諸事業を牽引することを主たる目的としつつ、本学の他の多くの部局との連携の拠点組織となります。メンバーは文学研究科の専任教員、HIRC研究員、特別研究員（HIRC研究員との兼任も可）などによって構成され、若手研究者の研究活動に対する支援や、学際的研究、国際共同研究、地域連携等に取り組んでいきます。

なお、学術誌『人文学学際研究』の刊行や、教員と研究員との共同事業（シンポジウム、調査研究）、各種のデータベースやアーカイブ構築などの基盤的な活動のほか、新たな研究領域とのパートナーシップを追求すべく、HIRC研究員制度を維持し、高度な学術交流のプラットフォームとしての活動を続けていきます。

2 HIRC 設立の経緯

HIRCの前身であるUCRCは、大阪市立大学大学院文学研究科が申請した21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の採択（2002-07年）に伴い、研究・教育拠点の中核を担う場として2003年に設立されたものです。当時は、上海、北京、ハンブルク、ロンドン、バンコク、ジョグジャカルタにサブセンターを設置し、国際的な共同研究、教育、交流の拠点となりました。その取

り組みは、5年間のうちに160点以上の刊行物、事業推進担当者、協力者、研究員（若手）による数百にわたる論文として結実しました。比較都市文化史、ツーリズム研究、文化資源論、知識人研究などをテーマに、都市に関する歴史のアプローチと現代文化論的視座の融合を試み、大きな成果を挙げました。

2006年には、これまでの研究の蓄積を活かし、現代の様々な都市の諸問題に対して実践的に取り組む全学的組織、都市研究プラザが開設されました。同プラザのプロジェクトは2007年から始まったグローバルCOEプログラムに採択され、そのテーマ「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」は、UCRCの21世紀COEプログラムを受け継ぐものとなりました。また2007年度より文学研究科が進める教育プロジェクト「インターナショナルスクール」が、文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、UCRCの一部門として、若手研究者の国際発信力を向上させるための様々な支援事業を実施してきました。

文学研究科の森之宮キャンパス移転に伴い、UCRCを舞台に展開してきたこれまでの活発な教育研究活動を全学的な規模でさらに展開させることを目指し、UCRCを発展的に解消するかたちでHIRCが設立されました。

3 スタッフ

しんがえ あきとも
新ヶ江 章友 教授

専門は、クィア人類学・医療人類学。これまで日本をフィールドとしつつ、性的マイノリティとHIV/AIDS、性的マイノリティによる生殖補助医療の利用と出産・子育てについて研究を行ってきました。さらに現在、長崎における原爆の記憶についての研究を新たに進めています。

キム スンヨン
金 昇淵 特任助教

日本近現代文学・文化研究における国民国家と移動、言葉の問題を研究しています。言語横断的な執筆活動をおこなう多和田葉子の文学を中心に、「日本語文学」ひいては「世界文学」の射程を〈書く〉側面だけでなく、〈読む〉という記憶の共有から捉えたいと考えています。

*2026年度後期より准教授1名採用予定。

大学院案内

将来、研究職をめざす人、あるいは文学部で学んだ専門分野を活かした職種につくことを希望する人、それぞれのコースで専門の勉強に取り組むなかで研究を続けたいと思った人は、大阪公立大学大学院文学研究科に進学することを積極的に考えてみてください。

大学院には2年間の博士前期課程と、3年間の博士後期課程があり、多くの人たちが大学院に進んで勉強を続けています。

文学研究科には、哲学歴史学専攻、人間行動学専攻、言語文化学専攻、文化構想学専攻という4つの専攻があり、それぞれの以下のような専門分野（専修）に分かれています。

哲学歴史学専攻

哲学専修 / 日本史学専修 / 東洋史学専修 / 西洋史学専修

人間行動学専攻

社会学専修 / 心理学専修 / 教育学専修 / 地理学専修

言語文化学専攻

国語国文学専修 / 中国語中国文学専修 / 英語英米文学専修

ドイツ語圏言語文化学専修 / フランス語圏言語文化学専修 / 言語応用学専修

文化構想学専攻

表現文化学専修 / アジア文化学専修 / 文化資源学専修

大学院文学研究科で学び、さまざまな研究職や専門的な職種、あるいは官公庁や一般企業に就職し活躍している人はたくさんいます。かつては、大学院へ進学する人は多くはありませんでしたが、現在はそうではありません。研究職をめざすかどうかは、博士後期課程へ進学するかどうか岐路になっており、博士前期課程の2年間の専門的な研究を経て就職する人も増えています。誰もが大学を卒業する時代になり、大学院修了者は、研究という創造的な営みの訓練を積んだ人として期待される場合も少なくありません。

2回生になり、各コースで専門科目の履修が始まると、大学院生と接する機会も増え、専門分野に関わるだけでなく、さまざまなアドバイスを受けることもあります。大学院があり、大学院生という先輩がいることが、文学部で学ぶみなさんにも大きな意味をもちます。大学という研究機関は、教員、大学院生、そして学部生という、同じ専門分野に関心をもつ者が集まり、研究活動をおこなう共同体であると言うこともできます。互いに刺激を受けながら、それぞれが研究を進めることが大きな活力となり、また個々人の学修・研究の発展にもなります。

文学部で4年間学ぶなかで、みなさんは卒業後の進路について考えることになりますが、大学院で勉強を続けることもひとつの選択肢として視野に入れてほしいと思います。大阪公立大学大学院文学研究科では、みなさんの中から、大学院へ進学し、より専門的な研究活動の仲間に加わろうという積極的な人が現れることを大いに期待しています。

履修要項

1. 学科の名称、卒業時の学位、入学定員

学科	学位	定員
哲学歴史学科	学士（文学） (Bachelor of Arts)	32
人間行動学科		56
言語文化学科		43
文化構想学科		29

2. 学年・学期・授業期間等

学 年：4月1日～翌年3月31日

学 期：前期：4月1日～9月23日

後期：9月24日～翌年3月31日

休業日：

- ① 日曜日および土曜日（授業調整日除く）
- ② 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日（祝日授業日を除く）
- ③ 春季休業3月20日から4月7日まで
- ④ 夏季休業8月10日から9月23日まで
- ⑤ 冬季休業12月24日から1月7日まで
- ⑥ その他学長が必要と認めた日

詳しい授業期間および試験期間等は、各年度当初に定められる「学事日程」によります。「学事日程」は、毎年度、本学 Web サイト ([ホーム>教育・学生生活>授業・履修>学事日程・授業関係](#)) などで確認してください。

ただし、集中講義または担当教員が必要と認めたときは、その他の期間に授業や試験が行われることがあります。

3. 授業時間

時限	時間
1 時限	9:00-10:30
2 時限	10:45-12:15
3 時限	13:15-14:45
4 時限	15:00-16:30
5 時限	16:45-18:15

4. 授業科目の種類

授業科目は、基幹教育科目、専門科目、資格科目および副専攻科目に区分されています。基幹教育科目は主に1年次・2年次において学びます。

全学部・学域に共通した基幹教育科目は総合教養科目、ゼミナール科目、情報科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目、基礎教育科目に分かれます。

○科目区分および開設部局（特例科目を除く）

科目区分		開設部局	
基幹教育科目	総合教養科目		国際基幹教育機構
	ゼミナール科目	プロジェクト	
		高年次ゼミナール	
		初年次ゼミナール	
	情報科目		
	外国語科目	英語	
		初修外国語	
健康・スポーツ科学科目			
基礎教育科目			
専門科目		各学部・学域	
資格科目	教職科目※	国際基幹教育機構	
副専攻科目		各学部・学域 国際基幹教育機構	

- (1) 文学部の専門科目の科目名、単位数、配当年次および必修・選択・自由の区分は、「23. 文学部専門科目表」を参照してください。
- (2) 基幹教育科目の履修については、「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」等を参照してください。
- (3) ※の教職科目について、文学部の専門科目に含まれるものがあります。
- (4) 資格科目の履修については「教職課程の手引」、副専攻科目の履修については、「副専攻ガイド」等を参照してください。

5. 授業科目の単位、単位制

大学における授業科目の単位においては、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準としています。単位の計算方法は、授業の方法（講義・演習・実験・実習・実技）に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮しておおむね15時間から45時間までの範囲で本学が定める時間の授業をもって1単位として単位数を計算します。また、卒業論文、卒業研究等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与する事が適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して単位数を算定します。

(例) 講義・演習、実験・実習・実技の場合

学修時間数	単位数
授業時間 30 時間 (毎週 2 時間 15 週) 事前事後学修 60 時間 (毎週 4 時間 15 週)	2 単位
授業時間 30 時間 (毎週 2 時間 15 週) 事前事後学修 15 時間 (毎週 1 時間 15 週)	1 単位

※大学において1単位の修得には「45時間」の学修が必要であり、その際の「1時間」は実際の45分に相当します。すなわち、「2時間」は90分授業(1時限)に相当します。

上記の表のとおり、2単位の修得には、毎週「2時間」の講義の前後に事前学修(予習)と事後学修(復習)を「4時間」(例:事前学修「2時間」+事後学修「2時間」)することが前提となっています。この前提に基づいて、授業では多くの課題(宿題)が課せられることがあります。大学では、常に事前・事後学修を行いながら授業を受けることが履修の基本であることを忘れないでください。

6. 文学部概要

卒業に必要な条件、専門的に学ぶための学科・コースへの分属、4年間の学修の流れなど、概要を示します。

(1) 文学部を卒業するための単位数

文学部の学生は、以下の単位を修得する必要があります。

基幹教育科目					文学部専門科目		
総合教養 科目	ゼミナール 科目	情報 科目	外国語 科目	健康・スポーツ 科学科目	必修科目	選択必修 科目	自由選択 科目
10 単位	1 単位	2 単位	24 単位	2 単位	22 単位	30 単位	40 単位
39 単位以上					92 単位以上		
131 単位以上							

基幹教育科目の履修、専門科目の履修については、「7. 履修課程と履修上の注意」の「(2) 基幹教育科目」「(3) 専門科目」を参照すること。

(2) 学科・コース選択

文学部には哲学歴史学科・人間行動学科・言語文化学科・文化構想学科の4つの学科があり、学科の履修上の区分として以下の15のコースを置いています。

学生はいずれかのコースに所属し、コースごとに定められたカリキュラムにより専門科目を履修します。

① 各コースの標準所属者数

4つの学科ではそれぞれ下のような学生定員を定め、これにしたがって、各コースの標準所属者数を定めています。

学科・コースの分属は第1年次終了時に決定し、第2年次からコース所属となります。

コース	哲学	日本史	世界史	社会学	心理学	教育学	地理学	国語 国文学	中国語 中国文学	英米 言語文化	ドイツ語圏 言語文化	フランス語圏 言語文化	表現 文化	アジア 文化	文化 資源
学科別 学生定員	32			56				43					29		
標準 所属者数	8	10	14	16	16	12	12	13	4	14	6	6	10	9	10

② 所属コースの決定

文学部で専門的に学びたい分野を第1年次の間によく考え、ガイダンスを通して希望コースの内容を確認し、最終的なコースを選択してください。所属コース決定までのスケジュールは次のとおりです。

[1] 学科・コース決定のためのガイダンス

第1年次の6月上旬と9月頃に学科・コース決定ガイダンスを開催します。開催日時は事前に掲示するので必ず出席してください。ガイダンスでは、コース決定の手続きや各コースの概要について説明し、希望コースのアンケート調査を行います。なお、コースの選択にあたっては、本要覧もよく読んでください。

[2] 「学科・コース希望届」の提出

第1年次の12月1日から12月10日まで（曜日の関係で変更することがある）の期間に、「学科・コース希望届」を提出してください。

[3] 選 抜

第1希望の学生が集中し、全員を受け入れることができない学科・コースについては、やむをえない措置として選抜を行います。選抜にもれた学生は、第2希望以下のコースの所属となります。

選抜の基準は第1年次前期成績にて、選抜順位は下記の方法により決定します。（成績の評語・GPA制度については、「11. 成績評語とGPA制度・CAP制」を参照してください。）

- (1) 1年次前期成績の「GPA」により判定を行う。
- (2) (1) が同数の場合は、修得した全科目のAAとAの単位数合計で判定を行う。なお、AAは1.5倍で換算する。「認定」科目については、「A」で換算する。
- (3) (2) が同数の場合は、必修「外国語」4科目のAAとAの単位数合計で判定を行う。なお、AAは1.5倍で換算する。
認定科目は対象外とし、実際に前期に履修した外国語科目の平均点を4科目に換算する。
- (4) 定められた提出期限に「学科・コース希望届」を提出しなかった者については、選抜の際に最下位として取り扱い、提出期間内に提出した者のコー

ス分属作業後に、直近で提出したアンケート調査への回答内容によって分属作業を行うこととする。

[4] 所属コースの決定と通知

コースへの分属は、1月の教授会の審議を経て決定し、掲示します。

③ 第1年次において休学した者の取り扱い

第1年次において休学した者については、休学期間を除いた在学期間が6ヶ月を超えた日以後の直近の12月に、上記[2]のとおり提出し、所属コース決定の手続きを行うものとします(所属コース決定手続き期間中に休学中である者は、決定手続きをとることはできません。また、入学年度に選抜が行われたコースには入ることはできません)。なお、所属コースの決まっていない学生は、第1年次として扱われます。

④ コースの変更

第2年次以降に学科・コースを変更したい者は、「学科・コース変更願」を12月1日から12月10日まで(同日が大学の休業日にあたる場合はその前日)の期間に提出しなければなりません(提出前には教員との面談が必要です)。

転コースができるかどうかは、希望するコースの在籍者数等によります。コース分属は入学年度ごとに行うことになっており、第1年次の分属の際に選抜が行われた場合を含め、すでに受け入れ限度数の上限までを受け入れているコースに転コースすることはできません。

第3年次中に学科を変更する転コースが決定した場合は、次の年度は、第3年次として扱います。またコースを変更した場合においても、在学年限は変わりません。

(3) 第3年次への進級

第3年次に進級するためには、第2年次末時点で2年以上在学し、以下の単位を修得していなければなりません。

また次年次への進級にあたっては、在籍年次に12ヵ月以上(休学期間を除く)在学する必要があります。

外国語科目 (2ヶ国語)	総合教養科目 + 所属する学科の必修科目
20 単位	14 単位

※発展的な外国語科目(英語のMedia English等、初修外国語の「特修」科目)も「外国語20単位」に含めることができます(ただし2ヶ国語まで)。

進級条件を満たした学生は、3月の教授会で審議のうえ、学部長の承認により、4月から第3年次に進級するものとします。なお、休学中であっても、在学年数および修得

単位の進級条件を満たしている場合は4月に進級します。

この進級条件を満たしていなければ4月以降も第2年次での在籍となり、配当年次が第3年次以上となっている科目は履修できません。

以上のように、第2年次までの間に一定の単位数を修得していなければ留年となり、4年間で卒業できなくなるので、十分に注意してください。

なお、留年者のうち第2年次の前期終了時に進級条件を満たした者については、教授会の審議を経て、後期から配当年次が第3年次の科目の履修を認められることがあります。希望する者は、前期定期試験期間終了日までに願い出てください。

※第3年次への進級は4月となるため、後期は第2年次の在籍となります。

7. 履修課程と履修上の注意

(1) 必修、選択および自由科目の区分

科目は必修、選択、自由科目の種類に区別され、各学部・学科等の定める要件を満たして履修する必要があります。

- ・ 「必修科目」…当該学科等の教育目的を達成するため、卒業要件として修得を必須とする科目。
- ・ 「選択科目」…学生の履修目的に応じて選択し、修得単位を卒業要件に算入する科目（選択必修科目・自由選択科目を含む）。
- ・ 「自由科目」…履修できるが卒業要件に算入しない科目。

(2) 基幹教育科目

基幹教育科目は、総合教養科目、ゼミナール科目、情報科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目、基礎教育科目に分かれています。科目名や単位数、必修・選択・自由の区分、配当年次等については、「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」に記載されています。

文学部の学生は、以下の単位を修得する必要があります。

基幹教育科目				
総合教養科目	ゼミナール 教育科目	情報科目	外国語科目	健康・スポーツ 科学科目
10 単位	1 単位	2 単位	24 単位	2 単位
39 単位以上				

① 総合教養科目

総合教養科目は、思考力、表現力、判断力の基盤の上に、幅広い知識を総合的に活用できる能力を身に付けることを目的としています。なお、文学部の学生は、以下の科目を含めて単位修得することを推奨します。

- 1) 基礎科目「自然科学」科目群より1科目以上
- 2) 主題科目「自然と情報」科目群より1科目以上

② ゼミナール科目

ゼミナール科目には、「プロジェクト」、「高年次ゼミナール」及び「初年次ゼミナール」があります。プロジェクト科目は、知識を受け身で学ぶだけでなく、学生が能動的に課題に関わりながら学ぶことを重視しており、多様なプロジェクトや課題に取り組む中で、学んだ知識を活用しつつ仲間と協働し、自ら考え行動する姿勢を養います。これらの取り組みを通じて、社会に出て活躍するための基礎的な力やキャリア意識を培うことを目的としています。

高年次ゼミナールは、3年生以上を対象とし、講義に加え、異なる学部・学域に所属する履修生同士のディスカッションやプロジェクトの実施・発表を通して、他者の「問い」の視点も参考にしながら自身の専門性に立脚した「問う力」を高めるとともに、社会の諸課題の解決に必要な基礎的な知識・技能・態度を身につけることを目的としています。

初年次ゼミナールは、高等教育での主体的な学びを大学入学直後に身に付けることを目的としています。グループディスカッションを通じた課題発表等の自発的学修、プレゼンテーションやレポートによる自己表現の経験、異なる視点との出会いによる自己の振り返り、他の専門分野の複数の学生と教員とによる多様な視点の交換を行うことで、能動的な学びの姿勢を身に付けることを目的としています。文学部の学生は、ゼミナール科目のうち、「初年次ゼミナール（1単位）」を修得する必要があります。

③ 情報科目

情報科目は、情報機器を利活用する際に必要となる情報処理の基礎的な知識と技能に加え、インターネットによるコミュニケーション手法や情報化社会に参画するための情報倫理、情報機器によるプレゼンテーション等のスキルを身に付けることを目的としています。文学部の学生は、情報科目のうち、「情報リテラシー（2単位）」・「データエンジニアリング・AI基礎（2単位）」から、1科目（2単位）以上を修得する必要があります。

④ 外国語科目

外国語科目には、「英語科目」と、「初修外国語科目」（朝鮮語・中国語・ロシア語・ドイツ語・フランス語）があります。詳しくは、「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」および「初修外国語履修ガイド」を参照してください。

文学部の学生は、外国語を24単位（英語12単位、初修外国語12単位）修得する必要があります。

[1] 英語

University English 1A・1B・2A・2B・3A・3B（各2単位）の6科目（12単位）を修得すること。

第1年次前期 University English 1 A・1 B

後期 University English 2 A・2 B

第2年次※ University English 3 A

※ University English 3 B

※3 A・3 Bの開講期（前期・後期）については当該年度の指定クラスの時間割を確認すること。

[2] 初修外国語（文学部は週3回コース）

基礎1（4単位）・基礎2（4単位）・応用1（2単位）・応用2（2単位）の4科目（12単位）を修得すること。なお、基礎1・基礎2は、それぞれ週2回授業があります（ペア科目）。

第1年次前期 基礎1（ペア・週2）・応用1

後期 基礎2（ペア・週2）・応用2

初修外国語については、卒業に必要な12単位分を第1年次に全て履修します。

初修外国語は、前期に基礎1の単位を修得していなければ、後期に基礎2を履修することはできません。同様に、前期に応用1の単位を修得していなければ、後期に応用2を履修することはできません。この場合、第1年次後期に担当されている科目の履修が第2年次後期以降にずれ込むこととなります。そのため、第1年次前期科目（基礎1・応用1）を必ず修得するよう、くれぐれも注意してください。

[3] 外国人留学生の外国語科目の履修と特例（外国人留学生のみ）

自分の第1言語（母語）を初修外国語科目として履修することはできません。日本語を第1言語（母語）としない学生は、特例科目（外国人留学生および日本語を母語としない学生を対象にした日本語科目）を履修し単位を修得した場合、初修外国語の単位として認定されます。詳しくは、「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」および「初修外国語履修ガイド」を参照してください。

[4] 外国語の単位認定

TOEFL・TOEIC・英検において所定の成績または資格を取得した場合、また大学が指定する海外の語学研修を修了した場合は、必修の外国語科目の単位または発展的な外国語科目の単位として認定することができます。詳細については「14. 単位認定(2)」をよく読んで確認してください。

⑤ 健康・スポーツ科学科目

生涯にわたり心身の健康を維持し、より健康的な状態を得るために必要な知識や方法について、主としてスポーツを中心とした行動を通じて具体的、学術的に修得するとともに、健康科学やスポーツ文化が果たすべき役割について、理論と実践を通し理解を深めることを目的としています。

文学部の学生は、健康・スポーツ科学科目のうち、「健康・スポーツ科学概論（2単位）」・「健康・スポーツ科学演習（2単位）」から、1科目（2単位）以上を修得する必要があります。

⑥ 基礎教育科目

それぞれの学問領域の基礎教育の中で、基幹教育として提供することが相応しい自然科学系科目を基礎教育科目として提供しています。

そのうち、「基礎数学A」「基礎数学B」「近代物理学」「入門化学」「生物学A」「生物学B」「地球学入門」「プログラミング入門B」は文学部専門科目の自由選択科目として卒業単位に含むことができます。これらの基礎教育科目の履修を希望する場合は、必ず履修登録期間中に文学部教務担当窓口で履修手続きを行ってください。なお、それ以外の基礎教育科目は、履修することができません（配当年次は「22. 基幹教育科目 標準履修課程表」参照）。

（3）専門科目

専門科目においては、各学部・学科、学域・学類の専門科目に加えて、学部・学域によっては共通科目を置き、それぞれの学問分野で共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の修得を目指します。

文学部の専門科目は、必修科目・選択必修科目・自由選択科目に区分されます。また、履修はできるものの卒業要件に算入しない科目は「自由科目」に区分されます。専門科目の科目名、単位数、配当年次は、「23. 文学部専門科目表」を参照してください。

文学部の学生は、以下の単位を修得する必要があります。履修にあたっては、この履修要項の他、各コースのガイダンスによる指導に従ってください。

文学部専門科目		
必修科目	選択必修科目	自由選択科目
22 単位	30 単位	40 単位
92 単位以上		

配当年次は、各コースにおいて専門教育を積み上げていくために、科目の内容に応じて履修することが望ましいとされた年次であり、これにしたがって履修し、卒業論文作成に向け専門性を高めていくことが重要です。なお、配当年次に満たない年次の学生は、その科目を履修することはできませんが、配当年次を越える年次の学生は履修が可能です。

① 必修科目

所属する学科で指定されている以下の科目を、必ず修得する必要があります。

哲学歴史学科	: 「人間文化概論A・B」「人間文化基礎論1・2」
人間行動学科	: 「人間行動学概論A・B」「人間行動学データ解析法1・2」
言語文化学科	: 「言語文化概論A・B」「言語文化基礎論A・B」
文化構想学科	: 「文化構想学概論A・B」「文化構想学基礎演習A・B」

これらは、第1年次または第2年次を配当年次としており、それぞれのコースに進むにあたって専門科目の中で基礎となるものです。第2年次に自分が進みたいコースを念頭に、第1年次に履修可能な科目は必ず履修するようにしてください。コース選択を迷っている場合、また候補と考えるコースの学科が異なる場合は、両方を履修しておくことが望まれます。履修した科目が、第2年次に配属された学科の必修科目でなかった場合は、自由選択科目として卒業に必要な単位数に含めることができます。

なお、必修科目である卒業論文および研究演習科目については、別に説明します。

② 選択必修科目

各コースのカリキュラムの根幹となる科目です。コース提供の選択必修科目のほか、自学科他コースの選択必修科目の中からも選択することができますが(※)、所属コースの選択必修科目を全て履修することが望まれます。科目の選択にあたっては、当該コースのガイダンスに従ってください。

※ドイツ語圏言語文化コース・フランス語圏言語文化コース・アジア文化コース所属の学生は、別に定めがありますので注意してください(「23. 文学部専門科目表」参照)。

③ 自由選択科目

以下に列挙する科目を履修することができます。

- ①所属コースの「23. 文学部専門科目表」に掲げた自由選択科目
- ②規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目
- ③自学科他コース提供自由選択科目
- ④他学科の専門科目(他学科の必修科目・選択必修科目・自由選択科目全て)
- ⑤「23. 文学部専門科目表」の学部共通専門教育科目

※一部の教職科目や博物館科目は卒業単位として自由選択科目に含まれます。

詳細は、「23. 文学部専門科目表(共通)」を参照のこと。

⑥他学部・他学域提供専門科目

※提供学部が他学部生も履修可としているもの。ただし、合計8単位以内に限る。

⑦基礎教育科目のうち「基礎数学A」「基礎数学B」「近代物理学」「入門化学」「生物学A」「生物学B」「地球学入門」「プログラミング入門B」※⑧と合わせて8単位以内に限る。

⑧基幹教育の外国語科目のうち「Media English」「Writing A・B」「Reading」「Literature」「ESD A・B」「Communicative Grammar」「各初修外国語の特修A～H」「各初修外国語の海外語学研修A・B」※⑦と合わせて8単位以内に限る。

(4) 資格科目

文学部で取得可能な資格免許は、教育職員免許状および博物館学芸員となる資格です。資格取得を希望する者は、文学部を卒業するための科目履修とは別に、定められた科目を履修し、必要単位を修得する必要があります。

教育職員免許状取得を目指す者は「25. 教職課程の履修方法」を、博物館学芸員となる資格の取得を目指す者は「26. 博物館学芸員課程の履修方法」をよく読んでください。

所属コースによっては、社会調査士・認定心理士の資格を取得することができます。

なお、資格取得のための科目は卒業単位に含まれる科目と含まれない科目があります。詳細は「23. 文学部専門科目表」を参照してください。

(5) 副専攻科目

副専攻とは、全学的な協力体制の下で、複数の専門分野にまたがる横断的な科目の配置を行い、目指すべき進路や興味関心に応じて全学の学生が自由に選択・履修できる教育課程のことを指します。

本学で開設されている副専攻および「副専攻科目」(※)の履修については、「副専攻ガイド」等を参照してください。

※副専攻のために特別に開設した科目を「副専攻科目」と呼びます。「副専攻科目」は文学部の進級要件および卒業要件に含まれません。

(6) 卒業論文と前期終了時卒業

① 研究演習科目

必修科目である各学科提供の「研究演習1」「研究演習2」は、卒業論文作成のためコース教員から指導を受ける科目であり、とくに時間割は定めていません(通年集中)。卒業論文は、「研究演習1」(前期)・「研究演習2」(後期)を履修し、1年を通じて作成するものとします(※)。

「研究演習1」「研究演習2」を受けずに提出された卒業論文は認められません。また、「研究演習2」は、「研究演習1」の単位を修得しなければ履修することができません。

※「研究演習1」を修得後に「研究演習2」を異なる年度に修得する場合は、卒業しようとする年度の前期に「卒業論文」、後期に「研究演習2」の履修登録を行う必要があります。その際、Webシステムが利用できない環境にいる等やむをえない理由で履修登録できない場合は、必ず事前に文学部教務担当へ申し出ること。

(ただし、前期休学者の「卒業論文」履修登録については、後期の履修登録時に文学部教務担当窓口で手続きを行うこと)

② 卒業論文・研究演習の履修登録

「卒業論文」および「研究演習1」は、卒業論文を提出する年度の前期に、「研究演習2」は後期の履修登録期間中に登録してください。

③ 提出期限および提出先

卒業論文は、文学部教務担当および学科・コースの教員が指示する条件と形式にしたがい作成してください。

卒業論文の提出期限は、卒業しようとする年度の指定日（1月）の指定時刻まで、提出先は文学部教務担当です。ただし、提出期限・提出先等については、当該年度ごとに指定します。年度により変更となる場合がありますので、掲示に注意してください。提出期日を過ぎた場合は、原則として受理しません。

④ 卒業論文・研究演習の成績評価

「卒業論文」は、提出された卒業論文とその内容に関する面接試験の結果により、成績評価されます。2月に実施する面接試験の日時は、各コースから通知します。

もし、「卒業論文」および「研究演習1」「研究演習2」を除く、卒業に必要な所定の単位を修得できなかった場合は、「卒業論文」の単位認定はしません。

「研究演習2」の単位認定は、「卒業論文」の単位が認定されたことをもって行います。したがって、「卒業論文」が不合格になった場合は、「研究演習2」の単位も認定されません。

「卒業論文」および「研究演習1」「研究演習2」の成績は、100点満点法により60点以上を合格とします。

⑤ 卒業論文の仮認定と前期終了時卒業

3月の卒業判定会議において、卒業要件に不足する科目・単位が、2科目かつ4単位以内である場合に限り、「卒業論文」および「研究演習2」の単位を仮認定します。

当該学生が、次年度前期に卒業に必要な単位を修得し、かつ本人が前期終了時に卒業すること（いわゆる9月卒業）を希望する場合にのみ、9月の時点で仮認定を正式認定とします。この条件を満たさない場合は、仮認定は取り消され再度、「卒業論文」および「研究演習2」の修得が必要となります。

よって、前期終了時卒業は、「卒業論文」および「研究演習2」が仮認定された者のみが可能です。

前期終了時卒業の願出に際しては、前期に学生ポータル（UNIPA）に掲示するので指定期日までに文学部教務担当に提出してください。なお、集中講義や単位互換科目等を履修する場合、開講日により9月卒業判定の際の単位に含むことができない場合があるので、履修登録時に文学部教務担当窓口にご相談してください。

（7）遠隔授業

一部授業は、授業支援システム（Moodle）等によりオンラインで行うことがあります。

（8）集中講義

週1回の授業ではなく、短期間または不定期に行う授業があります。集中講義の開講

日については学生ポータル（UNIPA）に事前に周知します。集中講義の履修登録については、それぞれ前期・後期の履修登録期間中に登録してください。履修登録期間の時点で希望する集中講義の開講日が未定の場合でも、履修希望者は必ず登録してください。

（9）履修に関する相談

① オフィスアワー

各授業担当教員は、オフィスアワーを設定しています。これは、指定された曜日・時間には、事前に予約なしでも学生が授業担当教員へ訪問し、履修に関することや授業中の疑問などを解決するための相談ができる時間のことです（オフィスアワーについては、シラバスを参照してください）。

② その他相談窓口について

履修にあたっては、授業科目の内容説明（「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」やシラバス）を参考にし、履修要項を十分に参照するとともに、履修や進路に関し相談等がある場合は、文学部教務担当または担当教員等に相談してください。

（10）他学部・学域履修

他学部・学域で開講されている科目を履修することができる場合があります。文学部では、提供学部が他学部生も履修可としているものであれば、合計8単位まで卒業要件に含めることができます。文学部では以下の条件を満たした場合、他学部・学域科目の履修を認めています。履修を希望する場合は、履修登録期間中に文学部教務担当に申し出てください。

3年次以上であること、かつ履修したい他学部・学域科目の前後の時間に履修すべき専門科目の履修を妨げないこと。※教職・副専攻のために履修する場合はこの限りではない（1・2年次も履修可）。

また、履修できる科目については大学 Web サイト（[ホーム](#) > [教育・学生生活](#) > [授業・履修](#) > [要覧](#)）に掲載されている「他学部・他学域学生が履修可能な科目一覧」を確認したうえで、履修登録の方法は「履修登録の手引（学部・学域生用）」を参照してください。

（11）科目名称

科目名称の末尾に数字あるいは英字等の表現がある場合は、以下のルールに基づいています。履修の参考にしてください。

・「〇〇論 1、2～」

科目内容に順序性がある科目群について使用しています。ただし、必ずしも1の履修が2の履修の前提条件になっているとは限りません。

・「〇〇論 A、B～」

科目内容に順序性がない科目群について使用しています。

(12) キャンパスをまたぐ授業の履修

原則として、各学部・学域の主な学びのキャンパスで開講される科目を履修してください。ただし、再履修科目、資格科目、副専攻科目、他学部・学域（他学科・学類）科目、その他各学部・学域において必要と認められる科目については、主な学びのキャンパス以外のキャンパスでの履修が許可されることがあります。なお、個人的都合による理由で主な学びのキャンパス以外の科目を履修することはできません。文学部生の主な学びのキャンパスは、森之宮キャンパスです。

8. 科目ナンバリング

科目ナンバリングは、教育課程の体系性を示すために、科目に記号と番号を組みあわせて付与することによって、科目の学問分野、カリキュラム内での位置づけを示す仕組みです。本学では、科目の属性に応じて、アルファベットと数字を組み合わせた13桁で構成された番号を、下記のとおり①開設部局・②学問分野・③科目レベル・④科目区分・⑤連番・⑥使用言語・⑦授業形態として各科目に付番しています。詳細は本学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>シラバス・履修案内\)](#) をご覧ください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	A	A	A	A	A	0	0	0	0	0	-	J1
└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘	└──┬──┘
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦						

9. 履修登録

(1) 履修登録

① 学生ポータル (UNIPA) による履修登録

科目を履修するにあたっては、学期毎に指定する期日まで（4月上旬・9月中旬）に、学生ポータル (UNIPA) より履修登録をする必要があります。

履修を考えている科目は全て履修登録期間に登録してください。

② 登録上の諸注意

- ・ 「22. 基幹教育科目・標準履修課程表」「23. 文学部専門科目表」にある配当年次などによく注意して登録してください。
- ・ 配当年次に満たない年次の学生は、その科目を履修することはできませんが、配当年次を越える年次の学生は履修が可能です。ただし、所属する学科・学類によっては、履修年次を指定している場合があるので、注意してください。
- ・ 同一曜日に複数キャンパスで授業を履修する場合、キャンパス間移動の時間が確保できないと判断される場合は履修エラーとなりますので注意してください。
- ・ 不合格となった科目の再履修は原則として次年度以降となりますが、一部の前期開講科目については、同一年度の後期に再履修できる場合があります。再履修および未履修科目の詳細な履修登録方法については、森之宮学務室教務担当

からの学生ポータル（UNIPA）の周知を確認してください。

- ・ 同一曜日時限に、2科目以上を重複して履修登録することはできません。
- ・ 既に単位を修得した科目を再び履修することはできません。
- ・ 履修登録できる単位数には上限が設定される場合があります。詳しくは「11. 成績評語と GPA 制度・CAP 制」の項目を確認してください。
- ・ 卒業・進級予定者が集中講義・単位互換科目等を履修する場合、開講日により進級・卒業判定の際の単位に含むことができない場合があるので、履修登録時に文学部教務担当窓口にご相談してください。

③ 履修登録の確認

履修登録の締め切り後の履修登録確認日・抽選結果発表日に、学生ポータル（UNIPA）の「抽選希望登録対象一覧」画面および「学生時間割表」画面上にて抽選科目の抽選結果および履修登録内容の確認が可能になります。発表後すみやかに登録内容を点検し、希望どおり正しく登録されているか確認してください。特に、エラーが出ている科目については、履修登録修正期間内に修正してください。

※履修登録について詳しくは、毎年度公開される「履修登録の手引（学部・学域生用）」を参照してください。

（2）シラバス

シラバスには、各学部・学域のカリキュラムにおける科目の位置付けや授業の方法、授業概要、到達目標、授業計画、成績評価の方法等が記載されています。履修登録にあたっては、授業時間割やシラバス等を確認し、自身の学習計画を立ててください。

10. 成績評価・試験

（1）成績評価方法・単位の修得

履修科目の成績は、シラバスで授業科目ごとに示されている方法で各授業担当教員によって評価され、合格した科目に単位が与えられます。成績の評語については「11. 成績評語と GPA 制度・CAP 制」で記載します。定められた期間を除き、成績は学生ポータル（UNIPA）で確認することができます。

（2）定期試験

定期試験を行う場合は原則として、授業期間終了後の試験期間中に実施します。試験の時間割は学生ポータル（UNIPA）を確認してください。

試験を実施せず、レポート提出等により成績評価が行われることもあります。詳細は、シラバス・学生ポータル（UNIPA）を確認してください。

（3）追試験・再試験

試験を欠席した理由が以下の項目に該当する場合には、科目の開設部局（各学部・学域または国際基幹教育機構）によっては追試験を行うことがあります。

- ① 学生が病気または負傷した場合
- ② 学生の親族が死亡した場合（2親等以内の親族または同居の親族に限る。）

- ③ 公共交通機関の遅延による場合
- ④ 学生が国家試験等を受験する場合
- ⑤ 学生が裁判員裁判へ参加する場合
- ⑥ その他やむを得ないものと認められた場合

追試験の受験を希望する者は、所定の期間内に信憑書類を添えて科目の開設部局に願ひ出る必要があります。追試験の実施有無や受験方法等については科目の開設部局に問い合わせてください。

また、定期試験で不合格になった科目の再試験は一切実施しません。

11. 成績評語と GPA 制度・CAP 制

(1) 成績評語と GPA 制度

履修科目の成績は、定められた基準にもとづき評価され、発表は評語により行います。各評語の評価基準などは大学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>シラバス・履修案内\)](#) を確認してください。

履修登録した各科目の成績に GP (Grade Point) を割り当てて、その平均を取ったものを GPA (Grade Point Average) といいます。学修の達成度を客観的に評価するための指標として学期ごとに算出され、卒業するために必要な単位をただ修得するのではなく、学生が主体的にかつ充実した学習効果をあげることを目的としています。GPA は学期ごとに算出されます。GPA の算出方法は大学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>シラバス・履修案内\)](#) から確認してください。

GPA の対象となる科目は、原則として履修登録した全ての科目です。ただし、卒業の所要単位に算入されない科目 (資格科目等の自由科目)、評語「N (認定)」の「単位認定された科目」、評語「P (合格)」の「成績評価基準にもとづく評価をしない科目で合格となった科目」は GPA から除かれます。また、成績証明書には、発行した時点での通算 GPA が記載されます。

なお、履修登録の締め切り以降は、原則として履修登録の変更はできません。ただし、以下に示す条件により履修を続けることが困難な場合、特別に履修中止を認める場合があります。

- ① 実際の授業の内容が公開されている『シラバス』と本質的に異なっている場合
- ② 授業についていけるだけの知識不足が発覚した場合

手続きの時期や方法など詳細については「履修登録の手引 (学部・学域生用)」を確認してください。

(2) CAP 制

学期内で履修する科目について事前・事後学修の時間を確保するために、各年度・各学期に履修登録できる総単位数には、上限が設けられています。このことを CAP 制 (キャップ制) といいます。

年次	登録できる単位数		
	前期	後期	年
1年次	25 単位以下	24 単位以下*	49 単位未満
2年次以降	24 単位以下	24 単位以下	48 単位未満

*1年次の後期のみ、成績優秀者（1年次前期 GPA が 3.0 以上）は、履修上限が 30 単位に緩和されます（申請手続は不要）。CAP 制限緩和の基準となるのは、後期履修登録時に学生ポータル（UNIPA）の成績照会画面に表示されている1年次前期の GPA 値です。

また、1～3年次の間に3ヵ月以上の留学（本学に在学扱いとなる留学に限る）に参加し、事前に申請した場合は、4年次の履修上限が前期 29 単位、後期 29 単位に緩和されます。希望する場合は履修登録期間中に文学部教務担当に申し出てください。

なお通年科目（卒業論文 等）の単位数を計算するときは、通年科目の単位数を開講学期数で割ってそれぞれの学期に振り分けされます（卒業論文は前期と後期で5単位ずつに振り分けされます）。

原則として、卒業の所要単位に算入されない科目（資格科目等の自由科目）は CAP 制の対象外となります。ただし、卒業要件に算入される科目のうち、集中科目「上方文化講座」は、CAP の対象外とします。

12. 定期試験受験心得

- (1) 試験開始までに入室し、試験監督者の指示に従ってください。
- (2) あらかじめ履修登録した科目のみ、受験することができます。
- (3) 受験に際しては、必ず学生証（デジタル学生証は認められません（以下同様））を持参し、着席した机の上に置いてください。学生証を忘れた場合は、事前に所属学部・学域教務担当窓口等で仮受験票の交付を受けてください。これを怠った場合は、受験を許可しないことがあります。
- (4) 試験を開始して 30 分経過後の遅刻者は受験を許可されません。
- (5) 試験を開始して 30 分を経過しなければ退出は許されません。
- (6) 机には、持ち込みを許可されたもの（教科書、ノートなど）がある場合を除いて、学生証、筆記具以外を置いてはいけません。
- (7) 携帯電話などの電子機器は、特に許可された場合を除き、電源を切り、かばんの中に入れてください。また、音を発する物（たとえば時計のアラーム）などで、他人に迷惑をかけてはいけません。
- (8) 受験中、学生相互間の物品（筆記具を含む）の貸借は一切認められません。また、私語をしてはいけません。
- (9) 配付された答案用紙には、所定の箇所に、学籍番号、氏名などを必ず記入してください。
- (10) 答案用紙は試験監督者から配付されたものを使用し、書き損じた答案用紙も全て提出してください。配付されたものは、許可されたもの以外は持ち帰ってはいけません。
- (11) 試験監督者が不正行為を認めた場合には、受験の停止、退室などを命ずることがあり、受験者はこれに従わなければいけません。

- (12) 対面試験と同様に遠隔試験についても一切の不正行為を禁じます。
- (13) レポート試験について、次の行為に対して不正行為とみなします。
- ① 他者のレポートの一部または全部を書き写す行為
 - ② 他者にレポート作成を依頼する行為
 - ③ 他者に依頼されて本人の代わりにレポートを作成する行為
 - ④ レポートのデータや資料等を捏造または改ざんする行為
 - ⑤ その他、上記の不正行為に準ずる行為
- (14) 試験（遠隔試験、レポート試験も含む）で不正行為を行った学生に対しては、原則としてその試験実施日が属する学期に履修中の科目の成績を全て無効とします。
- (15) 不正行為を行った学生は、学則に基づいた懲戒処分（訓告、停学、退学）の対象になる事もあります。
- (16) いかなる試験においても、自己または他人のために不正行為をしてはいけません。

13. 成績評価についての異議申立

学生は、その学期の成績評価について、次のような場合に異議を申し立てることができます。

- (1) 成績の誤記入等、担当教員の誤りと思われるもの
- (2) シラバス等により周知している成績評価の方法に照らして、評価結果等について疑義があるもの

異議申立を行う場合、学生ポータル（UNIPA）に掲載する申立期間内に、各科目の開設部局（各学部・学域教務担当または森之宮学務室教務担当）へ申し出てください。

なお、これは成績評価に納得がいけない者が、問い合わせ、また異議申立を行う制度ではないので、注意してください。

14. 単位認定

(1) 既修得単位の認定

入学する前に大学、短期大学（外国の大学等を含む）または大学以外の教育機関において科目を履修し、修得した単位については、基幹教育科目に限り、履修課程に照らして有益と認められる場合、合計 20 単位を超えない範囲で本学において修得したものとして認定されることがあります。認定を希望する者は、入学前までに文学部教務担当へ申し出てください。

(2) 外部試験等による外国語の単位認定

高い英語能力を持った学生を対象に、外国語科目（英語）の単位認定を行う制度があります。詳細については、「国際基幹教育機構開設科目要覧（学部・学域生用）」を参照してください。なお、認定された科目を履修することはできないので注意してください。

(3) 他大学における授業科目の履修による単位認定

本学在学中に外国の大学との協議等に基づき、当該大学の科目を履修し、単位を修得した場合は、教授会等の承認を経て本学において修得したものとみなし、単位が認定される場合があります。

なお、入学前の既修得単位認定制度および単位互換・単位認定制度により修得した単位数と合わせて 60 単位を超えることはできません。

15. 他大学との単位互換・単位認定制度

大学コンソーシアム大阪等との単位互換協定に基づいて、他大学の授業を履修することができます。毎年度教育推進課から募集の案内があります。詳細は各コンソーシアム等の Web サイトを確認してください。修得した科目および単位は、本学で履修し、単位を修得したものとみなし、単位が認定される場合があります。基幹教育科目の総合教養科目の単位として認定された場合は、上限 20 単位まで卒業に必要な総合教養科目の単位に含むことができます。

16. 休講・欠席

(1) 気象条件の悪化、交通機関の運休等による授業の休講および定期試験の延期措置
取り扱いの詳細は、以下のリンクより大学 Web サイトを確認してください。

[\(ホーム>教育・学生生活>気象条件の悪化、交通機関の運休等による授業の休講および定期試験の延期措置について\)](#)

(2) 授業欠席時の取扱い

授業を欠席する場合は、大学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>学事日程・授業関係\)](#) を確認のうえ、所定の手続きを行ってください。欠席理由（病気、各種実習、介護等体験、クラブ活動、忌引等）の如何を問わず原則として「欠席届」を授業担当教員に提出してください（欠席扱いが免除される制度ではありません）。授業科目の成績評価等の配慮については、授業担当教員の判断によります。

なお、以下の場合には特例として通常と対応が異なります。

- 学校感染症に指定されている感染症（季節性インフルエンザ・新型コロナウイルス感染症等）に罹患した場合
大学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>学事日程・授業関係\)](#) を確認してください。
- 裁判員制度に伴う裁判に出席する場合
大学 Web サイト [\(ホーム>教育・学生生活>授業・履修>学事日程・授業関係\)](#) を確認してください。

17. 転学部（学域）・転学科（学類）等

文学部生の大阪公立大学他学部・学域への転学部等は原則として認めていません。ただし、受け入れ先の学部・学科等が定める要件（成績・修得単位数など）を満たし、受け入れ学部等の承認のある場合には、教授会の審議を経て認めることがあります。転学部等の募集については、毎年9月に学生ポータル（UNIPA）にて掲示します。詳細については、各学部・学域教務担当に問い合わせてください。

また、文学部生は転コースに伴い学科が変更になる場合があります。転コースについては、「6. 文学部概要（2）学科・コース選択 ④コースの変更」を参照してください。

18. 学籍

（1）修業年限

卒業するまでの修業年限は4年です。

（2）在学年限

第3年次への進級条件および卒業に必要な単位数に満たない場合、留年となりますが、その場合、在学できる年数に上限が定められています。

① 第3年次への進級

進級の期限は入学後4年以内です。入学後4年以内（休学期間を除く）で進級条件を満たさない場合は、引き続き在学することはできません。

② 卒業

入学後8年以内（休学期間を除く）で卒業条件を満たさない場合は、引き続き在学することはできません。

（3）学年進行

学年進行の時期は4月です。また次年次への進級にあたっては、在籍年次に12ヵ月以上（休学期間を除く）在学する必要があります。なお3年次への進級は、別途進級条件を満たす必要があります。

（4）休学

病気その他やむを得ない理由で引き続き2ヶ月以上修学できない場合は、「休学願」を提出することにより、休学が認められることがあります。ただし、休学は復学を前提として、やむを得ない事由により行うものです。

休学を願い出る時は、前期休学の場合は2月末日、後期休学の場合は8月末日までに文学部教務担当に申し出てその指示を受けてください。休学は本人とコース代表（1回生は1回生担当）および学生委員との面談、「休学願」の提出等の手続きを経て許可されます。

なお、「休学願」の提出は、休学を開始する日の前日（前期からの休学の場合は3月31日、後期からの休学の場合は9月23日）までに行う必要があります。「休学願」は、授業料が未納の場合は受理されません。

学期の全期間を休学する場合は、授業料は徴収しませんが、学期途中までもしくは

学期途中から休学する場合は、その学期の授業料を納入しなければなりません。

また、休学を延長する場合も、上記と同様の手続きを行う必要があります。休学期間は、通算して2年を超えることができません。休学期間は在学年数に算入しません。

(5) 復学

休学期間終了までに申し出がない限り、終了翌日に復学します。また、休学期間中にその事由が消滅した場合は、申し出により復学することができます。復学するためにはその学期の授業料を納入しなければなりません。

(6) 退学

退学を願い出る時は、後期をもって退学する場合は2月末日、前期をもって退学する場合は8月末日までに文学部教務担当に申し出て、その指示を受けてください。退学は本人とコース代表（1回生は1回生担当）および学生委員との面談、「退学願」の提出等の手続きを経て許可されます。

なお、「退学願」の提出は、後期をもって退学する場合は3月31日、前期をもって退学する場合は9月23日までにを行う必要があります。「退学願」は、授業料が未納の場合は受理されません。

学期途中で退学する場合は、その学期の授業料を納入しなければなりません。

(7) 除籍

所定の期日までに授業料を納入しなかった場合、あるいは在学年限内に所定の単位を修得せず「退学願」を提出しなかった場合等は除籍となります。除籍の時期は、原則、前期末または後期末です。

(8) 再入学

退学または除籍された者が、再入学を願い出た場合には、教授会の選考を経て再入学が許可されることがあります。ただし、再入学の願い出は、退学または除籍の日から2年以内に限ります。再入学には、検定料、入学料が必要となり、許可された場合は、在籍時の在学年限を引き継ぎます。

(9) 留学

交換留学・認定留学を願い出る時は、担当教員等による指導助言を受けた上で、留学を開始する1ヵ月前までに「留学願」を提出しなければなりません。「留学願（様式）」は文学部教務担当窓口に取りに来てください。

なお、留学中に本学の授業科目をオンラインで履修しなければならないやむを得ない理由がある場合は、学期が開始する2ヵ月前までに、担当教員等に相談の上、所定の手続きを行ってください。

原則、休学、復学、退学は学期末の1ヵ月前までに、担当教員等による指導助言を受けたうえで願い出るようにしてください。急な事情により願い出が必要となった場合は、すみやかに各学部・学域教務担当へご相談ください。

19. 修学上の配慮・支援

疾病・障がいおよび社会的障壁を有する学生で個別具体的な修学上の配慮・支援を必要とする場合は、アクセシビリティセンターまたは文学部アクセシビリティ支援委員に申し出てください。

20. 教育学習支援基盤「ていら・みす」での学修記録の記入

学ぶ力（学習自己管理能力）を高めること、すなわち、

- ・ 目標を意識しながら、学ぶこと
- ・ 自分自身の学びを見つめる（振り返る）目を養うこと
- ・ 学びについて得た気づきを、次の学修に生かすこと

を主な目的として、半期ごとに、教育学習支援基盤「ていら・みす」において、ポートフォリオ（学修記録）への記入を行ってください。「ていら・みす」へは、学生ポータル（UNIPA）からアクセスしてください。

21. 生成 AI の利活用に関する学生向けガイドライン

本学では、学業や研究において生成 AI を有効かつ安全に活用できるよう、ガイドラインを作成しました。ガイドラインの内容をよく確認の上、適切な場面で責任を持って活用してください。

[生成 AI の利活用に関する学生向けガイドライン](#)

22. 基幹教育科目 標準履修課程表

「7. 履修課程と履修上の注意」(2) 基幹教育科目 も参照すること。

科目区分	科目名	配当年次及び 単位数<○印必修>								卒業要件	
		第1年次		第2年次		第3年次		第4年次			
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
基幹教育科目	総合教養科目	(国際基幹教育機構 開設科目要覧(学部・学域生用)参照)								選択科目 10単位	
	ゼミナール科目	初年次ゼミナール								必修科目 1単位	
	情報科目	「情報リテラシー」または 「データエンジニアリング・AI基礎」								選択必修 2単位	
	外国語科目	外(英語科目)	University English 1A	②							必修科目 12単位
			University English 1B	②							
			University English 2A		②						
			University English 2B		②						
			University English 3A			(2)	(2)				
			University English 3B			(2)	(2)				
		Media English, Writing 等								履修単位数を指定 しない	
		外(初修外国語科目)	(朝・中・露・独・仏)基礎1	④							必修科目 12単位
			(朝・中・露・独・仏)基礎2		④						
			(朝・中・露・独・仏)応用1	②							
(朝・中・露・独・仏)応用2			②								
	(朝・中・露・独・仏)特修								履修単位数を指定 しない		
健康・スポーツ 科学科目	「健康・スポーツ科学概論」または 「健康・スポーツ科学演習」								選択必修 2単位		

科目群中より履修を指定する単位数を満たしたうえで、合計39単位以上を修得すること。

- ※1 科目名称、配当期・配当年次は、変更されることがあるため、最新の時間割等を確認すること。
- ※2 (朝・中・露・独・仏) はそれぞれ 朝:朝鮮語 中:中国語 露:ロシア語 独:ドイツ語 仏:フランス語 を指している。
- ※3 英語以外の外国語科目(朝・中・露・独・仏) については、当該年度に1言語しか履修できないので注意すること。
- ※4 第一言語(母語)ではない初修外国語を入学以前に学習したことがある人は、入学前に申請して面接試験等に合格すれば、入門初級履修免除制度を利用して1年次から2年次科目を受講することができる。詳しくは森之宮学務室教務担当に問い合わせること。
- ※5 単位数が「()」で囲まれている科目は必修科目であるが、開講される学期は時間割で確認すること。

科目区分	科目名	配当年次	単位数	備考	
基幹教育科目	基礎教育科目	指定科目	基礎数学A	1	2
			基礎数学B	1	2
			近代物理学	2	2
			入門化学	2	2
			生物学A	2	2
			生物学B	1	2
			地球学入門	1	2
			プログラミング入門B	1	2

・指定科目については、下記の外国語科目と合わせて8単位以内に限り、文学部専門科目の自由選択科目として卒業単位に含むことができます。それ以外の基礎教育科目は、履修できません。

・指定科目の基礎教育科目の履修を希望する場合は、必ず履修登録期間中に文学部教務担当にて履修手続きを行ってください。

科目区分	科目名	配当年次	単位数	備考	
基幹教育科目	外国語科目	指定科目	Media English	1	2
			WritingA	1	2
			WritingB	3	2
			Reading	1	2
			Literature	1	2
			ESD A	1	2
			ESD B	1	2
			Communicative Grammar	1	2
			各初修外国語の特修A~H	2	2
			各初修外国語の海外語学研修A・B	1・2	2

指定科目については、上記の基礎教育科目と合わせて8単位以内に限り、文学部専門科目の自由選択科目として卒業単位に含むことができます。

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

哲学歴史学科 哲学コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考	
必修科目	人間文化概論A	1	2	22単位		
	人間文化概論B	1	2			
	人間文化基礎論1 (a: 哲学、b: 歴史学)	2	2			
	人間文化基礎論2 (a: 哲学、b: 歴史学)	2	2			
	哲学歴史学研究演習1	4	2			
	哲学歴史学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	哲学概論1	2・3	2	30単位		
	哲学概論2	2・3	2			
	哲学史通論1	1・2	2			
	哲学史通論2	1・2	2			
	哲学演習・講読1	3・4	2			
	哲学演習・講読2	3・4	2			
	哲学史演習・講読1	3・4	2			
	哲学史演習・講読2	3・4	2			
	倫理学概論1	2・3	2			
	倫理学概論2	2・3	2			
	倫理学演習・講読1	3・4	2			
	倫理学演習・講読2	3・4	2			
	宗教学概論1	2・3	2			
	宗教学概論2	2・3	2			
	宗教学演習・講読1	3・4	2			
	宗教学演習・講読2	3・4	2			
	美学概論1	2・3	2			
美学概論2	2・3	2				
哲学歴史学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	哲学特講A	3・4	2	40単位		
	哲学特講B	3・4	2			
	哲学特講C	3・4	2			
	哲学特講D	3・4	2			
	哲学特講E	3・4	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	哲学歴史学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
基礎教育科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内		
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目						

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

哲学歴史学科 日本史コース					
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考
必修科目	人間文化概論A	1	2	22単位	
	人間文化概論B	1	2		
	人間文化基礎論1 (a: 哲学、b: 歴史学)	2	2		
	人間文化基礎論2 (a: 哲学、b: 歴史学)	2	2		
	哲学歴史学研究演習1	4	2		
	哲学歴史学研究演習2	4	2		
	卒業論文	4	10		
選択必修科目	日本史基礎講読1	1・2	2	40単位	
	日本史基礎講読2	2・3	2		
	日本史通論A	2・3	2		
	日本史通論B	2・3	2		
	考古学通論	2・3	2		
	日本史講読A	2・3	2		
	日本史講読B	2・3	2		
	日本史講読C	2・3	2		
	日本史講読D	2・3	2		
	日本史演習A	3・4	2		
	日本史演習B	3・4	2		
	日本史演習C	3・4	2		
	日本史演習D	3・4	2		
	考古学演習	3・4	2		
	哲学歴史学科他コース提供選択必修科目				
自由選択科目	日本史特講A	3・4	2	40単位	
	日本史特講B	3・4	2		
	日本史特講C	3・4	2		
	日本史特講D	3・4	2		
	大阪の歴史演習	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講
	考古学実習	2・3	2		
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目				
	哲学歴史学科他コース提供自由選択科目				
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)				
	学部共通専門教育科目				
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内
	基礎教育科目のうちの指定科目				
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

哲学歴史学科 世界史コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考	
必修科目	人間文化概論A	1	2	22単位		
	人間文化概論B	1	2			
	人間文化基礎論1 (a:哲学、b:歴史学)	2	2			
	人間文化基礎論2 (a:哲学、b:歴史学)	2	2			
	哲学歴史学研究演習1	4	2			
	哲学歴史学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	世界史基礎講読	1・2	2	40単位		
	東洋史基礎講読	2・3	2			
	西洋史基礎講読	2・3	2			
	世界史通論	2・3	2			
	東洋史通論	2・3	2			
	西洋史通論	2・3	2			
	世界史講読	2・3	2			
	東洋史講読A	2・3	2			
	東洋史講読B	2・3	2			
	東洋史講読C	2・3	2			
	西洋史講読A	2・3	2			
	西洋史講読B	3・4	2			
	西洋史講読C	2・3	2			
	西洋史講読D	3・4	2			
	世界史演習	3・4	2			
	東洋史演習A	3・4	2			
	東洋史演習B	3・4	2			
	東洋史演習C	3・4	2			
	西洋史演習A	3・4	2			
	西洋史演習B	3・4	2			
西洋史演習C	3・4	2				
哲学歴史学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	世界史特講	3・4	2	40単位		
	東洋史特講A	3・4	2			
	東洋史特講B	3・4	2			
	西洋史特講A	3・4	2			
	西洋史特講B	3・4	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	哲学歴史学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目					
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内	

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

人間行動学科 社会学コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考	
必修科目	人間行動学概論A	1	2	22単位		
	人間行動学概論B	1	2			
	◎ 人間行動学データ解析法1	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理	
	◎ 人間行動学データ解析法2	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理	
	人間行動学研究演習1	4	2			
	人間行動学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	社会学概論	2・3	2	30単位		
	社会学史	2・3	2			
	◎ 社会学研究法	2	2			
	◎ 社会調査法	2	2			
	◎ 社会学質的研究法	3	2			
	◎ 社会学データ解析法	3	2			
	◎ 社会学実習1	3	2		社会学実習1と同2は通年履修しなければならない。	
	◎ 社会学実習2	3	2			
	社会学基礎演習	2	2			
	社会学演習1	2・3	2			
	社会学演習2	3・4	2			
	社会学演習3	3・4	2			
	人間行動学科他コース提供選択必修科目					
自由選択科目	社会学特講A	2・3	2	40単位	2～3年に1度の頻度で隔年開講(不定)	
	社会学特講B	2・3	2			
	社会学特講C	2・3	2			
	社会学特論A	2・3	2			
	社会学特論B	2・3	2			
	社会学特論C	2・3	2			
	社会学特論D	2・3	2			
	社会学特論E	2・3	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	人間行動学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内	
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目						

◎印は社会調査士資格取得に必要な科目である。ただし、「人間行動学データ解析法1・2」については、a組のみ資格対応科目である。

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

人間行動学科 心理学コース					
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考
必修科目	人間行動学概論A	1	2	22単位	
	人間行動学概論B	1	2		
	人間行動学データ解析法1	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理
	人間行動学データ解析法2	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理
	人間行動学研究演習1	4	2		
	人間行動学研究演習2	4	2		
	卒業論文	4	10		
選択必修科目	心理学概論1	2・3	2	30単位	
	心理学概論2	2・3	2		
	心理学研究法1	2・3	2		
	心理学研究法2	2・3	2		
	心理学実験演習1(心理学実験)	2	2		
	心理学実験演習2(心理学実験)	2	2		
	心理学研究演習1	3	2		
	心理学研究演習2	3	2		
	人間行動学データ解析法3 (心理学統計法)	3・4	2		
	心理学統計法	2・3	2		
	人間行動学データ解析法4	3・4	2		
	人間行動学科他コース提供選択必修科目				
自由選択科目	神経・生理心理学特論	2・3	2	40単位	
	知覚・認知心理学特論	2・3	2		
	学習・言語心理学特論	2・3	2		
	発達心理学特論	2・3	2		
	社会・集団・家族心理学特論	2・3	2		
	感情・人格心理学特論	2・3	2		
	心理的アセスメント特論	2・3	2		
	心理学特講A	3・4	2		西暦偶数年度隔年開講
	心理学特講B	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目				
	人間行動学科他コース提供自由選択科目				
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)				
	学部共通専門教育科目				
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内
	基礎教育科目のうちの指定科目				
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目			あわせて8単位以内		

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

人間行動学科 教育学コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考	
必修科目	人間行動学概論A	1	2	22単位		
	人間行動学概論B	1	2			
	人間行動学データ解析法1	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理	
	人間行動学データ解析法2	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理	
	人間行動学研究演習1	4	2			
	人間行動学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	教育学概論A	2・3	2	30単位		
	教育学概論B	2・3	2			
	教育方法学A	2・3	2			
	教育方法学B	3	2			
	比較・国際教育学	3	2			
	教育学研究法1	2	2			
	教育学研究法2	3	2			
	教育学実習	2	2			
	教育学演習A	2	2			
	教育学演習B	3	2			
	教育学演習C	2	2			
	教育学演習D	3	2			
	人間行動学科他コース提供選択必修科目					
自由選択科目	教育学演習E	3	2	40単位		
	教育行政学	3・4	2			
	教育史	2・3	2			
	教育メディア論	2・3	2			
	教育学特講A	3・4	2			
	教育学特講B	3・4	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	人間行動学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内	
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目					

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

人間行動学科 地理学コース							
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考		
必修科目	人間行動学概論A	1	2	22単位			
	人間行動学概論B	1	2				
	人間行動学データ解析法1	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理		
	人間行動学データ解析法2	2	2		a: 社会・心理、b: 教育・地理		
	人間行動学研究演習1	4	2				
	人間行動学研究演習2	4	2				
	卒業論文	4	10				
選択必修科目	地理学概論A	2・3	2	30単位			
	地理学概論B	2・3	2				
	地誌学A	3・4	2				
	地誌学B	3・4	2				
	地理学実験実習1	2・3	2				
	地理学実験実習2	2・3	2				
	地理学講読演習A	3	2				
	地理学講読演習B	3	2				
	地理学野外調査実習1	2・3	2				
	地理学野外調査実習2	3	2				
	地理学演習A	3	2				
	地理学演習B	3	2				
	人間行動学データ解析法4	3・4	2				
	人間行動学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	地図学	3・4	2	40単位	西暦偶数年度隔年開講		
	地理情報学	2・3	2		西暦奇数年度隔年開講		
	地理学特講A	3・4	2				
	地理学特講B	3・4	2				
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目						
	人間行動学科他コース提供自由選択科目						
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)						
	学部共通専門教育科目						
	他学部・他学域提供専門科目						
	基礎教育科目のうちの指定科目						
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目							
あわせて8単位以内							
あわせて8単位以内							

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

言語文化学科 国語国文学コース							
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考		
必修科目	言語文化概論A	1	2	22単位			
	言語文化概論B	1	2				
	言語文化基礎論A	2	2				
	言語文化基礎論B	2	2				
	言語文化学研究演習1	4	2				
	言語文化学研究演習2	4	2				
	卒業論文	4	10				
選択必修科目	国文学史A	1・2	2	30単位	西暦偶数年度隔年開講		
	国文学史B	1・2	2		西暦奇数年度隔年開講		
	国文学史C	1・2	2		西暦奇数年度隔年開講		
	国文学史D	1・2	2		西暦偶数年度隔年開講		
	国語学基礎論	2・3	2				
	国語国文学講読A 1	2・3	2				
	国語国文学講読A 2	2・3	2				
	国語国文学講読B 1	2・3	2				
	国語国文学講読B 2	2・3	2				
	国語国文学演習A 1	3・4	2				
	国語国文学演習A 2	3・4	2				
	国語国文学演習B 1	3・4	2				
	国語国文学演習B 2	3・4	2				
	国語国文学演習C 1	3・4	2				
	国語国文学演習C 2	3・4	2				
	国語国文学演習D 1	3・4	2				
国語国文学演習D 2	3・4	2					
言語文化学科他コース提供選択必修科目							
自由選択科目	国語国文学特講A	2・3	2	40単位	西暦奇数年度隔年開講		
	国語国文学特講B	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講		
	国語国文学特講C	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講		
	国語国文学特講D	2・3	2		西暦奇数年度隔年開講		
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目						
	言語文化学科他コース提供自由選択科目						
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)						
	学部共通専門教育科目						
	他学部・他学域提供専門科目					8単位以内	
基礎教育科目のうちの指定科目					あわせて8単位以内		
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目							

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

言語文化学科 中国語中国文学コース					
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考
必修科目	言語文化概論A	1	2	22単位	
	言語文化概論B	1	2		
	言語文化基礎論A	2	2		
	言語文化基礎論B	2	2		
	言語文化学研究演習1	4	2		
	言語文化学研究演習2	4	2		
	卒業論文	4	10		
選択必修科目	中国語中国文学概論A	2・3	2	30単位	西暦偶数年度隔年開講
	中国語中国文学概論B	2・3	2		
	中国語中国文学概論C	2・3	2		
	中国語中国文学概論D	2・3	2		
	中国語基礎演習1	2・3	2		
	中国語基礎演習2	2・3	2		
	中国語学演習A	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講
	中国語学演習B	3・4	2		
	中国文学演習1	3・4	2		西暦偶数年度隔年開講
	中国文学演習2	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講
	中国文化学演習1	3・4	2		西暦偶数年度隔年開講
	中国文化学演習2	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講
	中国語コミュニケーション1	2・3	2		
	中国語コミュニケーション2	2・3	2		
	言語文化学科他コース提供選択必修科目				
自由選択科目	中国語コミュニケーション3	3・4	2	40単位	
	中国語コミュニケーション4	3・4	2		
	中国語中国文学特講A	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講
	中国語中国文学特講B	3・4	2		西暦偶数年度隔年開講
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目				
	言語文化学科他コース提供自由選択科目				
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)				
	学部共通専門教育科目				
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内
	基礎教育科目のうちの指定科目				
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

言語文化学科 英米言語文化コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考	
必修科目	言語文化概論A	1	2	22単位		
	言語文化概論B	1	2			
	言語文化基礎論A	2	2			
	言語文化基礎論B	2	2			
	言語文化学研究演習1	4	2			
	言語文化学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	英米文化概論	2・3	2	30単位		
	英米文学史A	2・3	2			
	英米文学史B	2・3	2			
	英米文学史C	2・3	2			
	英語学概論A	2・3	2			
	英語学概論B	2・3	2			
	英米文化演習	2・3	2			
	英米文学演習A	2・3	2			
	英米文学演習B	2・3	2			
	英米文学演習C	2・3	2			
	英米文学演習D	3・4	2			
	英語学演習	2・3	2			
言語文化学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	英米文化特講	2・3	2	40単位		
	英米文学特講	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講	
	英語学特講	2・3	2		西暦奇数年度隔年開講	
	英語コミュニケーションA	2・3	2			
	英語コミュニケーションB	2・3	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	言語文化学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内	
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目						

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

言語文化学科 ドイツ語圏言語文化コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考	
必修科目	言語文化概論A	1	2	22単位		
	言語文化概論B	1	2			
	言語文化基礎論A	2	2			
	言語文化基礎論B	2	2			
	言語文化学研究演習1	4	2			
	言語文化学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	ドイツ語圏言語文化論	2・3	2	30単位	ドイツ語圏言語文化コースに所属する学生は、本コース提供の選択必修科目より24単位以上を修得すること。	
	ドイツ語圏文学史	2・3	2			
	ドイツ語圏文化論	2・3	2			
	ドイツ語学概論	2・3	2			
	ドイツ語圏言語文化基礎演習A	2	2			
	ドイツ語圏言語文化基礎演習B	2	2			
	ドイツ語圏言語文化演習A	3・4	2			
	ドイツ語圏言語文化演習B	3・4	2			
	ドイツ語圏言語文化演習C	3・4	2			
	ドイツ語圏言語文化特別演習	3	2			
	ドイツ語コミュニケーション1	3・4	2			
	ドイツ語コミュニケーション2	3・4	2			
	ドイツ語圏ランデスクンデ	3・4	2			
言語文化学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	ヨーロッパ言語文化特講	3・4	2	40単位		
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	言語文化学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目					8単位以内
	基礎教育科目のうちの指定科目					
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目					あわせて8単位以内

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

言語文化学科 フランス語圏言語文化コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考	
必修科目	言語文化概論A	1	2	22単位		
	言語文化概論B	1	2			
	言語文化基礎論A	2	2			
	言語文化基礎論B	2	2			
	言語文化学研究演習1	4	2			
	言語文化学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	フランス語圏言語文化論	2・3	2	30単位	西暦偶数年度隔年開講 フランス語圏言語文化コースに所属する学生は、本コース提供の選択必修科目より24単位以上を修得すること	
	フランス語圏文学史	1・2	2			
	フランス語圏文化論	2・3	2			
	フランス語学概論	2・3	2			
	フランス語圏言語文化基礎演習A	2	2			
	フランス語圏言語文化基礎演習B	2	2			
	フランス語圏言語文化基礎演習C	2	2			
	フランス語圏言語文化演習A	3・4	2			
	フランス語圏言語文化演習B	3・4	2			
	フランス語圏言語文化演習C	3・4	2			
	フランス語圏言語文化演習D	3・4	2			
	フランス語圏言語文化特別演習	3	2			
	フランス語コミュニケーション1	3・4	2			
	フランス語コミュニケーション2	3・4	2			
エチュード・フランコフォーヌ	2・3	2				
言語文化学科他コース提供選択必修科目						
自由選択科目	フランス語コミュニケーション3	3・4	2	40単位		
	フランス語コミュニケーション4	3・4	2			
	インターカルチュラルスタディーズA	3・4	2		西暦奇数年度隔年開講	
	インターカルチュラルスタディーズB	3・4	2		西暦偶数年度隔年開講	
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	言語文化学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目				8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目					
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目				あわせて8単位以内	

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

文化構想学科 表現文化コース							
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考		
必修科目	文化構想学概論A	1	2	22単位			
	文化構想学概論B	1	2				
	文化構想学基礎演習A	2	2				
	文化構想学基礎演習B	2	2				
	文化構想学研究演習1	4	2				
	文化構想学研究演習2	4	2				
	卒業論文	4	10				
選択必修科目	文化理論	2・3	2	30単位			
	表象文化論	2・3	2				
	ポピュラー文化論	2・3	2				
	比較表現論	2・3	2				
	テキスト文化論	2・3	2				
	表現文化論基礎演習	2	2				
	表象文化論演習	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講		
	表象文化論講読	2・3	2		西暦奇数年度隔年開講		
	ポピュラー文化論演習	2・3	2		西暦偶数年度隔年開講		
	ポピュラー文化論講読	2・3	2		西暦奇数年度隔年開講		
	比較表現論演習	2・3	2				
	テキスト文化論演習	2・3	2				
	表現文化論特殊演習1	3・4	2				
	表現文化論特殊演習2	3・4	2				
	文化理論演習	3	2				
文化構想学科他コース提供選択必修科目							
自由選択科目	表現文化特論	3・4	2	40単位			
	表象文化特論	3・4	2				
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目						
	文化構想学科他コース提供自由選択科目						
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)						
	学部共通専門教育科目						
	他学部・他学域提供専門科目					8単位以内	
	基礎教育科目のうちの指定科目					あわせて8単位以内	
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目							

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

文化構想学科 アジア文化コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備 考	
必修科目	文化構想学概論A	1	2	22単位		
	文化構想学概論B	1	2			
	文化構想学基礎演習A	2	2			
	文化構想学基礎演習B	2	2			
	文化構想学研究演習1	4	2			
	文化構想学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	アジア文化学基礎論	2	2	30単位	アジア文化コースに所属する学生は、本コース提供の選択必修科目より20単位以上を修得すること。	
	アジア地域文化概論	2	2			
	アジア伝統文化概論	2	2			
	アジア共生文化概論	2	2			
	アジア比較文化概論	2	2			
	アジア地域文化論	2・3	2			
	アジア地域文化論演習	3・4	2			
	アジア伝統文化論	2・3	2			
	アジア伝統文化論演習	3・4	2			
	アジア共生文化論	2・3	2			
	アジア共生文化論演習	3・4	2			
	アジア比較文化論	2・3	2			
	アジア比較文化論演習	3・4	2			
	文化構想学科他コース提供選択必修科目					
自由選択科目	文化人類学	3・4	2	40単位		
	アジア文化特論A	3・4	2			
	アジア文化特論B	3・4	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	文化構想学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目					8単位以内
	基礎教育科目のうちの指定科目					あわせて8単位以内
	基幹教育の外国語科目のうちの指定科目					

23. 文学部専門科目表

「7. 履修課程と履修上の注意」(3) 専門科目 も参照すること。

文化構想学科 文化資源コース						
科目区分	科目名	配当年次	単位数	卒業要件	備考	
必修科目	文化構想学概論A	1	2	22単位		
	文化構想学概論B	1	2			
	文化構想学基礎演習A	2	2			
	文化構想学基礎演習B	2	2			
	文化構想学研究演習1	4	2			
	文化構想学研究演習2	4	2			
	卒業論文	4	10			
選択必修科目	文化資源基礎論	2	2	30単位		
	観光文化論	2	2			
	文化デザイン論	2	2			
	視覚芸術文化論	2	2			
	国際文化論	2	2			
	視覚文化資源論演習	2・3	2			
	地域文化資源論演習	2・3	2			
	音楽文化資源論演習	3・4	2			
	国際文化資源論演習	3・4	2			
	視覚文化資源論実習	2・3	2			
	地域文化資源論実習	2・3	2			
	音楽文化資源論実習	3・4	2			
	国際文化資源論実習	3・4	2			
	文化構想学科他コース提供選択必修科目					
自由選択科目	文化資源特論A	2・3	2	40単位		
	文化資源特論B	2・3	2			
	文化資源特論C	3・4	2			
	文化資源論特別演習	2・3	2			
	規定の単位数(30単位)を超えて履修した選択必修科目					
	文化構想学科他コース提供自由選択科目					
	他学科の専門科目(必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて)					
	学部共通専門教育科目					
	他学部・他学域提供専門科目					
	基礎教育科目のうちの指定科目					
基幹教育の外国語科目のうちの指定科目						
					8単位以内	
					あわせて8単位以内	

23. 文学部専門科目表（共通）

科目区分	科目名	配当年次	単位数	備 考
学部共通専門教育科目（自由選択科目）	美術史通論A	2・3	2	西暦偶数年度隔年開講
	美術史通論B	2・3	2	西暦奇数年度隔年開講
	民俗学	2・3	2	
	広報情報論A	3・4	2	西暦偶数年度隔年開講
	広報情報論B	3・4	2	西暦奇数年度隔年開講
	マス・コミュニケーション論A	3・4	2	西暦奇数年度隔年開講
	マス・コミュニケーション論B	3・4	2	西暦偶数年度隔年開講
	自然地理学概論	2・3	2	
	中国古典語 1	3・4	2	
	中国古典語 2	3・4	2	
	ギリシア語 1	1・2	2	西暦偶数年度隔年開講
	ギリシア語 2	1・2	2	西暦偶数年度隔年開講
	ラテン語 1	1・2	2	西暦奇数年度隔年開講
	ラテン語 2	1・2	2	西暦奇数年度隔年開講
	西洋古典学	1・2	2	
	上方文化講座	1・2	2	CAP対象外
	日本文化発信のための英語	2・3	2	
	大阪の地域・文化実践演習	2・3	2	西暦奇数年度隔年開講
	総合文化実践演習	2・3	2	
	博物館科目	生涯学習概論	1	2
博物館概論		1	2	
博物館経営論		2	2	
博物館資料論		2	2	
博物館資料保存論		2	2	
博物館展示論		2	2	
博物館教育論		2	2	
博物館情報・メディア論		2	2	
自由科目	教育基礎論	1	2	※文化構想学科のみ卒業要件に含まない・CAP対象外（その他の学科は「自由選択科目」として卒業単位に含む・CAP対象）
	教育制度論	1	2	
	発達・学習論	1	2	
自由科目※	教育の思想と歴史	1	2	※基幹教育にて提供 卒業要件に含まない・CAP対象外
	教職概論	1	2	
	教育と社会	1	2	
	特別支援教育論	2	2	
	教育課程論	2	2	
	道徳指導論	2	2	
	総合的な探究の指導論	2	2	
	特別活動論	2	2	
	教育方法論	2	2	
	生徒・進路指導論	2	2	
	教育相談論	2	2	

23. 文学部専門科目表（共通）

科目区分	科目名	配当年次	単位数	備 考	
自由科目	教職科目※	社会科・地理歴史科教育法 1 A	2	2	卒業要件に含まない・CAP対象外
		社会科・地理歴史科教育法 2 A	2	2	
		社会科・公民科教育法 1 A	2	2	
		社会科・公民科教育法 2 A	2	2	
		国語科教育法 1 A	2・3	2	
		国語科教育法 1 B	2・3	2	
		国語科教育法 2 A	2・3	2	
		国語科教育法 2 B	2・3	2	
		外国語科教育法（英語） 1 A	2	2	
		外国語科教育法（英語） 1 B	2	2	
		外国語科教育法（英語） 2 A	3	2	
		外国語科教育法（英語） 2 B	3	2	
		外国語科教育法（中国語） 1 A	2	2	
		外国語科教育法（中国語） 1 B	2	2	
		外国語科教育法（中国語） 2 A	3	2	
		外国語科教育法（中国語） 2 B	3	2	
		外国語科教育法（独語） 1 A	2	2	
		外国語科教育法（独語） 1 B	2	2	
		外国語科教育法（独語） 2 A	3	2	
		外国語科教育法（独語） 2 B	3	2	
		外国語科教育法（仏語） 1 A	2	2	
		外国語科教育法（仏語） 1 B	2	2	
		外国語科教育法（仏語） 2 A	3	2	
	外国語科教育法（仏語） 2 B	3	2		
	書道	2	2		
博物館科目	博物館実習 1 A	3	1		
	博物館実習 1 B	3	1		
	博物館実習 2	3	1		

※「教職科目」は「教職概論」修得後、もしくは同時に履修中でなければ、履修できません（教育学コースに所属する学生については、「教職概論」を未履修でも「教職科目」を履修できる場合があります）。

※ 教職課程の履修方法、博物館学芸員課程の履修方法は「25. 教職課程の履修方法」「26. 博物館学芸員課程の履修方法」を参照すること。

24. 文学部共通専門教育科目

各コースの専門科目とは別に、学部共通専門教育科目として提供されている科目があります。学部共通専門教育科目は、一部科目を除き自由選択科目に含むことができます。このうち特色ある科目について、以下に解説します。

・上方文化講座

大阪の地に歴史的に育まれた文化、とりわけ伝統芸能に光を当て、学問的アプローチの下でこれを学ぼうとする試みであり、現在は文楽を取り上げています。伝統芸能の第一線で活躍する専門家を招き、本学教員との共同作業により授業を組み立てます。一般市民にも開放している科目で、毎年8月に実施しています。

25. 教職課程の履修方法

(1) 取得することのできる教育職員免許状

文学部において取得することのできる教育職員免許状は次のとおりです。また、複数の教科の免許状を取得することも可能です。

① 中学校教諭 一種免許状 免許教科：社会 国語 英語 ドイツ語 フランス語 中国語
② 高等学校教諭 一種普通免許状 免許教科：地理歴史 公民 国語 英語 ドイツ語 フランス語 中国語

(2) 教職課程科目の履修

教育職員免許状は、「基礎資格（「学士の学位を有すること」つまり、学部を卒業すること）」を有し、かつ法令に定められた「所定の単位」を修得することにより取得することができます。ただし、そのためには、文学部を卒業するために必要な単位とは別に、多くの科目履修が必要となり、計画的な履修が不可欠です。また、教職課程の履修方法には注意すべき点が多くあります。教職課程を履修しようとする人は、教職課程オリエンテーションに必ず出席し、希望者に別途配布の「教職課程の手引」等を熟読してください。

また、入学年度により履修方法等が異なる場合があるので、自身の入学年度用の手引きを参照する必要があります。

26. 博物館学芸員課程の履修方法

大阪公立大学では、博物館学芸員の資格取得のための課程を文学部に設置し、全学生に対して〈博物館に関する科目〉を開講しています。大阪公立大学の学生および大学院生は、所定の科目履修により博物館学芸員となる資格を取得することができます。

■博物館学芸員を目指すために

博物館学芸員は専門的職員であり、大阪公立大学で学んだ専門的知識を活かすことのできる職種ですが、その分、それぞれの分野における高い専門性が求められます。各地の博物館施設での学芸員公募においては、学芸員資格が応募条件となっていることはもちろんですが、博物館活動に関わる基礎的知識とともに高い専門的能力が問われることとなります。

したがって、学芸員を目指す者は、大学における資格取得のための科目履修のみならず、博物館活動への自主的な参画や継続的な学修とともに、それぞれの分野の専門的能力を身につけることが必要です。

(1) 取得すべき単位等 (博物館法施行規則第1条第1項)

博物館法に定める学芸員となる資格を取得しようとする学生は、〈博物館に関する科目〉の単位を修得する必要があります。

① 必修科目

博物館法施行規則に定められた必修科目は、「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館情報・メディア論」「博物館教育論」「博物館実習」(本学では1A・1B・2に区分)の計9科目(11科目)19単位です。

「博物館実習1A」「博物館実習1B」「博物館実習2」を除く8科目は、文学部の卒業要件である自由選択科目の単位に含めることができます。

② 選択科目

博物館学芸員となる資格を取得するにあたって、履修しておくことが望ましい科目。

③ 自主的な学び

博物館学芸員を目指す者は、普段から各地の博物館施設を見学し、施設や展示のみならず、博物館が実施している普及事業をはじめとする業務にも興味をもち、博物館の社会的な役割や運営についても学び、考えることが望まれます。

(2) 講義科目の履修

① 講義科目

「博物館実習1A」「博物館実習1B」「博物館実習2」を除く8科目は、基本的に大学で行う講義科目で、毎年、開講します。このうち、「博物館展示論」などでは、博物館での学外講義が含まれることがあります。

② 概論科目

「博物館概論」および「生涯学習概論」は、〈博物館に関する科目〉の入口となる科目であるため、第1年次に履修できます。学芸員資格を取得しようとする学生は、第2年次以降の科目履修に先立ち、「博物館概論」および「生涯学習概論」を第1年次に単位修得しておくことが望まれます。

③ 2年次以降の講義科目

「博物館概論」と「生涯学習概論」を除く6科目は、いずれも第2年次以上で履修することができます。後述するように、「博物館実習1A」「博物館実習1B」と「博物館実習2」の履修条件として、講義科目の単位修得状況を設定しているため、計画的に科目の単位を修得してください。

④ 特定科目の履修制限

「博物館展示論」では、学外での現地講義を実施するため、適正な人数である必要があります。履修者数の制限を設けます(60名)。履修希望者が60名を超える場合は、「生涯学習概論」と「博物館概論」の単位修得者および現履修登録者を優先し、その他の者は抽選とします。

(3) 博物館実習の履修

博物館実習は、学芸員の資格を取得するための最終段階の科目です。法令に定められた科目である「博物館実習」(3単位)について、大阪公立大学では、学内実習である「博物館実習1A」「博物館実習1B」(各1単位)と、大阪歴史博物館等の受け入れ館で行う館園実習である「博物館実習2」(1単位)に区分しています。両者を履修し、合わせて3単位を修得する必要があります。

① 配当年次

「博物館実習1A」「博物館実習1B」「博物館実習2」は第3～4年次を配当年次とします。「博物館実習1A」「博物館実習1B」は、第3年次に履修することが望まれます。前期科目「博物館実習1A」の単位を修得しなければ後期科目「博物館実習1B」を履修することはできません。「博物館実習1A」と「博物館実習1B」は極力同じ年度に履修してください。また「博物館実習2」を「博物館実習1A」「博物館実習1B」より先に履修することはできません。同年次に履修することは可能ですが、「博物館実習2」を第3年次に、「博物館実習1A」「博物館実習1B」を第4年次に履修することはできません。

夏休み期間に行われることの多い「博物館実習2」の館園実習の日程は、受け入れ館の指定があるので、都合が合わない場合もあり得ます。したがって、「博物館実習2」も第3年次に履修しておくことが望ましいでしょう。履修できなかった場合は第4年次での履修となります。

② 履修条件

「博物館実習1A」「博物館実習1B」を履修するには、「博物館概論」を含む〈博物館に関する科目〉3科目6単位を修得済みであることを条件とします。(大学院生は、「博

物館概論」を含む〈博物館に関する科目〉3科目6単位を修得済みあるいは履修しようとする年度中に修得できる見込みであることを条件に履修を可とします。)

さらに、「博物館実習2」を履修するには、必修科目および「博物館実習1A」「博物館実習1B」の単位を全て修得済みか、あるいは履修しようとする年度中に全て修得できる見込みであることを条件とします。

(4) 博物館実習1A・博物館実習1B(学内実習)の履修

この実習は、多様な博物館の姿を観覧する「見学実習」、資料を実際に取り扱う「実務実習」、博物館の基本的業務である企画展を実施する「博物館実習展」から構成されます。

AとBに区分していますが通年科目であると考えてください。また「博物館実習展」の準備期間など、時間外の作業が必要となることもあります。また、「見学実習」についても時間外での見学となります。

後期の中心となる「博物館実習展」は、受講生が企画を立案し、展示物や解説パネル等の準備を行い、1月～2月に、学内等で展示を行います。

(5) 博物館実習2(館園実習)の履修

この実習は、前期の夏休み期間に行われることが多く、原則5日間の集中講義の形式で、博物館において、施設、資料の保管・取り扱い、展示などについて、現職の学芸員から実地の指導を受け、館務の実際を学ぶものです。この実習では、博物館における館園実習に加え、事前・事後指導を受けることが必要です。

① 館園実習を行う博物館施設

「博物館実習2」(館園実習)は、大阪歴史博物館、大阪公立大学附属植物園および大阪府立弥生文化博物館の3施設ほかにお引き受けいただいています。また、履修者の希望するこれ以外の博物館で実習することも可能です。その場合は、当該博物館での実習受け入れの可否や要件を早めに確認し、各自申し込んでください。履修者は、自分の専門性に合わせて実習先を決定してください。

② 履修登録と博物館実習2(館園実習)ガイダンス

「博物館実習2」(館園実習)の日程は、前期の履修登録期間にはまだ決まっていない場合がありますが、履修予定者は必ず登録を済ませてください。

ガイダンスを4月に開催します(「博物館実習1A」の初回を予定)。「博物館実習2」の履修者は必ず出席すること。各館の実習日程を発表し、実習を受けたい博物館施設の希望調査などを行います。

この実習では、実際の資料の取り扱いなど、学ぶべきプログラムが各館において組まれています。したがって全日参加が条件となります。欠席日があった場合は不合格となります。また、各館の受け入れ人数に定員があるため、希望者多数の場合は、履修状況を基準に選抜を行います。

③ 館園実習履修者の決定

ガイダンス後、実習先を正式に決定し通知します。その後、実習開始までの間に、どうしても都合が悪くなった場合は、取り消し手続きが必要です。できるだけ早く文学部教務担当に必ず申し出てください。

④ 事前・事後指導

「博物館実習2」は、館園実習への参加だけでなく、必ず事前・事後指導を受けなければなりません。事前・事後指導は、「博物館実習1A」の最終回および「博物館実習1B」の初回に行います。事前指導を受けなかった者は、館園実習に参加することはできません。「博物館実習1A」「博物館実習1B」の単位を修得済みで、当該年度に「博物館実習2」のみを履修する者も、事前・事後指導に必ず出席してください。

⑤ 館園実習に要する経費

博物館実習には実習に要する経費（5,000円程度）が必要となります（一部博物館施設をのぞく）。

⑥ 館園実習の注意

「博物館実習2」は、学外の博物館施設にお願いし、受け入れてもらっているものです。遅刻や無断欠席は、受け入れ施設に多大な迷惑をかけることになるので、絶対にしてはいけません。また、実物資料を用いた実習においては、資料の取り扱いにくれぐれも注意してください。

繰り返しますが、「博物館実習2」は、館園実習に全期間参加し、かつ事前・事後指導を受けることが単位認定の条件となります。

■学芸員資格証明書

学芸員資格は、所定の単位を修得した上で大学を卒業することで得ることができますが、学位授与式で資格を有する証明書を交付することはありません。学芸員への応募等で資格の証明が必要な場合は、大学の証明書窓口で「博物館に関する科目の単位修得証明書」を申請してください。

博物館に関する科目表

区分	授 業 科 目 名				履修年次	備考	摘 要
	博物館法等による科目名及び単位数（注①）		左記に対応する本学提供の科目名及び単位数（注②）				
必修科目	博物館概論	2	博物館概論	2	1・2		注① 本欄の科目は、博物館法第5条第1項第2号に基づき、同法施行規則第1条第1項に定める「大学において修得すべき科目及び単位数」である。 注② 「博物館実習1A」「博物館実習1B」・「博物館実習2」を除く科目の単位は、文学部の自由選択科目の単位数に含まれる。 注③ 60名を上限とする履修制限がある。 注④ 「博物館実習1A」「博物館実習1B」を履修するには「博物館概論」を含む3科目6単位を修得していなければならない。前期科目「博物館実習1A」の単位を修得しなければ後期科目「博物館実習1B」を履修することはできない。（大学院生は、「博物館概論」を含む3科目6単位を修得済みあるいは履修しようとする年度中に修得できる見込みであることを条件に履修を可とする。）
	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1・2		
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	2・3		
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	2・3		
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	2・3		
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2・3	注③	
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報・メディア論	2	2・3		
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2・3		
	博物館実習			博物館実習1A	1	3・4	
			博物館実習1B	1	3・4	注④	
			博物館実習2	1	3・4	注⑤	
選択科目			日本史通論A	2	日本史コース、地理学コース、アジア文化コース提供科目および学部共通科目の項参照。（注⑥）	注⑤ 「博物館実習2」は、「博物館実習2」以外の必修科目の単位を全て修得済みか、あるいは履修しようとする年度中に全て修得できる見込みであることを条件とする。 注⑥ 選択科目は博物館学芸員資格を取得するにあたって、履修しておくことが望ましい科目である。	
			日本史通論B	2			
			地理学概論A	2			
			自然地理学概論	2			
			地 図 学	2			
			文化人類学	2			
			美術史通論A	2			
			美術史通論B	2			
			考古学通論	2			
			民 俗 学	2			

大阪公立大学文学部

TEL 06-6167-1515(直通)

MAIL kyik-lit-kyomu@ml.omu.ac.jp

<http://www.omu.ac.jp/lit/>